川柳塔



No. 880

九月号

0号

日川協加盟

第6回川柳塔まつり

〈同人総会〉

と き 9月24日(日)午前10時-11時

ところ ホテル・アウィーナ大阪 4 F 金剛東

(近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車・☎06・6772・1441)

平成11年度事業経過報告 • 同決算報告 • 会計監查報告 議事 平成12年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

<各賞表彰·記念句会>

と き 同 日 午前11時開場・午後1時開会

ところ ホテル・アウィーナ大阪 4 F金剛中・西

表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞 各地柳增當授与

兼 題「花 形」 (鳥取)鈴 木 公 弘選

「鮮やか」 (和歌山) 福本英子選

「憧 れ」 (鳥取) 小林 由多香選 (青 森) 波多野 五楽庵 選

「忘れる」 「白信」

(奈良) 宮口笛牛選

「むらさき」(事前投句・8月20日締切) 黒 川 紫 香選

◎各題2句・出句締切正午・4時半終了予定

会 費 2000円(記念品呈)一当日いただきます

<懇 親 宴>

とき同日午後5時-8時

ところ ホテル・アウィーナ大阪 3 F葛城

懇親宴会費 7000円(会席料理)

宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8000円 (朝食付)

○事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは締切りました。 記念句会・懇親宴には同人・誌友にかかわりなく、一人 でも多くの方々の御参加をお待ち申し上げます。

> 主催川柳 塔社

忸怩たり

橘高 薫風

本誌七月号は路郎先生の誕生と死亡の本誌七月号は路郎先生を偲ぶ読物が多月だけあって、路郎先生を偲ぶ読物が多かった。目次下の西村哲夫さん(孫)の乃のこと、桑原道夫さんの「路郎作品のリズム」の研究発表など好評だった。 いぶム」の研究発表など好評だった。 路郎を知る作者の少ない現在ではある路郎を知る作者の少ない現在ではある路郎を知る作者の少ない現在ではある。 いたして消え去るものでく人がある限り、決して消え去るものでく人がある限り、決して消え去るもので

では、先生のリズム感と、上句、中で講者に、先生のリズム感と、上句、中で思い出してのことである。 を思い出してのことである。 を思い出してのことである。

この句「雨の松本にて」との前書あり。

はない。私もそれに触発されて、教室の

強ければ以下の印象が弱くなってくる強ければ以下の印象が弱くなってくるのだ。「遠く来て」は強からず弱からずのだ。「遠く来て」は強からず弱からずると深めたのだ。これ以上の上句は無い。お元日坐るところへ坐らされこの上句は俳句でいう季語季題と同じ存在感を持つ。頭でっかちの重い上句だから、中句と下句との釣り合いが大切だ。その日ぐらしも軒に雀がこぼるるよ上句は七音である。しかしながら下句の適切な語彙に呼応して、字余りの違和の適切な語彙に呼応して、字余りの違和感はない。定型と同じリズムを保持する。者見給え菠薐草が伸びている

にしている。ちっともリズム感を損なわの句の中の一句だが、上句は強いて七音優秀なロンドン君を亡くした後の一連と迎えられたであろう。

理解出来ぬのだろうか。
呼びかける親の情が何倍にも増幅して受呼びかける親の情が何倍にも増幅して受めて余り、この「ネ」の効果は亡き子にぬ字余り、この「ネ」の効果は亡き子に

薄くするような上句であってはならない。えはない。中七下五の句の肝心な焦点を

雨天の松本駅に降り立っても山の出迎

への道が展ける。
とう五句を取り上げたが、中句下句も
を自で研究して頂きたい。桑原道夫さん
を自で研究して頂きたい。桑原道夫さん

無れている。この時、私は晩節を汚すと触れている。この時、私は晩節を汚すとってからである。押っ取り刀で選をして、たからである。押っ取り刀で選をして、たからである。押っ取り刀で選をして、たからである。押っ取り刀で選をして、たから性促たる思いがした。かけがえった。続いて序文を書く。資料を調べる余裕なく思いつくままだった。原稿を送ってから忸怩たる思いがした。かけがえってから忸怩たる思いがした。かけがえない親友の悪口を言っている。短所に表記して、

に至言である。

はこの事だと実感した。

上句の斬新さは大正時代には希有のものほうれん草のバイタリティーに重なる。

『川柳雑誌』発刊前の昂揚した心情が

加を得て確かな一歩を踏み出したい。の隊伍も整えねばならない。大方のご参来世紀への新しい出発に備えて川柳塔社来世紀への新しい出発に備えて川柳塔社



義理を欠いて下さい

波

多 野

Ŧi. 楽 庵

世の義理を欠きなされ、 古希、 理を欠く事は長寿の秘訣か 行をいただいた「大兄も 年賀状に友人から有難 もうこのあたりで浮

四回、 ライオンズクラブ五回、講義が二回、 気力の限界をおぼえはじめている昨今では一 雨読をしていられる筈であるが環境が許して る事になる。 いが友人の一行に悟る物があった。 遜な考えからして間違っているのである。 のだろう。大体自分が居なければ、という不 番最初に必要なのはこの義理を欠く事にある 五月の予定表を見ると川柳関係の外出六回 三十一日の間に半分以上は外出してい しかし若乃花ではないが、体力と この義理がなければ悠々の晴耕

この句 川柳塔

この人

橘 橘

高

風

: : :

義理を欠いて下さい

忸怩たり

同人吟)

波多野五楽庵

2

高薫

選

4

橘

高

風

î

III

柳

塔

九

月

号

目

次

題字・中島生々庵/表紙・直原玉青

もしれません」。

別に私は義理固い方ではな

自選集

川柳の群像

奥谷弘朗......

東

野

大

八

:

54

49 48

誹風柳多留二

四篇研究

21

前 橘 河

たも

:

58 87

二十年前に十七もの肩書きに耐えられず弘

いつの間にやら

内

天

笑

選

:

60 56

高

風

秀句鑑

賞

水煙抄 同人吟……… 大空のこころ

(116)

水煙抄

	↑ どん底を体験してる強い意志 谷口 私の句	▲ 貧しさに慣らされ心豊かなり (鬼			■編集後記 みつ子・楓楽	九月各地句会案内	柳界展望	各地柳壇(佳句地十選/舟渡杏花)	八月本社句会	イタリアの旅 安藤寿美子・藤	孫自慢 桜井千秀・木村あきら・山門幸夫・菱	■私の川柳 イメージホール・椿野 八 木	初歩教室「弾む」 吐 田	読 む」 石原	粧」 志田	風」乾
T					子					·藤田泰子	·菱田満秋	千		淑子	千代	隆風
15	義	遊	M		楓楽					黎子	滴秋	代	_	選	選	選
1	男				÷	i	i	i	į	÷	:	:	;	:	;	:
	L	•	1	ı	128	126	124	108	104	102	100	98	96	95	94	94

も受けとれる団体もある。も受けとれる団体もある。素直に認めてくれる団体、役員が来てある。素直に認めてくれる団体、役員が来である。素直に認めてくれる団体、役員が来でいためにも家庭の事情により、が一番無難で

茴香の

花……

西出楓楽選 …

92

っしゃる噂を耳にする。決してお丈夫でない しゃる噂を耳にする。 決してお丈夫でない 育成につとめている。 この後継者の育成が物育成につとめている。 この後継者の交替をお願 を許してもらい、若い人に選者の交替をお願 を許してしめる、これが義理を欠く一歩でもあろう。 薫風様が無事退院された、とのおもあろう。 薫風様が無事退院された、とのおもあろう。 薫風様が無事退院された、とのおもあろう。 薫風様が無事退院された、とのおもあろう。 薫風様が無事退院された、とのおりでは、一様である。 としてお丈夫でない

出来ないつらさなのかもしれない。出来ないつらさなのかもしれない。

うに。 しかしシステムの改革によってはそのいくしかでも御負担が軽くなられるようにしてさい上げるのも同人のつとめでもあろう。願わし上げるのものはが軽くなられるようにしてさいかしシステムの改革によってはそのいく



唐津 市 仁 部 几 郎

摩訶

か傾い せる金

ている写経

量な顔 の字がなぜ

見合わ

魚

親孝行してあげなさい燕さん

とかたもなく消えてゆくきれい

な死

藤井寺市

鴨

谷

瑠美子

子供だって朝飯前で嘘を吐く 毎 日の些細なことが生きる術 タイミング失してケチな金となり

国会の時計で時を合わせない 下り坂急ぐな何か忘れるぞ

敵役町内会で買って出る

市 桑

堺

原 道

夫

ふわふわのソファー過ち起きそうな 罪深い悪女になれば逢えるのに 恋人が素敵で命磨い

てる

日帰りに程よいカバン買ってある

夏の夜の夢の遠くに蛍飛ぶ 好き嫌いには妥協せぬ天秤座

羽

曳野

Ξ

好

専

平

ず 市

光

仮

面

夫

枚方市

栗

林

社長にはいいことだけを知らせとく

七歳平均点がとれました

枝豆をわが口中に飛ばしけり

鷲摑みにしたい雲ある敗戦忌 木曜日君は朴念仁である

倭しうるわし帰化植物が咲き誇る

恋人は夜のプールの句

63 する

下駄箱の

中に凶器になる物が

おたがいの我慢を愛と言 肝心のときにティッシュのないつらさ すこしずつ飲めとは酒を知らぬ奴 飢えた人捨てて宇宙に出かけるな でもか ぶらなければ生きられ いかえる

橘 高

董

風

選

4

水田に映りし空や他人の訃みんな死ぬんだ写真でも撮り提灯のひとつ点らず夏祭り 私 窓開 風鈴 年経 孫娘よそれで充分美 殺される前に殺そう夏月夜 とぼとぼと命見つめ どうしても 暑に負けぬ気概持ちたく本を選る 繕うてあとどれほどの 西 夾竹桃の朱の 風 死 日 呂 、月や重 、形を殺したことがありますか 顔 かい 0 ぱり元 の中 ガンだと医者の口 けて大夕焼けを招き入れ なる今年も半ば過去となり ても 場 な死ぬんだ写真でも撮 のような寝顔を撫でている からお隣 炎暑の を呼 い思いがつもる月 の塔は孤独を凜と抱く ビール飲みたくなる夕べ に戻らな び あざやかな恋なり 戦 の子 出すランド 野夢を見る î 0 て一人行く V 一が言 時間かな 泣 目をいとおし < ŋ Va 七 時 まし 間 ル 尼崎 尼 神 原 崎 戸 市 市 市 市 む 岩 小 春 春 本 城 城 林 笑 武 年 庫 子 代 坊 夫 賞品 長男の 手の 携帯で 夕焼け もう 金魚 言:泰 霊山 半 伊能 古ネク F 小 遺 仕 V 手術室ぐるぐる 同病の会あり 年よ ンガ積 0 伝 Ħ 送 ち 木に 子 ず 0 ウ ŋ 下る時 誰も 先にあるのが富士と言う 0 0 が飲 オー タイ借 る 僕 が 一つ自問 扇 の礼 雨 匹宿 意地母さんは俺 恋を育てているらし 和 ほどの 六十 念想 っこり が十七だったとき ひとり遊びに立ち止 子ひろげて我れ盤寿 也 紙 10 ない土 少し め ク日 命 K に も草 路 自答 本 0 小さな森 よ打てよと唆 無口会はなし りてく孫のアル い叶うなり 咲い 0 0 天 赤 本を縫う夏帽 ビッグに 軽 坂の の話 さで縁を切 書 葦 曜 井 Vi 七母 た夏 日の になる 伍 転 がみ があ め将 か の恋 雨 U 0 なるために n 河内 見え 3 る す 棋 芸 ょ まる る 子 15 ガイド 長 (八十一歳 (八雲紙漉き体験 吹 町 イト 野 田 田 市 市 市 Ш 加 竹 島 本 内 希久子 紫 由

錆

小さな味方 風鈴が鳴りだした	傘の内あじさい色の内緒ごと	松江市 川 七	のどごしのいい言葉選る見舞客	水入りの相撲見られぬのも時世	淋しくて水増し愛と知りながら	筆不精輪をかけているニューメディア	土産の名水花に		西宮市 秋	囀るの好きです仲間寄り合うて	月曜は土曜と違う欠伸出る	児と同じ顔でふくらす紙風船	お金なくてもコーヒーは飲みにゆく	うなる命	戦争を生きた命の消えんとす	吹田市 古		洗いつ	手づくりの何一つない玩具箱	自由の空が老いに重たくなってくる	父の忌をコンチキチンと天寿なり	過去未来ここで溶け合う蓮の池	豊中市 吉 日
		本							元							Ш							田
		畔							てる							喜美子							あずき
夢で呑む酒はいつもの二日酔い	短めの夏に狂っているネプタ	長短の短所を包むオブラート	忍の字をたどれば皺が伸びてくる	酸欠のリズムに狂う新世紀		:	覧	に重なる黒	両方の理由にすこし嘘がある	正すべく鏡に左右まえうしろ	下書きをしてお見舞いを書いている	1000年	西宮市 女 剣 富喜子	五体満足五人の孫に囲まれる	泣きたくて音痴で唄う枯れすすき	感動を貰う返事がまだこない	百選の滝で緑のシャワー浴び	八月が忘れられない鶴を折る	恋しくて一気に咲いた曼珠沙華	鳥取県 土 橋 睦 子	誇るもの未だあり流す汗光る	切り捨てていくと薄ぼんやり情け	情深し芹は這いつくばっている

口 次 男 疲れると耳の奥から蟬の声 オーイ雲私を置いて行かないで 精浜市 菱 田 満	日が沈む男と女のシルエット	言い返す勇気を持たぬほたる草	造花には子孫を残す気ないらしい	出雲市 小	頼りなさ まとわりついてくる雨期よ	幸せな背なにさよならいい易い	楽観をつつしむサミットが終わる	からまって零余子自在に話すなり	が夕日	-	12	好きだよと一言いった僕のミス	ョンチョンチョ	鼻こ耳こピアスは楽し茶髪の子	車	隣も青春切	毎雨青れのヘリコプターは音もよし、東方閣市、打	位 日 考に 争くない のか ヒー 川 貸 む	出奏は書 よいり が シス 訪点 彼好に 違う 顔と顔	J売気放か:10 頁:頁 あれ稲も鉢植えされるご時世に	猿 熊も買い物なのか繁華街	いけないと猫も知ってる人殺し	土壇場で決意促す汽笛鳴る	鳥取県 谷
渡れると耳の奥から蟬の声 オーイ雲私を置いて行かないで 雨が降る傘を持たない六地蔵 輪王寺竜も金歯を入れている 陳列を見てきてメニュー読みなおし 少年に自販機が売る酒煙草 乗って読み降りてケイタイまた覗き サラ金のティッシュも元気だからくれる サラ金のティッシュも元気だからくれる でからこ日酒呑んでない死にそうだ 伸びきった凧を引っ張る父の背な 情けない話パンツを前後ろ 下町にまだ生きている貫匁 下町にまだ生きている貫匁 大阪市 鶴 原爆忌亡父の分まで呑んでやる 嫁の前声半分で孫叱る 去され節酔生夢死を意見する よされ節酔生夢死を意見する 大阪市 鶴 田				玉													行	Ē						П
渡れると耳の奥から蟬の声 オーイ雲私を置いて行かないで 雨が降る傘を持たない六地蔵 輪王寺竜も金歯を入れている 陳列を見てきてメニュー読みなおし 少年に自販機が売る酒煙草 乗って読み降りてケイタイまた覗き サラ金のティッシュも元気だからくれる サラ金のティッシュも元気だからくれる でからこ日酒呑んでない死にそうだ 伸びきった凧を引っ張る父の背な 情けない話パンツを前後ろ 下町にまだ生きている貫匁 下町にまだ生きている貫匁 大阪市 鶴 原爆忌亡父の分まで呑んでやる 嫁の前声半分で孫叱る 去され節酔生夢死を意見する よされ節酔生夢死を意見する 大阪市 鶴 田				満													7	<u>-</u>						次
ると耳の奥から蟬の声 イ雲私を置いて行かないで 特高傘を持たない六地蔵 降る傘を持たない六地蔵 降る傘を持たない六地蔵 降る傘を持たない六地蔵 を見てきてメニュー読みなおし に自販機が売る酒煙草 に自販機が売る酒煙草 で読み降りてケイタイまた覗き 金のティッシュも元気だからくれる 要知県 早 川 ない事ばかりなり広辞苑 ない話パンツを前後ろ にまだ生きている貫匁 たと息子を許す過去があり だと息子を許す過去があり がと息子を許す過去があり がと息子を許す過去があり だと息子を許す過去があり たと息子を許す過去があり を可息子に逢えばする意見				江						ī	茜						17	2						男
遠	夫似の息子に逢えばする意見	よされ節酔生夢死を意見する	法善寺弱い男を演じさせ	す過去があ	の前声半分で孫叱	原爆忌亡父の分まで吞んでやる	大阪市 鶴	町にまだ生きている貫匁	ない話パンツを前	きった凧を引っ張る父の背	酒吞	間のなかの	ない事ばかりなり広辞	知県早	のティッシュも元気だからくれる	覗き	少年に自販機が売る酒煙草	ュー読みなお	寺竜も金歯を入れ	など言うたら妻が涙ぐ	浜市 菱	が降る傘を持たない六地	イ雲私を置いて行かない	蟬の
							遠	2 6						盛	£						満			

野

夫

秋

銅像の遺訓を挫く資本主義	宮司では食えず園長兼務する	あの女の唇には毒が塗ってある	蕎麦好きが嵩じて麺棒握り出す	善人が住んでる町の灯が早い	唐津市 山 口 高 明	棘のある言葉ニコニコ聞く夫	躁と鬱落差激しいママの味	老人への道を転げる脳と脚	賜わりし命ミレニアムベビーとか	賞味期限関係のない丈夫な胃	唐津市 市 丸 晴 翠	おみやげはないが笑いが膳に乗る	あっけらかんと少女が渡る丸木橋	いいかげんな歳とはいくつからだろう	アリランのコーラスを聞くミレニアム	生臭いネガが落ちてる選挙カー	唐津市 久 保 正 剣	日記帳今日も反省語が並び	ふと鏡見れば出涸らし茶を思う	病棟のベッドで眠る諦観度	入院三日夜と昼とが狂い出し	演技してまるく治める嘘を言う	熊本県高野宵草
乾杯をすべきか迷うヒトゲノム	浴室に手摺りを思う苦笑い	句なじみに憧れがあり読み返す	陶冶かな俺と影とがせめぎ合う	始皇帝の願いがわかりかけて来た	唐津市 井 上 勝	永劫に不作と思ううちの嫁	鉛筆を舐め舐め自民と書いて来た	棘抜けば同じ血が出たキムとキム	お招ばれに心も軽く身も軽く	恩愛の絆で結ぶ戦友の会	唐津市 樋 口 輝	岐路に立ち下駄蹴り上げて決めた道	短冊も昼寝している暑さかな	世は変だ梅雨明けせずに秋の虫	夏休み帰るからねと梅雨の鬱	梅雨最中紫陽花だけはお洒落する	唐津市 山 門 夕	綻びを繕う術がない世相	一日一詠生き甲斐という柳友が居る	朝顔の一輪また一輪に恋がある	こだわりの朝餉のレタス老妻と摘む	手作りの茄子や胡瓜の艶と味	唐津市 山 門 幸
					視						夫						111						夫

自家野菜ナスもキュウリも日本一お隣は帰唱夫随で仲が良い思い出は心の中にロックする思い出は心の中にロックする	を 大延の祖父昭唱の国づくし 方延の祖父暗唱の国づくし を ががれているではないに生き 大延の祖父の教えはむねに生き を がはかるがいるがいる。 を はないるでしてもそしらぬ孫ばかる。 はないるでは、 はないるではないるでは、 はないるではないるでは、 はないるではないるではないるでは、 はないるではないるではないるではないるではないるではないるではないるではないるで	長回診工合どうです。長回診工合どうです。	と視界が広くない クラスを締めて 役に違和はない 合理が淋しがる 北九	唐津
	県り	市	市る	市
	赤	北	梅	宗
	Щ	Щ	田	
	菊	竹	宣	水
	野	萌	司	笑
声にして! ばあちゃ だっぽけ	雲 一 不 確 い 蛍 雪 の 態 ず か ば ご	六一ア亡問十匹ン母題	見 石 ポ い し 極 橋 ケ ら あ	
にして言わねば愛も届かないあちゃんにお声が掛かる出産日みなど吹っ飛ぶ妻の笑い声されているのかここち良い台詞されているのが	雲百態風はドラマを書き換える一先ずは鬼と手を組む四面楚歌不確かなものの一つに僕の椅子いくばくの余生耕す辞書を買ういくばるのの一つに僕の椅子は雪の時代を生きた硬い骨	路とていつが解けず親	香川からないではともかく傘の下かるまではともかく傘の下がるまではともかく傘の下ぬるまではともかく傘の下ぬるまではともかく傘の下めるまではともかく傘の下めるまではともかく傘の下	松山市
ねば愛も届かないお声が掛かる出産飛ぶ妻の笑い声のかここち良い台	を書き換えるを書き換える	路とていつも心は青春だの蛍にはしゃぐ子等の群の蛍にはしゃぐ子等の群が解けず親子で悩みおり	香川県の小銭しがない音をたて トの小銭しがない音をたて トの小銭しがない音をたて とばかり詰った記憶力	Ш
ねば愛も届かないお声が掛かる出産飛ぶ妻の笑い声のかここち良い台	を書き換えるを書き換える	路とていつも心は青春だの蛍にはしゃぐ子等の群の蛍にはしゃぐ子等の群が解けず親子で悩みおり	をまではともかく傘の下いがず次男飛び越えた の小銭しがない音をたて をまではともかく傘の下	山市

常連の今日も始まる酒談義	タイミングずれて記憶が湧いて出る	夏雲に負けてたまるか鍬を振る	マイナスの座標が僕を好きという	午前五時起床の癖がつき無職	竹原市 古	飛行機で来ても木馬に順があり	開け放ち月の出を入れ灯を供え	干し竿たわむほどの家族と切る西瓜	白桃の色香を言うて笑われる	超ミニのそれは眼のせいだけでなし	竹原市 三	犬小屋の掃除が終り犬を呼ぶ	犬の歯一本 宝石箱に入れておく	犬の目よ僕を家長と見ているか	小犬と遊ぶ向日葵の背のまだ低き	土曜日の夜は帰って来る長女	竹原市 小	平行線どこまで意地を通す気か壊れたらどうしましょうか虹の橋壊れたらどうしましょうか虹の橋	窓明り覗いてみたい好奇心	美称市 安平次
					谷						宅						島			次
					節						不						蘭			弘
					夫						朽						幸			道
女ひとり洗い続ける業の皿	屑篭へねじる	孫笑う一番	雑巾をきつ	丁寧に小骨		忘られん	これぽちか淋し	無駄なも	頑張ろう	勇退の文		父のさ	竹垣の	七夕の	参院選	火の神		新聞を読み かかる世へ を読み	百歳に	
続ける業の皿	ねじって捨てる老いの愚痴	番星の見える窓	雑巾をきつくしぼって負けている	丁寧に小骨を抜いて女です	倉敷市	忘られん苦渋八月めぐり来る	か淋しい満期保険金	無駄なもの仰山背負い老いを知る	ろうたより末尾にけしかける	の文字の淋しくひっかかり	岡山市	父のさす傘の広さを過信する	い男結びにある文化	七夕のササに履歴書吊る不況	参院選でねじれを起すほかないか	行の鎮まり給え伊豆の島	広島県	新聞を読み終えやっと朝が来るかかる世へ我慢強さを誉めてやるDNAのせいにして置く夏太り超大国日本に恥が多過ぎる	歳になっても化粧する女	竹原市
続ける業の皿	の愚	星の見える窓	くしぼって負けている	を抜いて女です	倉敷市 小	苦渋八月めぐり来る		の仰山背負い老いを知る	たより末尾にけしかける	カン	Ш	す傘の広さを過信する	い男結びにある文化	いササに履歴書吊る不況	13	の鎮まり給え伊豆の	広島県 藤	読み終えやっと朝が来る世へ我慢強さを誉めてやるのせいにして置く夏太り	なっても化粧する女	竹原市 森
続ける業の皿	の愚	星の見える窓	くしぼって負けている	でを抜いて女です		苦渋八月めぐり来る		の仰山背負い老いを知る	たより末尾にけしかける	カン	山市	す傘の広さを過信する	り男結びにある文化	いササに履歴書吊る不況	13	の鎮まり給え伊豆の	県	読み終えやっと朝が来る世へ我慢強さを誉めてやるのせいにして置く夏太り	なっても化粧する女	
続ける業の皿	の愚	星の見える窓	くしぼって負けている	を抜いて女です	小	苦渋八月めぐり来る		の仰山背負い老いを知る	たより末尾にけしかける	カン	事 井 上	す傘の広さを過信する	り男結びにある文化	いササに履歴書吊る不況	13	の鎮まり給え伊豆の	県藤	読み終えやっと朝が来る世へ我慢強さを誉めてやるのせいにして置く夏太り	なっても化粧する女	森
続ける業の皿	の愚	星の見える窓	くしぼって負けている	を抜いて女です	小野	苦渋八月めぐり来る		の仰山背負い老いを知る	たより末尾にけしかける	カン	出 井	す傘の広さを過信する	り男結びにある文化	いササに履歴書吊る不況	13	の鎮まり給え伊豆の	県 藤 解	読み終えやっと朝が来る世へ我慢強さを誉めてやるのせいにして置く夏太り	なっても化粧する女	森井

泣いていた涙でずれて来た仮面	6Bもポロポロ折れて柳友が逝く	牛乳に黄な粉を入れる妻の愛	ひっそりと独り咲く合歓山の父	生きてゆく都合で言える言えません	岡山県 小 林 妻	潮どきの気運に乗った優勝旗	あげさげを互いに妥協する夫婦	子の世界空を覗いてばかりいる	老いた樹は風の心を聞き分ける	聞き直す耳の怖さよ告知とや	岡山県 福 原 悦	耕せば土もドラマの数知れず	一幕のコントで終った長い旅	労しても功なき日々を老いていく	正直なカメラに暫く気が滅入り	恵二朗 好啓しのぶ手許の遺影遺句	岡山県 矢 内 寿恵	風は無情命一つを横抱きに	忙中閑昼寝をさそう雨の音	裏切らぬ時計と生きて来た命	物好きのふところいつも素寒貧	遠回りして美しい花に逢う	岡山県 山 本 玉
					子						子						寿恵子						恵
赤ちゃんの笑いが梅雨を晴れさせる	ネムの花語りあかそう月よんで	粽まく里は平和な半夏の日	旅ブーム私も赤い靴をはく	この願いやっぱり七夕晴れている	出雲市富田	可愛げに呆ける苦労をしています	うつむいた仏に供える茄子の馬	合わせ飲む清濁人間続けます	沙羅の花明日の約束反古にする	独り言ではない遺影頷いた	出雲市 園 山	まほろばでか細い息が嗚咽する	コミカルを売って醜い裏の顔	すぱっと切るすっかり男になっていた	かっかっとなさってますね人間味	平伏して靡いてもつんとする過去	松江市 安 食	暗やみを抜けて小石を蹴っただけ	脳は錆びても生命線は欲深い	なつかしく記憶をたどるねむれぬ夜	他人には小さきことよ我が涙	かけ声で老いのたのしみ消えて行く	岡山県 富 坂
					田						Щ						食						坂
					蘭						多賀子						友						志
					水						子						子						重

開店の列にのんびり並んでるいたずらが少し過ぎたか覗いてるよそ行きの顔には子供寄りつかぬはそける盆帰省	はおずきが赤くなったよ原爆忌 古日記ときどき出して陽にあてる スランプを抜けるつもりの一人旅 故郷に蛍と遊ぶ水がある かの穴わたしの自信通さない	展つぼ半分乾いてホタル狩り おり合いにめったに使わぬ皿を出す を受のないことで怒ったり笑ったり を出するがら決める寄附の額 を出す	出雲市 東夜中の煙草に問うてみる昔 東変の下 人は居ず行き交う車 で安そうに点滅をする信号機 で安そうに点滅をする信号機	出雲市
3	久	岸	吉	ケ
i i	谷		岡	台
	ح	桂 子	きみなし	5
子が泣いてうっかり老母の手を放すれ盃に涙を浮かべてはならぬれ盃に涙を浮かべてはならぬないとして雲は流れていくだろう	格別の暑さ私の誕生日 を はみっこない荷を二つ送り出す を で の の を で の り の り は た の し む 紙 の 数 に し る と る る る る る る る る る る る る る る る る る	山肌をけずり高速バスの風植田はや水面をかくすみどり太陽を独り占めにする朝仕事太陽を独り占めにする朝仕事	寄せた波キッス束の間引き裂か 新麗だとほめる花火は泊り客 毎角の長い話にポチも飽き 要無言やがて爆弾爆破させ 飛んで欲し飛ばずに欲しい蛙の	
手を放す	出す島根県	の風り風いの川り風を見れている。風いの風いは、風いは、風いは、風いは、風いは、風いは、風いは、風いは、風いは、風いは、	蛙 客裂	出雲市
1000	根県	風 ど 仕 温 川 り 事 膝 根	生 客裂かれ 調素市 小	出雲市 仮
*	根県松	風 ど 仕 温 川 り 事 膝 島 根 県	生 客 裂かれ 引 水白	
*	根県松本	風どり事験の風が見る。	生の子出雲市小白金	反

は の は の の の の の の の の の の の の の	真夜中の咳に鼾は起きていた 真夜中の咳に鼾は起きていた なとときのお茶晴眼の頃聞かす がとときのお茶晴眼の頃聞かす	泣き笑い八十九になりました 見えずともしたたる桃のおいしさに 見えずともしたたる桃のおいしさに をきどきは国を守った胸を張る ときどきは国を守った胸を張る	島根県
			堀
田	藤	江	江
帆	寿	芳	正
雀	美	子	朗
夏祭りゆかたの柄に凝る娘たち 夏祭りゆかたの柄に凝る娘たち 真急にほっと筆を取る か護終え寝息にほっと筆を取る	鳥取市 福海の大学のでは、	は は は は に は に は に は に は に は に は に は に は に は に は に は ら も こ に 切 り 替 え る も こ に 切 り 替 え る る は に は ら に は ら に は ら に は ら に に は ら に に ら に に に に に に に に に に に に に	鳥取市徳
益	田 登	宣	田ひろこ
	島取市 武 田 帆 雀 夏祭りゆかたの柄に凝る娘たちにたら泣きそう文字にする思い したら泣きそう文字にする思い の白老残を悪びれず 行護終え寝息にほっと筆を取る 再会は皺の心を和ませる 再会は皺の心を和ませる 再会は皺の心を和ませる 手会は皺の心を和ませる すらに生きた証が皺になる 美しい流れに磨く青い過去	なしの白老残を悪びれず 息根県 伊 藤 寿 美 でういい雨に落ちつく午後のお茶 中の咳に鼾は起きていた 自根県 伊 藤 寿 美 一方護終え寝息にほっと筆を取る したら泣きそう文字にする思い したら泣きそう文字にする思い 自根県 伊 藤 寿 美 一方護終え寝息にほっと筆を取る したら泣きそう文字にする思い 自根県 伊 藤 寿 美 一方護終え寝息にほっと筆を取る 自取市 自取市 自取市 自取市 自取市 自取市 自取市 自取市	英い八十九になりました くらやみを押してる車椅子の音天心豊かに深呼吸 くらやみを押してる車椅子の音子ともしたたる桃のおいしさに チャンネルをさくらももこに切り替えをのお茶であると花も泣く 島根県 堀 江 芳 子 退院のみやげにコントもち帰るのいい雨に落ちつく午後のお茶 病院の薄い空気を吸っている中の咳に鼾は起きていた。は生きる力と褒めてます。島根県 伊 藤 寿 美 しい流れに磨く青い過去すらに生きた証が皺になる で人の笑顔は桃のやわらかさっは生きる力と褒めてます。島根県 伊 藤 寿 美 しい流れに磨く青い過去でらに生きた証が皺になる がきとしたいわたしの試着室 がきとしたいわたしの試着室 がちとしたいわたしの試着室 がきな人がやたらと翔びたがる したら泣きそう文字にする思い なしの白老残を悪びれず 鳥取市 武 田 帆 雀 夏祭りゆかたの柄に凝る娘たち 鳥取市 武 田 帆 雀 夏祭りゆかたの柄に凝る娘たち 鳥取市 武 田 帆 雀 原外のかたの柄に凝る娘たち 鳥取市 武 田 帆 雀 原外のかたの柄に凝る娘たち りまかったりますどもといったこころ き取市 なしの白老残を悪びれず 鳥取市 武 田 帆 雀 原外のかたの柄に凝る娘たち りまかったりますどもしたいるといる は かったり は かっと かっと かっと かっと かっと かっと かっと かっと かっと かっと

生きざまと言う吊り橋を渡り切る 生きざまと言う吊り橋を渡り切る 大腐が帰れかえれと身をかくす 二一枚割って命も恋も捨て 弱いとこ見せあってから仲がいい 弱いとこ見せあってから仲がいい 弱いとこ見せあってから仲がいい 弱いとこ見せあってから仲がいい 高取市 前 田 一 枝 が開れかえれと身をかくす 二一枚割って命も恋も捨て 温取市 前 田 一 枝 のが魅力切ないタイガース 鳥取市 香 木 圭一郎 弱いとこにある 弱いとこにす男が花になる 鳥取市 香 木 圭一郎 弱いとこにす男が花になる 鳥取市 香 木 圭一郎 高取市 香 木 圭一郎 高取市 香 木 圭一郎 高取市 香 木 圭一郎 がいとこにす男が花になる 高取市 西 村 黙 光 のが魅力切ないタイガース 鳥取市 西 村 黙 光	鳥取市 夏 目 健 一
とけていく試着室からかかった魔法 不用品リサイクルだよ宝島 退屈な非常袋を衣替え ハーモニカみどりの風の中にいる うちとけた話おでんも煮えてくる コーヒーにうるさい幼馴染です ふたまたをかけて男が逃げてゆく 月満ちて埴輪昔を語りだす シンマ知る枯れる重さの喜寿迎え を想の家が小高い丘に建つ 空想の家が小高い丘に建つ 空想の家が小高い丘に建つ 空想の家が小高い丘に建つ 空想の家が小高い丘に建つ を抱たなった頑固も好々爺 伝えたいことが一ぱい花手桶	鳥取市 石 上 悦
子樹子	子

ナイチンゲールの蜻蛉すいすい野分き立つ月の子を孕んだ松は亡姉でしょうかれは海の子歌いドライヴするひとりをが更けて人形も椅子で脈を打つをが更けて人形も椅子で脈を打つ	かさ	和な町にずばり飛び込む活火山和な町にずばり飛び込む活火山を住めば都の夏燕のままで芽吹く椎	なし姑はいきなり喧嘩吹っかける は千度通うて下さった は千度通うて下さった は千度通うで下さった
本っ	•	山	山 米
		中	本田
瑞	1	康	玲 幸
枝		子	子 子
大落日に明日の活気を呼びよせる行く先もきかずに船に乗っているたわいない話がはずむ凡夫婦のんびりと船路たのしむ筈だったのんびりと船路	縁日の金魚は躁になっている。 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	米子市 機熟続いて徐々に向こうへ流される 投げ切ってもう切札が使えない 投げ拾てる訳にもいかず鬼瓦 でだ看取る棒のように眠るのみ がだる訳にもいかず鬼瓦	米子の といの大輪みどりさんに似る から元気で働き回る子へ不安 から元気で働き回る子へ不安 から元気で働き回る子へ不安 から元気で働き回る子へ不安 おしゃべりな花より山野草の無口 おしゃべりな花より山野草の無口 おしゃべりな花より山野草の無口
ません 米子市	る切	きれぬ髪飾り が使えない が使えない 米子市	対草の無口 大切に似る 、不安 米子市
せゆ いっ米る るた子	る切に		
せゆ いっ米	る 切 に	米 さい み 飾 り 市 る	米似に に無米子市 市
せゆいっ米子市野	る 切 に	米さいみ 飾り	米似に に無米子市 政 青

指の先多様に変わる和紙の芸若い風いつか一緒に華やいで肚の中善と悪とを飼っている一期一会自分史つづる時過ごす	本学市 木 村 春 枝を選の供託金は俺のせい 米子市 木 村 春 枝を選の供託金は俺のせい とした妻に盆灯す	米子市 本 吉 宗 光でである。 大学市 本 吉 宗 光でである。 一次ではとは何か田舎の大ホールで、 まって来た。 まって来た。 まって来た。 まって来た。 まって来た。 まって来るサマーのスのジンタがつれて来るサマー	米子市 鷲 見 正 子海鳴りの響きのこして魚の骨 米子市 鷲 見 正 子海鳴りの響きのこして魚の骨 い文 海県の際いところに荒介さん	米子市 白 根 ふ み
メダカにも未来を分けてやってほしいアドリブで逃げるこの世の綱渡りグーチョキパーどれより強い銭を出すおまえなど死ねとカラスがやかましいちゅうーとはんぱやなあ 二千円札	かいぎるあ	米子市 門 脇 晶 子大山にいやされた日の三月半大山にいやされた日の三月半小ざかなが足裏つつく故郷の川 加菩薩の大山 私を抱いてくれ	半身赴任妻が淑女でいて欲しい 神の号令無党派層は縁がない 御那をひくのに新妻の許可がいる 単身赴任妻が淑女でいて欲しい 米子市 中 井 ゆ き 単身赴任妻が淑女でいて欲しい	米子市 中 村 金 祥

夕涼みゆかたの裾が乱れ出すりぶみゆかたの裾が乱れ出すなが動いて砂丘生きている風紋が動いて砂丘生きていると腰がそろそろスペア欲しくなり	おくやみ欄結ばれるはずだった人 おくやみ欄結ばれるはずだった人 なとこにも草虱 生変化する札束を抱いている	山ほどの苦労背負うている笑顔 これっきり逢えぬと思うさようなら これっきり逢えぬと思うさようなら はおずきがまっ赤 新盆近くなる		鳥取県 上 田 俊
	恵	e		路
自家製のワイン サラサラいい気分好まれるお巡りさんになれないか好まれるお巡りさんになれないか私の海は所得があがらない	通い合う人と思っている犬と 無我夢中てのひらの歩を忘れ去り 忘れようみんな羅漢となる仲間 忘れようみんな羅漢となる仲間	まの知りに少し反論したくなる 場羽蝶今日はいずこの花に眠る 髪染めて二十一世紀にいどむ をさわいで孫の波が引く	三世代同居は表札だけのことすっぴんの顔ざぶざぶと夏盛りすっぴんの顔ざぶざぶと夏盛りちょっとだけ夫の前を歩く癖	鳥取県
		岩	津	羽
	土			津
	土橋は	石崎みさ江	村	津川公

来た道を夕日まぶしくおつかれさん	標識にどやされ無事に着いたらし	ハイウエイしゃべりつかれたカンビール	防音の棚で目かくしハイウエイ	金の要る関所幾度ハイウエイ(花博へ町内でバスの旅 5句)	鳥取県 塔 寛 マ	振り返る生きたコースがジグザグで	故郷はいいなまあるい風が吹く	コンビ組む相手がよそ見ばかりする	野ねずみの巣があり草を刈り残す	厚化粧落すと若さ消えていた	鳥取県村上信	目薬で嚇す どうする痔薬なら	看護婦に愛想笑いはそぐわない	黄泉で遇う亡父は四十五吾は八十路	紫陽花の終の彩りととのえる	初咲きの朝顔グッドモーニング	鳥取県林露	石段を上れば見える青い海	流れ雲母をよろしく頼みます	表札にどっかり座る嫁もらう	うっかりと喋った内緒アワワワワ	歴史探訪趣味の一つで多忙なり	鳥取県 田 村 きみ子
					子						子						杖						子
木版画の仏像ぼくをはなさない	心やすらぐ博物館の絵にひたる	幸せが続けと子らに手を合わす	重さのちがう涙流して泣いている	いくら儲けたなど言わないで花が泣く	鳥取県	私の川には水も満満だ	元気かと問えばにっこりVサイン	尻尾ふる癖がいまだに直らない	フルムーン思い出の宿梯子する	島の回りはいつもさざ波たっている	鳥取県	つつしんで陛下わたしも卆寿坂	空っぽの頭へ訃報とや陛下	お手蒔きの松杉の苗わたくしも	引き揚げを迎えに出られ両陛下	妻に先立たれてからの五十年	鳥取県	菖蒲みて花花花に逢いにゆく	一本のバラに託した愛がある	穏やかになって心は満ちてくる	石一つ投げる元気を持っている	雑草の強さを知ってスケッチす	鳥取県
					さら						石						乾						橋
					さえき						谷						古						本
					やえ						美恵子						喜与						多哥由
					ż						学						志						由

鳥 取 県 吉 \mathbb{H} 孔 美子

幻

か ざわわ

じれ

ば

にぎわうポ めきをきくコ

ンペ

イが見えた

D

シアム

(イタリアを旅して)

小小 説 をヒ K 0 8 り込 1 攻 め 勢 ない 再 開 目 たぎ 0 事 情

図書 星 10 空に包まれて力をもらう つの日か 館を読破そりゃ 母 をモデル 10 0 10 娘だよ 物 を書 <

た家をじろじろ 覗 鳥取 県

3

サミッ

トの

宿に殿さまお姫さま

蔵に寝てい

た先代の

盆

提

灯

傾

11

降

乾

風

西も 機内食 美空ひ 瞼閉

東も

深

10

祈

ŋ

0

中

K

生

神戸

市

木

村

貴代子

少し ばりの

0

素麵

しく

t

歌

声 美味

D

1

7

0

街

角で

1

工

ス

1

どちらでもない

お偉方偉くないから世が乱

n 答え要る

より 利益優先する会社

命

リストラに大黒柱 が あ きしみ 出

0 さり負けて飛ぶ 3

横綱

とん 芦

屋 市 黒

能

太陽月 の片思 枚 のペ 43

H 切り

札

に

なる

_

1

18

\$

つの 帰 ŋ 命二つの 0 命夫婦 か

な

小心

で無宿の味をまだ知らず

麦わらであみ

夜を待

た

星

仰ぐ

遠くて心しゃんとする

星

仰ぐ二十

年位すぐにす

む

逆

縁

0

間

にめぐる走馬

灯

取

県

森

武

子

うらぶれしこころ鎮めて経

あ

げ

る

蛍 蛍

草紫に かご

咲き蛍待

0

病名の告 兀 気 でね 別れ 知命 が たままの 重 くなる

人

が

10

3

西

宮

市

林

は

絵

M きを

戸

市

中

村

四億 重 意 3 地 1 43 悪 1 で介護 F

ンと言

b

n

な

42

か

b

走

れない

をさせる訳

でなな

7

奉安殿

恐れ

父の

話

され 多い 高

ど幸 がみ 0

0

か か

2 20

た

Va

n

0)

泣 世

かせた数の

石 せ な逝 が

を積

有

難

中

女

人

野

塔

建

木 風

お

ば 中

さんみたいでしょうとお

ば

は

h かい

味 で老い 円 過去昼寝 欲 を諦 10 用 0) めさせられ 途 夢 かい かい ふと叫 引きず 3 0

> 市 Ш 口 美 穂

戸

-19 -

子

碁敵にやっとこ勝てて梅雨晴れに	プレハブにつばめの止まりよい住まい	疲れたら休めばよいと歩き出す	有難い命と癌に教えられ	持病もち一泊しない旅のうつ	西宮市 井 上 に	落日やきみに寄りそう影法師	小さな愛で毎日熟れるプチトマト	満ち引きの潮にたゆたうさくら貝	晩節の風を無情と思う日も	負を流しきれず乾かぬ傘がある	西宮市 門 谷 、	点てかたでこんなに違うお茶の味	ハイヒール一つ残して捨つと決め	青棚田に思わず会えた下り坂	老医師は午前診療だけとされ	さるすべり暑さに耐えた赤である	西宮市 山 本 弟	夫好みに慣れてかなりの偏食す	友達のある日敬語で礼を言う	外人さんにもてる和風の孫の顔	縁とや紫式部の実がこぼれ	地下道もあるが月夜の歩道橋	西宮市 亀 岡 哲
					松						たず子						義						哲
					煙						子						子						子
転た寝をガンと一撃する夏陽	夫逝って四度目迎える白芙蓉	貴方ならこそと神さまから試練	易者の灯さける私でいたいから	若かったあの頃思うさくらんぼ	尼崎市	余命表私はわたしといいながら	退院日何度化粧の鏡みる	南北の対話育ちて槿咲く	ペアルック無理やり着せるのは女	弱点を知ってしまってなお好きに	西宮市	カーテンを揺らすそよ風ちさな幸	決心に風は七彩味方する	逆風が風船乗せてくることも	向かい風 度胸決めれば運が向き	追い風をひたすら祈る星月夜	西宮市	水鏡女の顔がゆがんでる	地震情報遠くて近い日が浮かぶ	大花火空いっぱいに夏が来る	テレビからビールビールとそそのかす	生年月日書くと紛れもなくわたし	西宮市
					長						緒						奥				of.		西
					浜						方						田						口
					澄						美						み						4.
					子						美津子						みつ子						わゑ
											- :	20 -	12										

肝っ玉かあさん料理苦手とか	要領の良さも悪さも鼻につく	簡単にしてはならない四捨五入	冗談が通じぬ人と渋いお茶	梅雨冷えやたこやき買って昼にする	大阪市	投げてからあれこれ気付く負け将棋	土用波磯にとどろき夏終る	あの人のみやげはきっと海老だろう	暑さ来て海がますます青くなる	十年も経てば昔の事になる	兵庫県	好日の日日にもたまに震度3	国民は寝ていろ俺も寝言いう	気をそらす言葉に乗った蛍篭	泡飲んだとこから味になるビール	平常心変える気はない青い月	川西市	老いふたり三室の蓮とよみがえる	人恋し文箱を開けてひとり言	ふる里は遠いところで味方する	九月には秋の顔した風見鶏	赤トンボ今年もとまる指定席	伊丹市
					西						大						松						Щ
					出						谷						本						崎
					楓						幸次郎						ただし						君
					楽						郎						Ĺ						子
我もまた企業戦士ぞ顔洗う	参謀の娘の酌に頰ゆるむ	シベリアの心の傷を癒しけり	戦傷のケロイドほぐす熱海の湯	はじけ飛ぶ悲恋ヶ浜の波頭	大阪市	けったいな人だが娘が選った婿	宿敵がリベンジ企んでいる兆し	天の川下界は雷 火事 地震	胡蝶蘭飾る病院の医療ミス	年召された恩師は慈愛の聞き上手	大阪市	残り時間それは私の宝もの	欲が無い訳ではないが物忘れ	その元気少し下さい蟬しぐれ	怒られそうだから鰻をおみやげに	私の帰りを待ってたらしい顔	大阪市	無言電話へ声変えて出る老いひとり	なまはげに出向頼もか日本中	淋しがる人 人間らしいではないか	遠くを見る目黙ってことば選んでる	涙出そうで言葉呑みこむお茶いれて	大阪市
					岡						板						神夏磯						本
					本						東						磯						間
					久						倫						典						満津子

ま常時は困るが列島平和ボケ子 ・	非常時は困るが列島型	非常時は困るが列島平和ボケ大阪市渡	非常時は困るが列島平和ボケ大阪市大阪市
	阪市	渡	渡部

波 0 色変るマグマ 1 0 怒る海

茶柱 が立っ て良い日と口に出

じさい 満ちてやっと帰れる貝 に意地 悪され て熱続 0 宿 大阪市 町

H 達

子

黒レンガ分厚く積んでドンの家

青畳背負うた形して昼寝

極楽 やっと這いでた蟬 里 0 穴

蜩のなにやら哀し父母の がストライキして世は終

る

大阪市

田

中

節

子

散り急ぐ人それぞれに梅

雨

無

一の変り後半年の世紀末

友からの便り凌霄花が咲いたとか

愛染さんの浴衣まつりも済みました

あ

氷中の美女になりたし玉 0 汗

モナリザの微笑真似ても様ならず 独酌にまさるものなし冷奴

以心伝心独り暮しで紡ぐ夢

でしゃばらず驕らず丸いお月さま

大阪市

津

守

柳

伸

大江山越えて名残りのディ

ナー

1 3

水茄子が届き外食差し控え

饒舌な毒も興味をそそられる 近過ぎて会話不足の愛悲し

三吉と永井博士を積んで夏 くたばるな暑中見舞いに友の 味

大阪

市

JII

端

歩

近

|隣の花競い合い咲き誇

誰

か来た隣

0

四匹吠えまくる

大阪市

松

尾

柳

右子

熱唱のビデオ我が身の嫌悪感

梅

雨 0

布

団叩きにストレ

スを

八道雲高

V 太陽さけ Ш

々抱きかかえ

間 晴 れ間 0

たウ

オー

クマ

広い空今日の 友人がボケて優しくなる妻よ 血はうれしどんなことでも飛んでくる コールを忘れさす

二度念を押して聞き下手話べた 蔦がぐるぐる巻きの ビス疲れ して帰 ŋ

大木へ

来た孫もサー

大阪市

杉

澤

汀

22

	の いう がい かい	会は今日死なぬこととから食べる努力とうとう 温に近いお風呂にゆっくから食べる努力とうとう	好きで割りなのに隣れて寿く	f) ii
雑踏の街をたくみに飛ぶつばめもう少し庇によれや濡れつばめ、な真似で挨拶されるとは図星が起気の動は断れぬ	勝機の向こ 上めの耳朶 積んだ積	ば が 弱 い 帯 き り 帯 き り 帯 き り 木	オ 市 山 本 対 市 山 本 対 市 山 本 対 市 山 本 が ちゃんと頼ってくれて亡母憶う が ちゃんと頼ってくれて亡母憶う が ちゃんと頼ってくれて亡母じう	

紀美女

半

銭

文

愛

論

待って下さい明日はきっと笑うから泣いている間にビールの泡が消えているビルの谷間で歌っている星の唄ビルの谷間で歌っている星の唄「ごゆっくり」麦茶一杯出してくれ	阿呆にされ金の卵を生んでおく 原子に管る話 黙ってむくバナナ 気に障る話 黙ってむくバナナ きっちりと頭を下げぬ選挙カー	おばあさんが黙ると死んだかと思う 大阪駅にスッポンが売っている 大阪駅にスッポンが売っている ひとまわり違う男の爪を切る	東大阪市 谷 口がきつきとディナーショーにいざ行かんがい信じます は人の雲の占い信じます	東大阪市 安 永
	美 代 子	し げ お	義	春
四十年住んだ大阪不案内働かぬ手となり爪の伸びやすし働かぬ手となり爪の伸びやすしをくれます。	無花果が熟れたら送るどうしよう寄った大樹とうしよう寄った大樹とよくすり	羽曳野市では、大学では、大学では、大学では、大学では、大学では、大学では、大学では、大学	残り時間へ割り込んでくる手術 花満開ボクのあいさつ聞いてない 花満開ボクのあいさつ聞いてないでくる手術	藤井寺市
	安芸田	徳	楠	太
	田	山		田
	泰	みつこ	昭 子	扶美代

が田市 での が で で で で で で で で で で で で で で で で で		無灯火で砂漠を越えてきたラクダ無信仰ですと元気な声で言う無信仰ですと元気な声で言う無信のですと元気な声で言う無灯火で砂漠を越えてきたラクダ	大も世も心も腐敗進む梅雨 蒼天に子が描く二十一世紀 冒険と恋がムクムク夏の雲 しいまま散る花火 変の想い美しいまま散る花火	箕面市 山
	石	瀬		出
	原	戸		П
	靖	まるよ		セツ子
	巳	İ	実	子
空港をきょろきょろ妻の夏帽子木の葉寿司美味いとほめる機内食とりとめた命でやっとやめた酒	幸せの色ピンクとは限らない 幸せとはこんな色かも若葉照り 終着を幸福駅にする切符 の日 での日	を を を は な の ま ま 死 に た く も な り な の ま ま の に た く も な り な り な の れ た の れ で う な 間 な り な り れ の の れ の が た の の に た ら し に の に た ら し に の に る に の に の に の に の に の に の に の に の に の に の に の に の に の に の に の に 。 に 。 に 。 に る に る に る に 。 。 に 。 。 。 に 。 に 。 に 。 に 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。	で田市 を受ける。 を関いては、 を関いて、 をして、 をして、 をして、 をして、 をして、 をして、 をして、 をし	吹田市
	-11-	掘	大	野
選	藤	堀		ŦJ
選	井	/ /L	S.	下
選	井	良	谷	
選	井正	良	谷篤	下

度 夢 捨	Tr. ハンを長って-2.年代を抜け出せげ 紫外線突如おんなを脅かす 寝屋川市 高 田 博 泉 浜神の 一番 田 博 泉 一番	親離れ子離れすぎて孫離れ口下手な人の話は聞いてやり最高裁まるばつ式はご愛嬌守口市 井 上 桂 作		守口市 結 城 君 子 かけの女性元気の元くれる いけもの服着で歩く世だ であしいけもの服着で歩く世だ であしいけもの服着で歩く世だ かんしいけもの服着で歩く世だ かんしいけもの服着で歩く世だ かんしいけもの服着で歩く世だ かんしいけもの服着で歩く世だ かんしいけん かんしいけん かんしいけん かんしん はいかん かんしん かんしん かんしん かんしん はいかん かんしん かんしん かんしん はいかん かんしん かんしん はいかん かんしん かんしん かんしん はいかん かんしん はいかん かんしん かんしん かんしん かんしん かんしん かんしん かんしん はいかん かんしん はいかん かんしん はいかん かんしん かんしん かんしん かんしん かんしん かんしん はいかん かんしん はいかん かんしん かんしん かんしん かんしん かんしん かんしん かんしん はいかん かんしん はいかん かんしん かんしん かんしん かんしん かんしん かんしん かんしん か	
昔のままの人情が待つ都落ち平和やな何時も大人の話合い叱咤激励背にして学ぶ車椅子	りまと付いてりまいに乗じ切り札さいに乗じ切り札さくしの素顔を映す	気前よく払う通行料ならば(しまなみ海道)頼んだら孔雀くるりと舞うてくれ(耕三寺)お昼寝の後はしばらく宇宙人寝屋川市 平 松 かすみ	漬物の石が見ている家の運生き死にの話している窓 夕陽 生き死にの話している窓 夕陽 ひまわりがコスモスに座を譲る頃 黒い列作って蟻も稼ぎどき	遮光カーテン夏のたたみへ思い遣り	

江 光 子	新しい友に招かれ見はる螺鈿	揚羽蝶二羽もつれ合い梅雨あける	徳が克つ中国春秋のまつりごと	明珍の風鈴吊り場ないすまい	日傘さしフェルメール展並ぶなり	枚方市 森 *	手術室水虫だけが付いてくれ	言葉選る間に話題変わってる	今世紀最後の夏も暑い愚痴	ご先祖がポチの位牌に慌ててる	会葬もビデオでお茶を飲みながら	枚方市 宮 二	わんわんと山彦残し選挙カー	生かされる不思議の縁の有難さ	安らぎの欲しくて僕も座禅草	ほどほどの分かっていても守れない	だんだんと会いたい人の減る故郷	枚方市 海老池	梅雨寒のこんな日暮れは熱いそば	大切な文 叮寧に切手貼る	精出した日の安息へ灯消す	ばらの門今年も潜り老いてゆく	若い日の思い出少々飾られる	寝屋川市 堀 江
子 愛犬が入院今日は休みます でラジャーのきつさ男にわかるまい ブラジャーのきつさ男にわかるまい 美しい喪主だと噂して帰る 入院案内退院保証の項が無い 枚方市 二 宮 山ストレスへ飲んではならぬ酒を飲む おい息子でかした彼女可愛いな 脇役でよし定年あと三年 見栄張っておきたいライバルいてるから 痩の留守城代家老の気分なり すの園出身議員が建設相 枚方市 前 た も ずイケアに頼み一日バスツアー 女の園出身議員が建設相 枚方市 節 た も サカ退団女に還ってドレス着る 時刻表捲ると旅の夢を見る 少子化に三歳の僕が人気者																		他						
要犬が入院今日は休みます 一宮 川 弘 受犬が入院今日は休みます 「ブラジャーのきつさ男にわかるまい 達いたい日あなたの杭出して寝る 美しい喪主だと噂して帰る 入院案内退院保証の項が無い ストレスへ飲んではならぬ酒を飲む おい息子でかした彼女可愛いな 脇役でよし定年あと三年 見栄張っておきたいライバルいてるから 連休を上手に過ごす趣味仲間 を放む がら爪を切る がら爪を切る がります 一宮 山 なります を																		14						
た も 山 弘	英首相男の鑑と褒めそやす	少子化に三歳の僕が人気者	時刻表捲ると旅の夢を見る	ヅカ退団女に還ってドレス着る	の園出身議員が	鈴		っぱいあって困	の命と言うてい	妻の留守城代家老の気分なり	日バスツア	方市	連休を上手に過ごす趣味仲間	てる	脇役でよし定年あと三年	愛い	飲んではならぬ	=	の項が無	い喪主だと噂して帰	日あなたの枕出し	のきつさ男にわかるま	愛犬が入院今日は休みます	寺
ď																								
																								5ム

夫逝き三年今始まった第二章	心まで裸に出来る人といる	老いてなお可愛いぶりっ子マルチーズ	弱音吐く裏にプライド見え隠れ	今更に山ふところの深さ知る	岸和田市 宮 昭	反核の汗で世界をつなぎたい	核を持ち熱く平和を説いてくれ	同じ手が核とシェルターまで作る	核をつくりあれからヒト科眠れない	空燃える記憶は熱い広島忌	岸和田市 岩 4	私の作務衣に奇異の眼が刺さる	旧友の訃へこやみなく雨の降る	植え込みに花で校名描いてある	花の名は知らぬが賑やかな歩道	体調の不良へ時間だけ余り	岸和田市 高須賀	隣から風をいただく模様替え	八方塞がり今日は我慢のトコロ天	吞める人吞めない人のネオン街	行動半径多彩になって歩く主義	空気にも水にもなって泳いでる	八尾市 宮 平
					野						佐												西
					みつ江						ダン吉						金						弥
					江						吉						太						生
夢だけに終る残念五輪の灯	カラフルな風鈴ドイツの音で鳴る	浄土から引き抜きされた茶飲み友	半袖の終戦あの日は忘れない	りんりんと優雅に香る花菖蒲	河内長野市	千円で私を縛る腕時計	花よりも実を採る年になりました	墨跡に炎の跡が掠れている	辛酸を舐めて来たから醒めている	お帰りと言う九官鳥を飼っている	富田林市	冴えた月知らずしらずに仲直り	使わない景品行列して貰う	気丈夫な母さんぐずぐず病院へ	後悔はなかったはずの消印よ	新人の気負いうれしいお持てなし	岸和田市	耳打ちの噂私で止めておく	のろのろと歩けば犬も歩をあわせ	折りたたむ傘に未練をたたみ込む	丹念に広告読んで妻の朝	会心の作に墨汁ポトリ落ち	岸和田市
					井						藤						原						原
					上						田												3
					喜						泰						苑						とよ
					酔						子						子						子

薬だと毎食お酒二十ミリ出海の珍味くすりで締め括る出海の珍味くすりで締め括る出海の珍味くすりで締め括る	市い爪女は夢を追い続け 一本の煙草踏ん切りつかぬ日よ 一本の煙草踏ん切りつかぬ日よ 長らえる命仏間の灯が揺れる	ででは、これでは、これでは、 ででは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、こ	海のない海思い出してる夏休み(湊海水浴場) 海のない海思い出してる夏休み(湊海水浴場) 海のない海思い出してる夏休み(湊海水浴場)	河内長野市 植 村 喜 代
羽繕いもう旅立ちの近い娘よ 総りたき阿弥陀如来の細き眉 手花火が照らす小さなユートピア 奏珠沙華 炎えたい理由を喋らない	本で顔隠す暮しはしたくない本で顔隠す暮しはしたくない	大阪府 米 澤 俶二の腕にツベルクリンのある昭和 八月六日偲ぶエアコン効きすぎる きらきらと星ぎらぎらと恋冴える せんかい しょうしん はいかい しゅうしん 大阪府 米 澤 俶十七の蕾はじけた黙示録	大阪府 籾 山 隆輝穴で不眠連続地震など 延賞が来た日くじでも買いたい日 金賞が来た日くじでも買いたい日	泉佐野市 山 本 蛙

終章は軽いコントで締めくくる始めから買う気などない試食ぶり	極楽を期待して出す寺の寄付	雑魚なりの哲学持って清く生き	ぴったりと着地決め込む天下り	和歌山市 青	ファミコン熱中十七の孫へ図書券を	リストラをする方に有るため息よ	田舎から出た娘を汚さないように	雨降れば降ったで嫁った娘を思う	おしゃれしても自然の花の色に負け	和歌山市 垂	一点差今夜も虎が眠らせぬ	貴重品みたいに茄子を剪る鋏	メロンパン一個勇気を出して買う	蒸し暑さ言い訳ばかり繰り返す	お断りの言葉選ってるティールーム	和歌山市 福	逆境もチャンスだ無にはせぬつもり	捻子巻けば泣いてくれそう鳩時計	歯こぼれの包丁過去は語らない	連想ゲーム夕焼け空にまだ続く	寝がえりして風鈴の音に風を聞く(東京土産	和歌山市 桜
				枝						井						本						井
				鉄												英						千
				治						千寿子						子						秀
かたつむりやっとお前に追いついた紫陽花に似合う壺ありははの部屋	哀しみも怒りも赤し曼珠沙華	まぼろしの紙芝居きて夕焼ける	朝顔の蔓の先から朝の声	和歌山市 木 本 朱 夏	逃げ道を考えている靴の紐	朝が来る金魚鉢には金魚居て	副作用だな街のいろ空のいろ	結論はまだ梅干しに種がある	一日の重さ軽さによく転び	和歌山市 西 山 幸	遠花火聞いて二人の第二章	立て掛けた梯子の下でする思案	口笛を吹きたい人もいる夜更け	アンテナを張り巡らして食いしんぼう	テレビ電話になったら困るオホホホホ	和歌山市 古久保 和 子	御厚意に甘えています包装紙	父さんのグラスへそっと注ぐ娘	フェルメール展 行方不明の友一人	それなりのおしゃれ競うたクラス会	手に馴染む志野に思い出たんとある	和歌山市 細 川 稚 代

の合った理髪店なら癒される	ーキをうまく吏って世	風雨にも顔を知られた鬼がわら	ラブレター下手な文章気に入られ	最果ての地に灯台は凜と立つ	和歌山市 池 永 正 匍	息子から届くアメリカ サクランボ	子育ての頃が女の花ざかり	鯖ずしに心のふる里を辿る	遠近両用 心の段差踏み外す	老眼鏡喜怒哀楽を知りつくす	和歌山市 山 口 三千子	シャガールの絵から降りてきた少女	背を伸ばす骨ひとつずつ積むように	久びさのサイダー遠い日が溢れ	打楽器とわらい転げる台所	傘ひとつ紫陽花色にまぎれこむ	和歌山市 楠 見 章 子	回転木馬着順などは気にしない	お元気ですか気になる訳じゃないけれど	テレビを見ていた空白の時間帯	妻逝ってからラーメンがよく延びる	亡妻の句帳にまだあたたかい息づかい	和歌山市 川 上 大 輪
る二上山が吾	の夏頃印っなが妻また	苗代はまずは取れたと胡瓜もみ	東京で馬鹿ネ大阪阿呆かいな	禁煙の家か灰皿棚の上	大和高田市 岸 本 豊平次	誰かさんに似た大仏の長い顔	白昼夢ワンマンショーの石舞台	独酌の手癖やっぱり亡父譲り	小指たてまだ懲りもせぬ女癖	スプーン手に幼児に戻る老父の目	奈良市 米 田 恭 昌	陽が沈む水平線に亡母の影	目を覚ますのが遅すぎた回顧録	甲高い方の旗色褪せてくる	すぐ剝げる嘘を固めて逢いにゆく	愛想が良すぎる迂闊には乗れん	和歌山県 中 後 清 史	サングラス掛けタレントとまちがわれ	少しでも役に立ちたい募金箱	身長が縮んだことは内緒です	笑ったらさまにならない仁王様	現在地高すぎるのか息苦し	海南市 三 宅 保 州

景気策お紙幣に広告いかがです 景気策お紙幣に広告いかがです	スピーチへ誉めちぎられる葱坊主平凡を保ちつづけている非凡平凡を保ちつづけている非凡	類豆腐の誘い嵯峨野の風は秋 残暑なお世話も最後の地蔵盆 熱帯夜津軽の里をふと思う 熱ではいいでは、 熱帯ではいでは、 大風に誘われ一人朱雀門 大風に誘われ一人朱雀門	大和郡山市
1	都	大	坊
Ė	倉	内	農
ξ	求	朝	柳
2	芽	子	弘
追伸の一行もつれみとせ経ち ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	感動のスプーンも曲がる夢気分 非常用携帯いつも遊グルメ この土地と定めた秋の気は深い 系娘と二人香港旅のメモ	を を を を を を を を で で で で で で で で の に 立 つ と 聞 こ え る 神 の 声 で な い け ど し コ ー ン 剝 く の に も の る の も る ら る る る る る る る る る る る る る	京都市
ij	舟	井	高
	No.	T-	島
	渡	上	ш
, ,	杏	森	啓
	んでひとの話の味見する 晩節を穢したくない目刺し焼くない噂まつわる梅雨の肌 ジョーカーが手から離れる久しぶりへ懸想 夾竹桃揺れる 性懲りもなくカタログに乗せられるさ地球を少し傾けろ 勝鬨の列のうしろに紛れ込むお紙幣に広告いかがです 追伸の一行もつれみとせ経ち	んでひとの話の味見する 成でひとの話の味見する 人でひとの話の味見する 成でひとの話の味見する 成でひとの話の味見する 成でひとの話の味見する の晩憩 夾竹桃揺れる ない噂まつわる梅雨の肌 ない噂まつわる梅雨の肌 ない噂まつわる梅雨の肌 ない噂まつわる梅雨の肌 ない噂まつわる梅雨の肌 ない噂まつわる梅雨の肌 ない噂まつわる梅雨の肌 ない噂まつわる梅雨の肌 ない噂まつわる梅雨の肌 ない噂まつわる梅雨の肌 ない噂まつわる梅雨の肌 ない噂まつわる梅雨の肌 ない噂まつわる梅雨の肌 ない噂まつわる梅雨の肌 ない噂まつわる梅雨の肌 をしのぶ夕日は玉手箱 ・	お世話も最後の地蔵盆 香芝市 大 内 朝 子 「

富山市	酒	井		輝	東京都	播	本	充	子
名人の琴は見えない糸も鳴る					バンザイは誰も見てない刻にする				
前を向く顔はほんとの僕でない					アンフェアをじっと見ている太い足				
ゆっくりと出す争わぬふところ手					お叱り投書に御署名が洩れる				
一ページ一句で覗く深い海					誹謗した女の名前知ったとて				
嫁がずに通して母に頼られる					悪妻が泰平楽にいる遺産				
富士宮市	渥	美	弧	秀	大宮市・ホ	八	田		敏
お山開き富士は姿をまだ見せず					台風へ菊のお守りは疲れ切り				
助け合った親友先立って蟬しぐれ					姉				
年金同士酔えば時局をあげつらう					力んでも介護は女性かぶと脱ぐ				
寝そべった窓へ広がる富士の山					医者はしごする日も家事と介護待つ				
句集への便りに弾む日のつづく					物忘れ同士通じる老いの家				
静岡県	薗	田	獏	沓	黒石市 相		馬	_	花
七癖の他にも一つ朝寝癖					投票の前夜訪ねてくる忍者				
置いてけぼりやっと周りが見えてくる					園児描くママの似顔絵ばけものだ				
第三者他人のチャンスがよく見える					定年で嬶の意味が判りかけ				
長髪をたてがみにしてギャル走る					三味線の迫力が増す一の糸				
負け惜しみ隠すつもりの高笑い					薬より札束の効く選挙症				
横浜市	菊	地	政	勝	黒石市 千		葉	風	樹
残される自然に不便覚悟する					空腹の時のおなかに合う国歌				
面接の笑顔鏡に願をかけ					見せられぬ涙が溜まる掛布団				
二次会へ台風の眼もついてくる					シャム猫のプライドに無い紙おむつ				
溺愛の青いりんごに袋かけ					田を植えた真昼地蔵のいい笑顔				
巣立ちするトキに青空高すぎる					陽に焼けた笑顔に負けぬ積乱雲				

マニキュアに殺意さらさらありません	エキサイト野獣に戻るボクシング	クローバー野原の夢をもう一度	ゲームセットの前に一矢報いる	ハーモニカ吹けば青春甦る	弘前市 中 山 雅	祝叙勲 サボリもワルも駆けつける	祝叙勲 津軽も滋賀も馳せ参ず	祝叙勲 卒業来の教え子も	来年の会期は今日となりにけり	教え子に二度も都に招かれる	弘前市 櫻 庭 順	東京の駅から外へ出る苦労	心地良い風の告白待つ牡丹	高齢化国を支えた人ばかり	老木と言われてもなお葉の緑	緑風を大きく吸った錦鯉	弘前市 福 士 慕	少しずつ登るしかないかぶと虫	ねぷた秒読み出番待ってる笛太鼓	カンナ朱くいっきに夏の匂いする	音階を下げてこの夏乗り切ろう	紫陽花が咲いて亡母の忌近くなる	弘前市 宮 崎 ヒサ子
					城						風						情						サ子
恋人のようにケイタイ抱く子たち	糸切れて凧は喜んだだろうか	ケイタイも煙草も持たぬ軽い服	聞き役に徹しついつい飲み過ぎる	いい位置にいると聞こえるいい話	弘前市 高 瀬 雷	寂聴さんに女の過去を知らされる	買いそびれるサイクル三月のコンピューター	格好の駅前広場ジベタリアン	難病の弟いてとる看護資格	黒髪にズック短大の娘は美人	弘前市 今 社	空即是色こころの隅に般若経	中空に美のファイナル遠花火	がらんどをガタガタ揺する検問所	夢もなし目覚めのお頭空のまま	ねぷたの灯空に吸われる一ページ	弘前市 一 戸 、	我よりも息子の頭薄くなり	寂しさを貯えたのに詩も書けず	舌だけが達者お客を長居させ	絵の中の白 いとおしと重ね塗る	雲 僕に似て来る石に座り待つ	弘前市 蒔 苗 甲
					霜						愁						ツ						果

ネ

林

女

石

てほんとはトゲがな 行くまで石を積む いい引き金をひかれ いい引き金をひかれ おたまじゃくしの夢 おたまじゃくしの夢	傷心を癒してくれるかごめの輪等心を癒してくれるうちが華子供等に心配されるうちが華子ルバムを開けば初な妻が居るアルバムを開けば初な妻が居る単立つ子が母の写真を忍ばせる単立つ子が母の写真を忍ばせる	を	导刻表の間覚うがつけスペンス 尽すことだけしか知らぬ老母の背な 弘前市
大	西	^{[द्वा}	高
橋	谷	沿	橋
政	大		岳
良	吾	進	水
を 中病と仲よく暮す飲みぐすり 一病と仲よく暮す飲みぐすり 一病と仲よく暮す飲みぐすり 一病と仲よく暮す飲みぐすり で忘れ を間いても三日で忘れ で名を聞いても三日で忘れ で名を聞いても三日で忘れ をである。	なけて闇をくぐって日の 言が胸に残って眠れない 言が胸に残って眠れない 表末お山のみどりそまり	自由はしないと隻腕居士がらせた雑魚を見捨てる冬のですつ予定のメモを消す佳である意欲わかない草を抜するも意欲わかない草を抜い出し田舎おやつこ兆戦し	美しく打ら合い費水放棄する噴水の穂先乱るる言い逃れ
り中れ旅 のるりんか て 松 紅 む で る 立 市	川県市	くい熊風言	熊本市
かて松紐むである。	川 笛		本
か て 松 紐 む ぐ る 江 市	川 山市	県	本市
かでる松紅むたちを佐野	山	岩	本市

七転びしてもとれない角がある	ビリビリとするな日本は沈まない	われこそは竜虎相打つ関ヶ原	古稀の坂やおらネジ巻く陽が昇る	鳥取市杉	あとは子に托して亡父の法事する	相槌を打ち共犯にされてくる	アジサイの美学ひと雨ごと変わる	暑さ寒さどちらがいいか迷う夏	鳥取市 美	虫除けの薬美人の妻につけ	あの世では愛は語れぬ今日語る	今月は祝儀不祝儀要り過ぎる	風化した夫婦接着剤が要る	鳥取市 岩 口	阿鼻叫喚いまも聞こえる原爆忌	虹の橋明日の日本を賭ける色	切れた糸結んだ個所が太くなる	色メガネかけて心を読みたがり	島根県森	八月の海から届く同期の桜	寂しくて追いかけごっこのちぎれ雲	火の鳥が飛んだあの日の茜雲	積乱雲 恋しい人を奪い取る	出雲市石へ
				本					田					原					7.					倉
				孝					旋					喬					茂					芙佐子
				男					風					水					美					子
片仮名の花の	父親の方が	半世紀流	花吹雪と		個性	モナ	この	憧れ		愚	七	夢	遺		過	跡	昭	纮		LŦ	洣	工	袖	
の名前がわからない	の方がうれしい肩車	れ戦の後遺症	吹雪このまま死ねばほめられる	倉吉市 松	美の雑草花にある誇り	モナリザのポーズちょっぴり真似したい	先も余生このまま迷わない	のペットロボット飼う策を	鳥取市山	かさの果てに見ている遠花火	回忌こころの中の喪を放す	夢果てし痛みよ雲とはなしする	場から学ぶ先人達の夢	鳥取市 植	過去捨てるそんなたやすいことでない	取	和史の七つボタンも錆びてきた	純白の鳩を汚さぬ新世紀	鳥取市 岸	ほっといて言うから親は放れない	迷ったらしい判が斜めに押してある	モナリザのスマイル僕を追ってくる	神さまの知恵にんげんに羽根くれず	鳥取市 岸
名前がわからない	うれしい肩車	れ戦の	ばほめら	市松	雑草花にある誇	ーズちょっぴり真似し	先も余生このまま迷わな	のペットロボット飼う策	取市山	果てに見ている遠花	回忌こころの	みよ雲とはなしす	跡から学ぶ先人達の	市植	去捨てるそんなたやすいことでな	取	和史の七つボタンも錆	白の鳩を汚さぬ新世	取市岸	て言うから親は放れな	しい判が斜めに押してあ	ザのスマ	知恵にんげんに羽根く	取市岸
名前がわからない	うれしい肩車	れ戦の	ばほめら	市松本	雑草花にある誇	ーズちょっぴり真似し	先も余生このまま迷わな	のペットロボット飼う策	取市 山 本	果てに見ている遠花	回忌こころの	みよ雲とはなしす	跡から学ぶ先人達の	市	去捨てるそんなたやすいことでな	取	和史の七つボタンも錆	白の鳩を汚さぬ新世	取市岸本	て言うから親は放れな	しい判が斜めに押してあ	ザのスマ	知恵にんげんに羽根く	取市 岸 本
名前がわからない	?うれしい肩車	れ戦の	ばほめら	市松	雑草花にある誇	ーズちょっぴり真似し	先も余生このまま迷わな	のペットロボット飼う策	取市山	果てに見ている遠花	回忌こころの	みよ雲とはなしす	跡から学ぶ先人達の	市植	去捨てるそんなたやすいことでな	取	和史の七つボタンも錆	白の鳩を汚さぬ新世	取市岸	て言うから親は放れな	しい判が斜めに押してあ	ザのスマ	知恵にんげんに羽根く	取市岸

写子 み 何忌りの真の だ 故	第の裏の毛虫並列で生きている 時版に祈りがたまる貨物船 に祈りがたまる貨物船 が成 印押すだけで重くなる をなる。	の長りだけなどではない。 米子市なし今日の舞台よありがとう なし今日の舞台よありがとう 米子市なし今日の舞台よありがとう	行望の旅を許さぬ心電図 野牛の鞭びしびしと牛燃える 関牛の鞭びしびしと牛燃える じっくりと煮込むつもりの鍋焦がす
永	茂	澤だ	木 最
井	理	田	村 上
三 津 子	高	千	富 和 美 子 枝
子	代	春	茶 枝
を出りてとりがきにつまる。 のマンスを咲かせて見よう橋渡る のマンスを咲かせて見よう橋渡る にりじりと迫る矢面待つわたし くだらないテレビ薬になる支え 梅を干す時季が来たねと空仰ぐ 老い二人無意味の会話楽しそう	に書く幸福でしたありがに書く幸福でしたありがはく見いまりでの方が良く見いまりでいる場でした。	鳥取県ストラの椅子にロボット来て座り慣れてみやげ物やは素通りに慣れてみやげ物やは素通りにれてみやが物やは素通りにかがよるいい余生ままに明け気ままに暮れるいい余生	鳥取県 奥病棟の中に小さな村社会 明牛 今日の予定は無い炎暑 民主主義二つの仮面持っている アナの声一緒に延びたホームラン
			500
尾	田	Ш :	谷 庭
20.000	243		2000 000000
か つ 乃	く に 子	和	彩

病院に夫婦の予約席が有る縄電車孫はいつでも運転手慣れぬ地でお客の多い店と決め星の眼に今日もトラックよく走る	原 ぬとう	本の藁ぐらいにはまだなれる 大臣の椅子は打ち出の小槌かも を生日妻へもらった感謝状 を持ってたように捜査の手	部る ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	取るらり	鳥取県山
rž	5	田	田	田	本
<u> 20 -</u>	_		実	幸	E
D.	各	文	男	枝	光
島い言	西が最期ブラックホールかも知れぬ今生も残り少なし如何せん とトゲノム五七五に並ばぬか にかがはかり続いて損な道を往く	生きてきたことの証を五七五 生きてきたことの証を五七五 生きてきたことの証を五七五 生きてきたことの証を五七五	神戸市 を が は の は の は の は の は り す ぎ た 波 の こ わ さ を 気 づ か な い る り き と う た う た る り る り る り る り る り る り る り る り る り る	山り	岡山県
X	ij	長谷	池	大	荻
В	п	台 川	tre .	石	野
	П	711	田		
	秦	74	善善	あすり	鮫虎

たなせ家内	街路樹のトンネルを行くバス路線無意識に背伸びしてたか疲れでる鉢植の蕾次次子沢山	の小粋にかぶるベレー帽の小粋にかぶるベレー帽の服着て亡母想う	和だな妻の鼾のリズミカル点の裸婦が明るくする画廊あわせは人さし指の先にあるる里の山に登れば山ばかり	崎 市 i	. 尼崎市
嵯峨		米	小		的
根		原工	熊		場
保		雪		2	十四四
子		子	美	太	郎
線紙のどの か音夫の音	現在地確かめ 原発反対せめ 変定多数され	蛍飛ぶ知ら ほろぼろの まり継いだ	缶ビール握を開いるのでは、	鼻先で笑っ 病院へ架橋 変想が良過	
打っても跳ね返る お嫌いという小石 いっても跳ねをいるができ おから かんしゅう かんしゅ かんしゅう かんしゅう かんしゃ かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅん かんしゅん かんしゃ かんしゅん かんしゃ かんしゃ かんしゃ かんしゃ かんしゃ かんしゃ かんしゃ かんし	の老後も楽しいかで、では、でないでである。では、でないでは、これでいいない。これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、	の女と連れになり かなと連れになり かなと連れになり かなと連れになり	を 夏の輪ができる は定者です は達者です	たように猫が起つ の下を船で行く の下を船で行く	三田市
っても跳ね返る かいという小石 かいという小石 をしのメゾフォルテ の音	の老後も楽しいて裸で暮らせたど晴れたり曇っ	和歌山市 福 の女と連れになり かと連れになり は沢山あって生き	あと夏の輪ができる した利尻富士 した利尻富士 した利尻富士	たように猫が起つの下を船で行く一ズも旨い犬を飼い	田市 化
っても跳ね返る 嫌いという小石 の音 和歌山市	の老後も楽しいて裸で暮らせたど晴れたり曇っ	の女と連れになり かなと連れになり かなと連れになり かなと連れになり	ると夏の輪ができる した利尻富士 した利尻富士	佐路市 古 川たように猫が起つの下を船で行く一ズも旨い犬を飼い	田市

鐘 太鼓たたいて護摩木もえつづけ風船のような男をたよりにし風船のような男をたよりにしかとの棚卸してみる雨の午後		頼もしや双子のママの奮戦記(姪っ子) 対野がされて泣かせて孫は保育園 対かされて泣かせて孫は保育園	口に乗り合い船が大さわぎ雪姫の森をねらって噴くマグマい樹へ望み捨てない鬼あざみい	歌山市	和歌山市 玉
I		П	中	根	置
Ŧ		義	み	め	当
相	ì	男	ね	め ぐ み	代
鍵駆窓少					
鍵掛けた 火は消したかと見に帰り駆け落ちも三日過ぎればグチが出る窓際で影も薄かろ五十過ぎ少女にも鍵が要るそな基地の街大阪市	エアコンを止めた窓辺に虫の声保護色に慣れて自分を見失う事勿れ主義でまあるく老いていく弾んでた毬ころびだす老いの坂	島に来て自然の山や方言や飛鳥大仏優しい顔とこわい顔電車降り鶯の声聞かされる	観月の誘い待ってる飲み仲間 朝の陽に露草の藍映えて見え うっかりと出した本音を掬われる	阪イ紙ぬき	京都府
た 火は消したかと見に帰nちも三日過ぎればグチが出影も薄かろ五十過ぎればグチが出む鍵が要るそな基地の街も鍵が要るそな基地の街	アコンを止めた窓辺に虫の声護色に慣れて自分を見失うのれ主義でまあるく老いていくんでた毬ころびだす老いの坂	大阪 鳥大仏優しい顔とこわい顔 鳥大仏優しい顔とこわい顔 とこれい顔	の誘い待ってる飲み仲間 陽に露草の藍映えて見え かりと出した本音を掬われる	大阪市き際は呼吸が止まる時とするーリング古希の思い出ストライクしげなくひばりの切手貼る手紙チンコに勝った話は出来ませぬ	都
た 火は消したかと見に帰りちも三日過ぎればグチが出る影も薄かろ五十過ぎ は鍵が要るそな基地の街	アコンを止めた窓辺に虫の声護色に慣れて自分を見失うのれ主義でまあるく老いていくんでた毬ころびだす老いの坂	に来て自然の山や方言や 鳥大仏優しい顔とこわい顔 の上こんな所で寝てみたい	の誘い待ってる飲み仲間 陽に露草の藍映えて見え かりと出した本音を掬われる	き際は呼吸が止まる時とする ーリング古希の思い出ストライク しげなくひばりの切手貼る手紙 チンコに勝った話は出来ませぬ	都府
た 火は消したかと見に帰りちも三日過ぎればグチが出る影も薄かろ五十過ぎ よ鍵が要るそな基地の街 大阪市 川	アコンを止めた窓辺に虫の声護色に慣れて自分を見失う勿れ主義でまあるく老いていくんでた毬ころびだす老いの坂	に来て自然の山や方言や 鳥大仏優しい顔とこわい顔 の上こんな所で寝てみたい	大阪市 寺 井の誘い待ってる飲み仲間 の誘い待ってる飲み仲間 かりと出した本音を掬われる	大阪市 河 井き際は呼吸が止まる時とするしげなくひばりの切手貼る手紙しげなくひばりの切手貼る手紙	都府 稲

保好きみんな揃って秋祭り を好きみんな揃って秋祭り がよわりの黄に争いはしない事を言う 大阪の町から消えた赤蜻蛉 があり粋な手おどり足さばき 大阪の町から消えた赤蜻蛉	大阪市家金箱ほんの思しみじみと盆供養が出友を励ます花のカモメールでは、カースをがある。	一雨にトマト茄子が威張り出すだんじりの稽古囃子が雨に鳴るだんじりの稽古囃子が雨に鳴るお暇ならどうぞで行くと煙たがる	大の忌に明かした友の結婚日大の心に明かした友の結婚日を増しらいます。実前へ行くに道筋花屋さん	大阪市
清	辻	津	Щ	清
水	Щ	村	原	水
利	慶	志 華 子	章	絹
武	子	子	久	子
飛達泳縁 亡年就潮 で年就引 を甲職引 乗も上っ 母妻難い	亡意道梅母外化雨	孫指意い	落そ生正	
飛び乗って最終便のしどけなさ楽等も哀しからずや庶務係を筆も哀しからずや庶務係がぎ上手きっとあいつは雑魚だろう縁切った男に今も見つめられ場がが上手きっとあいっは雑魚だろう線切った男に今も見つめられ場がが乗って最終便のしどけなさ楽が乗って最終便のしどけなさ楽が乗って最終便のしどけなさ楽が乗って最終便のしどけなされば、	かのように人生ステージ飾り度いにも優しさ見せた反抗期にも優しさ見せた反抗期	の字を探す七夕書道展 大阪市の字を探す七夕書道展 かりまき生きてますい知恵を出そうと頭振ってみる	本の 大阪市 を表 を表の 大阪市 大阪市 で 大阪市 大阪市 大阪市 大阪市 大阪市 大阪市 大阪市 大阪市	大阪市
乗って最終便のしどけなさいた浜辺に桜貝の溜息をもなくヒラヒラのワンピーの板に入れる句集等の板に入れる句集等場の板に入れる句集等場の板に入れる句集等場がより、	ように人生ステージ飾り度も優しさ見せた反抗期のように娘がメイクするのようにながまるがある。	大阪のない笑顔ふりまき生きてまりで逢える日までとタマゴ抱を発す七夕書道展	大阪市 川 本 事 所 が に で 別 れ た 駅 に 立 つ に け ら れ た い て 破 れ た 駅 に 立 つ に け ら れ た い に も の 会 親 き ら に も ら に も ら に も ら に も ら に も ら に も ら に も ら に も ら に も ら に も に も ら に も ら に も ら に も に も ら に も ら に も ら に も も も に る に も る に も に も に も に も も に も も も も も も も も も も も も も	大阪市 安
乗って最終便のしどけなさ 難ヒラヒラちらし風に舞う 要もなくヒラヒラのワンピース の	ように人生ステージ飾り度いも優しさ見せた反抗期のように娘がメイクする	安を探す七夕書道展 りで逢える日までとタマゴ抱く りで逢える日までとタマゴ抱く りを探す七夕書道展	大阪市 挙手で別れた駅に立つ がて破れ太鼓の余韻きく	市
乗って最終便のしどけなさ 乗って最終便のしどけなさ 果 市 志 は 京しからずや庶務係 ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま	ように人生ステージ飾り度いも優しさ見せた反抗期のように娘がメイクする	大阪市 鈴りで逢える日までとタマゴ抱くりで逢える日までとタマゴ抱くのない笑顔ふりまき生きてますのない笑顔よりまき生きてます	大阪市川久みを妻の笑顔で助けられ本手で別れた駅に立つだけが一人で歩きだす	市安

版 刀,	多忙なりオタスケマンになる豆腐	しあわせの卵を抱いている娘孫自慢しっかり聞いてあげましょう言い訳のついで意見も言っておく	寝屋川市	学し	狂い咲ききっと目立ちたがりだろう整形外科無理な背伸びは直せない秘め事を盗み聞きしたイヤリング	高槻市	病院前どっと降りてく無料パス悠然と雲が流れる筆の先	公約がひらひら舞って票集め戦争を知らぬ世代の負う重荷	高槻市	蛍火にはかない老いをだぶらせるふれあえば意外に温い茶髪の娘	一秘の花を誇張する池田市
Ĩ	畐		籠			傍			江	h	藤
1	Ц		島			島			原		井
)	レイ		恵			克			秀		計
-	イ子		子			治			夫		光
マす雑僕ニこ種の	相	別耳夫		111. 7			/a 1000a				
ュアルは意味不明だよキーボしずつ買っても食えぬ量となでも宝の鉢植え水をやる時計進んでも遅れても	であが下手で流されついていく であるである。 であるである。 である。	別れない別れるで傘開けない耳かさぬ気楽とんぼの青い空夫婦駒いずれ一人になる運命	大東市	燃えさかる炎に立っている柱を表に一に見分を引るますご	本战こ子は見茶を長るお葬式またねとはやさしく躱す肘鉄砲足からの老化に口は達者過ぎ	寝屋川市	大息吐息今日を締切る夕月夜丁寧な挨拶したい交差点	涼風に答える花のいい笑顔青リンゴ赤いくちびる寄せてほし	寝屋川市	安らぎの天使の寝顔飽きず見る酒池肉林パワー全開夢の中暇と金余ってパワー無い悩み	腹芸の政治家 相次ぎ鬼籍入り 寝屋川市
は意味不明だよキーボードの鉢植え水をやるの鉢植え水をやる	ちが下手で流されついてい	れない別れるで傘間かさぬ気楽とんぼの婦駒いずれ一人にな		燃えさかる炎に立っている柱で素に日に見労を引るます記	鼓こ子ま見茶を長るお葬式たねとはやさしく躱す肘鉄からの老化に口は達者過ぎ	屋川	息吐息今日を締切る夕月寧な挨拶したい交差点	風に答える花のいい笑顔リンゴ赤いくちびる寄せてほし	寝屋川市 太	ぎの天使の寝顔飽きず見肉林パワー全開夢の中金余ってパワー無い悩み	治家 相次ぎ鬼籍入り 寝屋川
は意味不明だよキーボードの鉢植え水をやるの鉢植え水をやる	ちが下手で流されついていく	れない別れるで傘開けないかさぬ気楽とんぼの青い空婦駒いずれ一人になる運命	大東市	燃えさかる炎に立っている柱を素に可に見分を引るよす立	鼓こ子ま見茶を長るお葬式たねとはやさしく躱す肘鉄からの老化に口は達者過ぎ	屋川市	息吐息今日を締切る夕月寧な挨拶したい交差点	風に答える花のいい笑顔リンゴ赤いくちびる寄せてほし	市	ぎの天使の寝顔飽きず見肉林パワー全開夢の中金余ってパワー無い悩み	治家 相次ぎ鬼籍入り 寝屋川市
は意味不明だよキーボードの鉢植え水をやるの鉢植え水をやる	5が下手で流されついていく	れない別れるで傘開けないかさぬ気楽とんぼの青い空婦駒いずれ一人になる運命	大東市 児	燃えさかる炎に立っている柱(表に子に見分を引るます子)	鼓こ子ま見茶を長るお葬式たねとはやさしく躱す肘鉄からの老化に口は達者過ぎ	屋川市 坂	息吐息今日を締切る夕月寧な挨拶したい交差点	風に答える花のいい笑顔リンゴ赤いくちびる寄せてほし	市太	ぎの天使の寝顔飽きず見肉林パワー全開夢の中金余ってパワー無い悩み	治家 相次ぎ鬼籍入り 寝屋川市 酒

遡りまとめて叱る通知表	その昔警官という矜恃もち	介護法駆け込み寺が混んでいる	再起動してます私髪染める	横浜市 清	いのち得て山の深さへ辿る道	一歩また一歩踏みしめ母の試歩	足跡は残らぬままに今日生きる	ふっきれた迷いほんとの顔になる	富田林市 片	相部屋の友の眼痛い退院日	患者間素人診断花ざかり(入院風景 2句)	潰すなら大きく潰せ国が見る	花咲かぬあじさい背丈伸びに伸び	岸和田市 井	二分のびる夫婦の会話タイガース	万歩計吠える犬避け遠回り	高い所から飛び降りる手をやく孫	美装品を二年ローンですすめられ	岸和田市 藪	大輪の朝顔音もなくひらき	老眼鏡買いかえテンポ早くなり	父の日に赤飯炊いて母の愛	愛されて女だんだん強くなり	八尾市 生
				水					岡					伊					野					嶋
				潮					智由					東					けい					ませ
				華					恵子					吉					子					ますみ
かい	豁然と我に帰った鬼の貌	ほめられて饒舌になる花の貌	少子国に生れ恥じらう葱坊主	弘前市	偽物と知らず代々伝えられ	世紀末ロボット犬という家族	新顔を加え華やぐG8	沖縄に思いを馳せてゴーヤ煮る	東京都	梅雨明けて山の緑を塗りなおす	おいと言う息子の声を聞き違え	弟が逝くまさかまさかのそのまさか	待ち伏せをエレベーターでする藪蚊	川崎市	夫婦喧嘩つなぎに甘い最中など	シュークリーム二つも食べてグッドマ	うまそうにパフェばくつく大男	飯炊いてノラにもなれず妻でいる	横浜市	熟年の会話は妻の命令調	ジグザグに歩いた過去のつけが来る	パソコンに定年からのあがきぶり	若者にエキスをもらうバスの旅	横浜市
				岡					後					和		マ			Щ					小
				本					藤					泉					下					野
				花匠					早智					あかり					省子					句多留

前 市 相 馬 銀

波

to 温 度差 30 りん 色を彩 も欲 ĩ ic する 10 秋

働 63 いた靴も軍手も泣ん く市 況

ストまで走る余力に二 度 0 職

留守 隙間 だら H 0 台

弘前市 須 郷

井

蛙

主のベビー 得 意の サー でい -ブ持っ ます 定年 7 3 後

私大パ妻は型ーの

F

にも慰安旅

行の

せくる

+ 和 田 市 小 . 笠原 敏

人

いたま ま

素閃顔い 作出 の虹を残 かず 13 を枕 お して雨台 世 E 辞も今日の糧 風 にする

た名句

置

句する心が邪念に囚われる

つづき

田 几

ている低 に屈させぬマ 金利 曳 野 市 郎

7

人でもないが退 ル優も欠伸し

大阪府 野 田 栄

紫陽

花

0

7

んこ盛なる

元

哀願をされて片意地解きほぐす

呼 投句 没

句

会

9月22日(金)午後6時

吉本文芸館

第 27 堺まつり 誌上川柳大会

題	_	見る		马径
共	高	Щ	河	±.
大選の	田	上	内	居
選	美	大	月	哲
者	代子	輪	子	秋
題		[E	-	易し
-11-	播	中	西	河
共選の	本	田	出	内
選者	充	たつ	楓	天
н	子	お	楽	笑

投句 要領

紙 A 5 用 同紙 4 枚 1 題 1枚

左右に じ句 を2句ずつ

注 さい。 封 書にご自 (各用紙に名前不要 分の名前を忘れずに書いてくだ

9 月 30 日 (消 印 有 効

堺市 堀上 緑 町 2 1 6

河 内 天

笑

3

JII 柳

吉

(おかね)」 選 評 河 内 天

吉本文芸館(00 被千日前 4 11 6

投句 第 12

先 〒542 -0075 締 切 9 月11日(便箋に3句以内・80円切手5枚同 3 7 7 9 9 封

-47 -

この句 この人

橘 風

国会の時計で時を合わせない

や牛歩戦術もやれば、得意の居眠りもある。 日時を短縮したりもする。反対に、先伸ばし 秒読みで立ち回らねばならぬ時、法案を通す 政治家の時間と庶民の時間とは同じでない。 四郎

人柄の故から自らに溺れることがない。 木曜日君は朴念仁である 桑原 道夫

高校の校長の経歴はその目の高さの批判力、

えた。君と表現しているが自分の実感なのだ。 うするが、リズムの上で物足りずに位置を替 まう。朴念仁という中句がこの句の焦点だ。 のない日である。勤め人は朴念仁となってし 「朴念仁の君である」の形で五・七・五が全 木曜日は月曜や金曜と違ってとらえどころ

携帯で親を呼び出すランドセル 三好

使して、体を機械にしておくことだ。この作 欺恐喝 の予備軍が今の子供達だ。しっかり機械を駆 携帯の便利さがエスカレートして、今に詐 脱税もという時代になりそうだ。そ

> 夫君の武庫坊氏とは幼稚園からの恋仲、七十 リズムと適切な言葉がこの句を佳句にした。 者ズバリと言いおおせる句が多く快い。 数年それが続いているので傍目にも羨ましい かり路郎の手法、精神を研究して頂きたい。 孫娘への愛情表現にこれ以上のものはない 中七の表現の真実味、上句の字余りの効果 始皇帝の願いがわかりかけて来た 孫娘よそれで充分美しい 春城 年代

当てはまる御仁だが、もっそんなお年か。 徐福の伝説は新宮にもある。矍鑠という語の で不老不死の仙薬を探しに日本へ来たという 槌を打つことになる。権力者になると誰もが 命の限界に突き当るらしい。秦の始皇帝の命 あっさりとこのように言われると思わず相 井上 勝視

他人には小さきことよ我が涙

ろくなるが、実際、自分の事は自分にしか分 まへんか」の句を思わせる。年を取ると涙も 須崎豆秋さんの「葬式で会いぼろいことお 富坂 志重

> もう一度会いたくなる句である 見たい。吟平さんや志重さん、秀香さんらと 涙と意味づけざるを得ない、人間である自分 からぬ。今日の朝日の夕刊に作家の三浦しを ふと美しく明るい久世の川堤の桜トンネルを 何か心を撫で鎮めている気配の句だが、私は が哀しかった」との短文の結びの言葉を思う。 んさんが、猿の涙の話から「目から出る水を

地に伏してフォークリフトの休養日

年青年の面持ちを持つ。 けを程良く纒わせると、ちかし像になる。 機械の擬人化。祈りまで感じられもする。 リフトも降参して深々と頭を地にあずける 鉄腕アトムを少し年取らせて、教養の味付 休養日には人間も大口開けて眠り続ける。 竹治ちかし 万

くらやみを押してる車椅子の音

導者になって頂きたい。 取の水で斬新さを研いで、個性ある作者、 を訴えてくる。作者は若い世代と思うが、 怒哀楽は具体的であれ、抽象的であれ、真実 このような句が散見出来るようになった。喜 たセンスから創られた句と思う。川柳塔にも を読者に感じさせる。従来の句から抜きん出 スリラーとも介護批判とも言わぬが、何か 徳田ひろこ

III 八 木 Ŧ. 代

死 殆 どは 虫 と仲 飲 右 2 利き用 友 0 計 できて を 聞

1 世

梅

最

中

鲆

 \mathbb{H}

素

身

郎

3 F

10

期 知 B 失 職 X 義 1) 姉 ス トラで解雇され 0 笑顔 かい 42 2 お

倒

満 達乱

ち

潮

が

な よ 消 迫る日

な 17

か

来

12 0 録 JII

稿

紙

かい

ど川

原噂の

者

なら

n

たり

文

た

n

住 あ

Ш

上所

71

6

1

かい

b

かい

悲

10

出

藤

村

女

0

抱

か

n

かい 2

B を

< 誘

3 1+

旅

路

冷冷軒何

に 糞

来

た

燕

生

n 足

た

軒

探 to

2

思

えとど

伴

喉もとに

b

主

か

天

0

0 た

嵩

宗 吟

平

0 0 初 歌 体 て 踊 残 験 ŋ 3 砂 砂 あ 酔 0 城 6 てい (トルファン る 5句)

さり 年

げ

な

10

顔

18

> L

か

b

金

でつつ

なぐ

命

で

翔

10

玉

置

重

人

Va

3

5 房

5

b

時 我

だ

17

自 屋

慢

if

は 庫

6

2

い詰

が守

部居

開

H 稼

放 *

ち

8

留

共 す

缶

ル

今

Ħ

は 7

可

不

な n

バカ地ウい

から 1

WD 7

n

V

ズ

水

尊

Us

どう

畑

00

ル かい

n 3:

6

旅

2

やげ

に カ E

は

0

掟 飲

X

ラを 男

2 髭を剃

に

行 E チ

<

0 L コ 0

紅 П

をぬ \$ 倖

な

に家族

ぼ t 味 14 4.

n

萩 旅 音

夏

0

疃

かい 0

ま 夜 緒 夏

ナジ がに

消 明な

文 ぬる

地 狸

芳

村

-49 -

四ツ 頭 泥 言激カ 信 5 辞 i 水 禄 ŋ n n V H い流 H 110 た 1+ 进 か を か 勝 を テ は て か 張 た 麗 んら こと俺 6 H n 6 小 > 深 あ た ŋ 1 句 0 示 H 2 ろうと を分け あ 1 間 焼 裏 お地 す た後 舟 8 抜 悔 0 極 1 僕 で越 向 えてて 12 け 17 親 か 12 n 尽民 は Vi 合う h E は 蔵 ば こう ょ 今 織 る な 0 浄 は 拳 ざん 奇 と広 合う花 は n 紐 E 之 蓮 白 笑 H か 土 にあ 骨父 7 見 優 詳 0 0 かず 麗 紐 n 1 がの 分 能な月 花 かい 付 手 緞 が かい ル 傘 えてく 0 0 Us を合 居 は 中 0 母 濡 あ 吉 13 海 か 寿 0 は た蜃気 友 な 引くように 7 ホ 味の n 3 振 カ 咲 12 かい 許 て佇 海 10 Vi # n D き 4 \$ b 苦 n う か 3 ++ き n 12 ええる 0 楼 La 西 I 木 越 田 智 磁 柳 吟 宏 子 笑 水 傷心 決断 辛 年金 紙 蛍 運 U 切 抱 ٤ 和 風 n 火 天 康 を下 夏 n を小穴 入 を迫 覚え 者と言 田 ま 0 年 に がイ 夏 湖 た 3 任 財 0 縁 ta 文 夢を落 と泥 る容容 なに が 足 をときどき泣 之 首 箱 埋 3 せ 布 喜 モでもうるさ な て生 は 拒 切 袋 B 輪 10 8 劇 b 43 詰 ワル n 0 0 は 鰌 欠 赦 \$ n 粗 かい こは すく 伸 してゆ ず きて する 里 80 終 3 7 母 0 食 と言うて ば 程 腹 は " 0 to ŧ 母 も生分 老化 ぜ 行 7 踊 训 WD 13 か 43 0 る を所 ろう が 縄 文 2 か き は < n 時 12 遠 す す 止 な蚊 た 浙 余 偏 きよう 0 水 花 望 津 1 主 き か 3 n 頭 水 た 1 ウシ 增 軽 n 3 0 痛 L 頭 羽 之 n か 味 音 波 小 Ш 金 ズ 多 島 井 野 $\overline{\mathbf{H}}$ 雄 文 云 楽 庵

Z

秋

愛無 求め 文句 妻ごめ どれ 世 R 4 ああ亡父よ今なら癌と告げたろう 脳 面 鬼 渡栄 イエ 流 0 立 様 蕩 天に を打 灯の 無限心昂ぶる合う心悲 音 っなく は を信 0 も ŋ n つ子をみ 力 n たし 0 2 雷 音 る " ノッ h 花 2 + つひたすら せ むつ てい じて かい 母 1 花 余 は な " か 低 音 1) to 肉 7 0 生 や 3 遠 8 浮気 散る日 かしさ口にして笑う お 3 < は 道 10 L b も魚も毒に見 樹支えてい 0 1 き風 ます ぱり白 Ł 舐 花 なと思う下駄をは < 風 た 虫 ŋ 0 80 期 かい 0) かい 12 度 合う 虫を 両 風 盆の も に逝くと決め 相 0 連 ね 手 盆 でし 0 風 手 ち 会 に 風 飼 るとする 吹き込んで 3 盆 てく 0 0 葉っぱ 之 た 顔 何もなし 0 盆 12 で咲 盆 3 正 板 両 斉 本 尾 JII 藤 水 岳 洋 客 劦 以 酒 Ŧi. 新風婚邪 五十 18 歳を重 往く 玄関 時計 力 我 金 五お 7 少 族 ラノイア + 慢 線 V 婚 お 来る番 7 かい を妻 ろぎ 旅 年 年 道 草 紙 4 きっ 1 行 つ引 てい E 効 取 7 喜 五 で う ねてどうやら 明 1 は 行かず 遮る君 くと川 n と二人で 治 踊 ŋ 怒哀楽を振 かい 七 ちり 六 合 る 治 をし に か 沽 Ŧi. る 子 秋 ない + 激 券と 2 0) 0 0 かい 丰 0 たら 歳 柳 7 枚 Ľ 書 は 0 包 ポ + 街 な アド でもう 寝 妻と五 君と私 ま 祝 ラ をひ 13 10 す V 13 12 D 12 3 てあ 歯 7 ŋ 11 1 彼 う 1) ボ 瞳 0 で五 草 ク達 とりで 科 剝 B バ 出 返 酒 溜 13 0 だけけ る 1 奥 0 終 ま n * + 言 15 8 寿 葉尻 n H ラノイア 13 + 年 ス が 0 T 司 職 年 記 灯 澄 歩 42 to 林荒介さんを偲ぶ 月 宮 野 黒 原 П Ш 太 宵 笛 紫 茂

明

友と歩いて出会う千	行そろそろ予約	1	一泊の休みへパーマ服かばん	特売の列へ素直に並べない		北へ旅三日の運についてゆく	癌に効く宇治の緑茶を飲んでいる	催眠術で腰痛の治療中	酒煙草死に急ぐのは愚かなり	昭和史の中に人間魚雷あり		褒め上手その気にさせた電話口	厚底で大和撫子踏んでいる	衝動買いに付き合わされている凡夫	まだ若いつもり素敵な柄を選る	いい話聞いて帰った靴の音		ゴキブリには効かぬ女性の護身術	合言葉どおりポックリ逝きよった	ペンペン草の田んぼも固定資産税	夏の忌は明けず夾竹桃が咲く	老眼鏡合わず父権も落ちている	
		0.40			遠						土.						恒						舟
					Ш						橋						松						木
					可												叮						与根
					住						螢						紅						11X
					ш						Щ						/htt						
警察																							
察が居るぞと点滅してくれる	虹が立つ筈条件ができている	ベル押して帰る気配がまだ見えぬ	足音に叱られながら二階まで	ことのついでに朝の花屋で花を買い		可愛いおじいちゃんと言われうれしい下校の	太陽の平等内戦まだつづく	義務を忘れた個人自由義の強調	美徳忘	美導 善徳忘れ教育改革の秋きたる	藤井	七夕のようねと昔の女と逢う	満足を絵にして羅漢の顔並ぶ	ほどほどになさいと妻の目が笑う	自己主張過ぎて迷いが深くなる	遣り過ぎた水で萎れた鉢の花	阿萬	亡父だけが僕の入隊悦に入り	文明は伸びるトイレに電話来る	冷房の風は好かぬが手がかかり	五度六度死の直前に慈雨となり	日の丸と長寿と功と二〇〇〇年(祝受賞紫香先生)	田口
宗が居るぞと点滅してくれる	が立つ筈条件ができてい	ル押して帰る気配	に叱られながら二	のついでに朝の花屋で花を買	西	愛いおじいちゃんと言われうれしい下	の平等内戦まだつづく	を忘れた個人自由義の強	性を追究にほんの美徳忘		藤	夕のようねと昔の女と逢	して羅漢の顔並	と妻の日	主張過ぎて迷いが深く	た鉢の		だけが僕の入隊悦に入	は伸びるトイレに電話来	房の風は好かぬが手がかか	度六度死の直前に慈雨とな	の丸と長寿と功と二〇〇〇年	

朗

苗

的

スナッ いちこざ 子よくなると忘 乗り 門 も 桃 1 まだ三ッ À 月 ま 0 3 は 1 か 無 to 恵みの ことつ 0 恋 で かい " 2 自 ラ キの 7 は ば 0 越える 0 40 が 聞 3 + 0 家 0 咲くとあ ブ 紫 たい 我慢 余波 L 42 嫌 ル 誘 路 1 指突かれたことがない 0 7 老 雨 ませ 底 財 ここにも生きる人が を辿 か 知 13 10 か 刺 八 6 3 13 布 に発芽する ないがご 42 L でとぐろを巻く 0 とは見 れキ 心れてい た スー 激 0 に くさの塩を盛る 分で妥協 则 ~ 0 居 たる イと電 夢 靴 L H 面 ル 1を思 V た 楚歌 が鳴 7 18 えず犬と添う 0 1 る みに て見たくなる もらう 汗 40 する C を拭 朝 る 出 不 80 出 0 П 3 す 特 妬 況 訓 43 il 石 小 中 堀 る 榎 JII 林 端 本 侃 由 叶 流 洞 香 男 来 ミジ えら 待 プラト 紙 儿 ギ 太陽 座 エた 戸 宅 お 惑 禅 梗 魚 潮 碓 + だてられ D 聞 もなに 終えて 歌 寺 を ン 0 0) は 13 12 0 て 紙 0 すし 光 コ 彩 、浮き藻 ブルは 0) 恵み 松 で 人とは肩書 稚 で 狂 流 茸 源氏とか " 4 派 本 0 魚 クラブい か忘れ 棲 お 手な笑 もなし 師 to 12 かい てまた引 0 0 か かたすみという名の茶房 ず巡 で育 2 ソー 生きる生かされ 来 17 WD 0 8 か h 高 な んな卒業して た白 だ昔 ŋ D 7 7 る か金持 たつむ 0 0 43 潔 12 か X とお 受け ない 梗 池 野 稚 昼 湯 題 は 0 になっ 寺 草 魚 昆 気 可 b か n か 袁 0 布 5 捌 た で生き返 体 挑 しや桔梗寺 (盧山寺 E 苛 群 3 お 0 か 車戦 10 なく まれ 7 n 森 V る 人よし ます 13 (路部忌 る 故 n 橘 गा 田 弘 高 内 辺 津

守

礼

蒼

Va

年

か

不況

Ti

時

13 大

3

3

13 元

気

コマ

リス

柳

慶

転

宅

草

天

笑

薰

風

Ш 柳太平記 (268) Ш 柳 0 群 像 弘 東

中心に開かれた。奥谷弘朗の一世一代の華や 地の肌に白文字で彫り込んだ等身大の巨岩を 九日大山レストハウス敷地内で、右の句を黒 奥谷弘朗君ほど、その数奇にして多彩な人生 かな、祭り、であったと言えるだろう。 の句碑建立記念句会は、昭和52年四月二十 「人それぞれに歴史ありといわれているが

○北壁の男らしさを見て飽かず

弘朗

り奥谷弘朗君おめでとう。私たちの大山よお めでとう。川柳塔社主幹 詩の魂に迫るものがあり胸打たれます。 その原点は路郎師のお唱えになる人間陶冶の の素晴らしさを賛え、仰ぎ見る大山愛好の人 輸血奉仕により九死に一生を得た話は尊い。 職場の鬼を救えと同僚各職員の競っての尊い 院したのが五年前のことだが、その際、この て手を握ったことは柳界こぼれ話でも有名が 愉快な男はない」と一度で惚れこみ師弟とし 君の得意の安来節を聞き酒盃を重ね「君ほど 々の感動をありのまま表現したものであり、 大自然の中にそそり立つ地元名山の筆頭大山 だったのがかえって災いし、体調をこわしる 今日、ここに建てられた。北壁の句』は、 私たち川柳の師麻生路郎が一夜自宅に招き 職場では、鬼といわれるほどの職務熱心 中島生々庵

を歩んだ方は数多くはないと思います。

鳥取県立農業学校を卒業後、小学教師をふ

ねている。 栞副主幹の他、 界からは右の中島生々庵主幹を筆頭に 小谷善高倉吉市長他の要職のお歴々で、 以上が祝辞の大要だが、句碑建立発起人は 地元川柳人がずらりと名を連 西尾 川柳

会長で、その当日のスケッチが興味深い。 元川柳人を代表しての沢車楽大山番傘川柳会 この句碑建立除幕式記念句会の進行は、 地

ことは、大山番傘会長としても嬉しい」(『川 広い協力支援で盛大な一大エベントとなった 拘らず、地元民はじめ地元川柳人の諸氏の幅 ところも多く、第一、環境庁の認可もギリギ うやら好天。除幕式は、神官による修跋のあ リに到着するという正に放れ業であったにも の間に実施されたもので、周知徹底に欠ける ったが、この企画は氏の停年退職後、 山上の冷気も吹っ飛ばす熱気に溢れていた。 うな堂々たる碑だ。会場のレストハウスでは 場所、碑面の句にある北壁を背に見上げるよ 博労座の上、レストハウス前の角地で格好の と御子達の手で除幕されたが、句碑の位置は を現地に飛ばせた。幸い現地は太陽も輝きど 高薫風君と共に同氏を乗せて三人でタクシー 開式の際、祝辞に対し弘朗氏の謝辞にもあ 大阪から堀口塊人氏を迎えての当日、 橘

持つ気骨ぶりで世に知られた。

々生きた真の山男で、まことに変った一面を

退職までの27年間、

大山と共に日

ようやく帰国し、

鳥取営林署に復職された。

妻子と別れてシベリアに抑留され、

約四年後

召集されて出兵。反転して現地で終戦となり

満州へ県公署一署員として勤務中

長くなるが、当日の弘朗句碑の祝吟を念の長くなるが、当日の弘朗句碑の祝吟を念の表すらら新居と句碑の温み哉 板尾岳人春うらら新居と句碑の温み哉 極高薫風をすらら新居と句碑の温み哉 板尾岳人春のいまが、当日の弘朗句碑の祝吟を念の

大山の心を句碑が語りかけ

藤村メ女

る。いわゆる一句建てで大分我慢してきたく同誌へ初投句したのは昭和10年頃ときいてい川柳は川柳雑誌社主宰の麻生路郎に傾倒し県倉吉市生れ。平成12年2月25日死去33歳。県倉吉市生れ。平成12年2月25日死去33歳。

「川雑誌上で連載のあんたのファンやった「川雑誌上で連載のあんたのファンやったが、面白いのを大分書いてたな」 たいって肩を叩いてくが、面白いのを大分書いてたな」

ことである。 "大日本" はすでに過去のもの

最後に弘朗作句帖より

として消え去ったものと思っていただけに、

瞬″まさか』と感じたのである

ちらしくて

「月さま、雨が……」

春雨じゃあ、濡れていこう」

たのは寂しい。 と活弁か、映画説明か知らんが、古い古い無時代のこわいろで熱心にそれを語る弘朗のかしかった。それをもう二度と聴けなくなっかしかった。それをもう二度と聴けなくなったのは寂しい。

ることは最高の幸せだと思っとります」
早いこと。人間元気で、人様のお世話ができ
早いこと。人間元気で、人様のお世話ができ

ないのですが、会員四十人程の打吹川柳会の

「…川柳会の運営なぞと大きなことは言え

会長として毎日忙しい日を送っています。現

内閣官房長官の談話をきき入っていたときの内閣官房長官の談話をきき入っていたときの方にも厳かに今は亡き天皇の崩御を告げるうちにも厳かに今は亡き天皇の崩御を告げる。それは一月七日悲しみのきいたからである。それは一月七日悲しみのきいたからである。それは一月七日悲しみのきいたからである。それは一月七日悲しみのきいたからである。それは一月七日悲しみのきいたからである。それは一月七日悲しみの内閣官房長官の談話をきき入っていたときの内閣官房長官の談話をきき入っていたときの内閣官房長官の談話をきき入っていたときの内閣官房長官の談話をきき入っていたときの内閣官房長官の談話をきき入っていたときの内閣官房長官の談話をき入っていたときの

言であるだけに、なおショックであった。私えたのである。それが国の中枢にいる人の発表っている。私には思いもかけぬ出来事に思い、そうも考えた翌日の新聞には、明らかにい、そうも考えた翌日の新聞には、明らかにい そうしょう はいであったかもしれな

が私には信じられなかったのである。の中から〝大日本〞が再び姿を現わしたことお悼み申上げる心に変わりはないが、悲しみも国民の一人として、亡き天皇崩御を悲しみ

思えば日清戦争から始まった我が国の侵略しまった。誘因がなんであったかは私のようという潜在意識があったのではを私には思われてならない。小さな島国の日と私には思われてならない。小さな島国の日と私には思われてならないが、その中に「大日本なものにはわからないが、その中に「大日本なものにはわからないが、その中に「大日本なものにはわからないが、その中に「大日本なものにはおりこそが災の基ではなかったおごりこそが災の基ではなかったおごりこそが災の基ではなかったかと私は考えるのである。もう二度と大日本にはなりたくない―と思う気持でいっぱいないにはなりたくない―と思う気持でいっぱいないによりといいに対している。

中分の大きい方を妻にやり 弘朗 中別という幸せがわかりかけ " 知らんでも知ったかぶりの出来る芸 " 野心家の能弁なのが気にかかり " ふるさとに大臣が出た祝い酒 "

▼次号は「林 荒介」

どん底を耐えた男に無駄がない

清・佐藤

誹風柳多留二四篇研究 21

大山 田 本 昭 秀 信 夫 伊粕 谷 吹 和長 男

栗

吾

清

148 親分ハ残念ながら杖をつき

怪我をして杖を頼りに歩いているようじ 親分は博徒・俠客の頭

や、親分の貫禄もあったものじゃないよ。 親分の不快夜着など着てあるき 九24

情けない姿になった。 年波には勝てず、今じゃ杖にすがって歩く、 伊吹 昔は貫禄のあった親分だったが、寄る

伊吹説賛。

149 不風雅な軍吉野でおつはじめ

なまぐさい戦をおっ始めた。なんと風雅でな 朝の長い争乱を詠んだもの。花の吉野山で血 吉野山を舞台にして繰り返された南北

> 清·佐藤 賛。 軍書にかなし吉野山」である。 いことよ。 所こそあるに吉野てた、き合 『太平記』の世界。 「歌書よりも 四29

150 悪ルロハわつちがかぶと女房いゝ

の男女が用いる自称。 ちは、わたしの変化した語。身分の低い階層 ている動作、状態。特有の癖。 がわるいのは、生まれついての私の性格よ」 落語にも出てきそうな、長屋の夫婦喧嘩 女房の買い言葉 かぶ(株)は、その人の持ち前となっ (以上『日国』) 「日 お得意。 わっ

博 美 佐 藤 要 人

151 ほれてく、ほれぬいたハ清玄

上げられている。 物語は、近世初頭から浄瑠璃や歌舞伎に取り の主人公(『日本架空伝承人名辞典』)。この 男の愛欲のあくなき執念をテーマにした物語 死後も亡霊となって、姫につきまとうという けるが叶わず、逆に殺されてしまう。清玄は 桜姫に恋こがれ、破戒してどこまでも追いか 清玄は、京清水寺の僧清玄が、美貌の

何かないか。 小栗 賛。ただ何が面白い句だろう。俗謡か 清玄のこんぱく姫につきまとひ 四六26

がハッキリしないと、小栗兄同様、 いのだ、ということになる。 「ほれてく、ほれぬいた」が曲者。これ 何が面白

橋本 152 語の辞典』)、正式の職名ではなかったよう 向きを取り締まる役。多くは老年者(『江戸 役柄て気斗つよい奥家老 奥家老は、大名家で、女性ばかりの奥

わるずいハおれがかぶたと遣り手い、

ている。これもその一つ。
し職務には忠実なことが、揶揄の対象になっとない老人か、醜男で色事のない男で、しかさない老の句は、そのほとんどが男の役をな

青・左筆 資。

八3

153 あたい百両一ッこくをぬかすなり

である。誠に可愛げのない嫁。
り、毎日の生活が我が儘一杯、言いたい放題う簡単に離縁はされないという裏付けがあ

同じ天明二年の句に、

千金のよめ一ッこくをぬかすなり

とも考えられる。 天二・三・27

橋本 司右。寺参嫁の句。パロディー。

橋本同右。持参嫁の句

154 あれを呼ぶ気だなと伯父が星をさし

星入りの女房を息子持ッ気なり ニ五35 相父が指した星は、指摘する意と、細見に 相父が指した星は、指摘する意と、細見に まっとしている気配である。 はび好きの甥が、どうやら吉原の女郎を

佐藤、赞。

155 徳向キにか、り大キな目に出合

とく向キハむす子さつはりきらひなり選んで、という程の意であろう。

という句からすると、主題句の「徳向き」は天二・八・5

どうやら地女をいうらしい。

らいう場面。
会に対している。

粕谷 礎賛。安女郎では「大きなめ」即ちひ 橋本 賛。安女郎では「大きなめ」即ちひ

156 交り見世うかといゝのも揚られず

名がある。 (大籬ともいう) に対する小見世。一分以上(大籬ともいう) に対する小見世。一分以上有がある。

まじり見せこわ~~ゑ、をあげるなりしまう、おさおさ油断はならぬとの意。遊女を揚げると、それなりの費用が掛かって遊は、交見世とはいっても、うっかりいい

安九満1

佐藤 賛。

157 爪音は娵ばつくんに秀たり

清 嫁の琴のうまさを詠んだ句だが、ストレートに解釈するだけではどうも面白くない。

佐藤 賛、『高砂』に「万木に優れる」があ 事ない嫁を揶揄してはいないか。 来ない嫁を揶揄してはいないか。 来ない嫁を揶揄してはいないか。

り、その換骨脱胎か。

同 ―8月号から 人吟

たもつ

生の言う穿ちとは「真実」であると思ってい 実を書くように心がけています。麻生路郎先 川柳を作るときは、いつも自分を中心に真

先輩の作品に挑戦を試みました。 の区切りとして、心を引き締め一七〇〇余の をして鑑賞となると荷が重い。八年間の柳歴 かなか思うように作れません。まして、選句 とは言っても、定年を機に始めた川柳はな

合では、鑑賞の深さもおのずと違ってくると しかし、作者を知っている場合と知らない場 であって、作者その人ではないと思います。 作品の鑑賞というのは、その作品に対して

方は三分の一強です。秀句として掲げた句で ことで見ていただければ、ありがたいと思い ると思いますが、そんな読み方もあるという 面識のある方は約半分です。 多分、私流の鑑賞になっているところがあ

今回、三百六十名中、私の一応知っている

怠けるのもしんどいことだなと思う

います。この一句でものの見方に幅ができま から覆す発想です。すばらしい川柳眼だと思 ます。「怠けるのは楽だ」という概念を根底 本当ですね。こう言われて見るとはっとし

またしても昼と夜とを取り違え

ていると思います。 昼を夜と取り違えることになるのでしょう。 不自由な方は毎日が夜の感覚でしょうから、 夕方なのか一瞬考えることがあります。目の この句の上五の、またしてもが適切で生き 私など昼寝から覚めた時、今、朝なのか、 Œ

国宝が焼かれ失恋より悲し

恋よりも悲しいと、ずばっと言い切ったとこ ろが、この句の魅力だと思います。 が焼かれました。その国宝の焼失を悲しい失 古くは法隆寺の壁画、最近は寂光院の本堂

場の蓋と力くらべをしてしまう

和 泉 あかり

とつい意地になって、力が入り力くらべをし くらべをしてしまうのです。こんな蓋ぐらい てしまいます。下五がこの句を佳句にしまし 壜の蓋と力くらべをしているのでなく、力

乾杯のコップ無色のはずがない

ク色です。穿ちの句です。 スはきっとピンク色でしょう。そうですピン いのでしょう。たしかに、結婚披露宴のグラ 乾杯のコップには色がついていると言いた

忘れたい事どんどんと忘れよう

きな生き方をしてください。 多い中で、忘れたいことは積極的に忘れてい こうという生き方に脱帽です。どしどし前向 もの忘れを嘆いたり、老化を気づかう句の 田

体力がないと通院できません 高須賀

金 太

息災長生きできます。何はともあれご養生を りおいしいお酒を吞める体力があれば、一病 しかに通院には体力がいります。通院から帰 お祈りします。 実感の句だと思います。真実の句です。た

介護保険もゴミ分別もややこしい

やこしいようです。介護保険とゴミの取り合が返されました。介護保険になるともっとやこの原稿を書いている時、私の出したゴミ

どの手紙にもご自愛と書いてある

ます。軽みの見本を読ませていただきました。このように作られるとうまいと感心させられるとうまいと感心させられる 川 喜美子

連 東っ直ぐより少し曲った自然性

多少融通の利く人の方がつき合いやすいと思です。まして、人間になると、真正面よりも茄子でも胡瓜でも少し曲っているのが自然 正 和 永 正 匍

招待状わたしについてるバーコード下句を自然体としてもよいと思います。

す。あれは私に付いていた招待状のバーコーに花を付けるがその他組、大体想像がつきま招待状を見ると、人数集めのお招きか、胸招待状を見ると、人数集めのお招きか、胸

い発見の句を読ませてもらいました。

ドだったんですね。今はっきりわかりました。

中八のリズムは気になりません。すばらし

くつろいで休む広さで事足りる

度声に出して読んでみました。 ます。平易なことばのリズムが良い。もう一ます。平易なことばで掘り下げた句だと思いみ」を自分のことばで掘り下げた句だと思い

恐い者一つ作っておく躾

父親を子どもは待っています。 出 ロ セツ子 と親を子どもは待っています。 田親は父親のは父親でなくてはなりません。 田親は父親のは父親が居なくなったことだと思う。 恐い者る父親が居なくなったことだと思う。 恐い者

格に差が今も船場と島の内

ただきました。

この句から、父親の存在を見直す機会をい

まち)で生きた者の実感です。 「一日の差も先輩と道修町(としょう

道修町は歴史のある船場の一角に位置をし道修町は歴史のある船場というのは、単なるプライドでなく、文化の目だと思う。この句から船場や道頓堀あたりのは、単なるプライドでなく、文化の目だと思う。

企みが有って黙って爪を切る

よそごとながら企みが成功することを祈りの鑑賞だと思う。の鑑賞だと思う。

こっそりと水道の水飲んでいる

つつ、このような句風にも挑戦したいものだ。

そうになるが、重い意味を持っている。 上五のこっそりは、すらっと読んでしまい 志 田 千 代

きているのです。
きているのです。
かいるのです。
かいるのです。
かいるのです。

泰山木 一花ささげて毅然たり

るのが妥当であろう。 奥田 みつ子のが妥当であろう。 奥田 みつ子 奥田 からずれば、夫君や厳父のイメー作者の器量からすれば、夫君や厳父のイメークを加木の印象はまさしく男性である。そし 変し のが妥当であろう。

味わいました。
味わいました。
味わいました。



河 内 選

京都 府 丹 後 屋

擎

0 1 マト

トッピング毎日変えて豆腐 浅漬けのなすが色良くうれ 必好き L 12 日

野望燃えつきる年金生活者

歯をむいて反抗もする猿

手招きをする睡

蓮に ズ

1 0) 4 イン 芸

死球の手痺れるままで踏むホ

1

4

杯食べとこう

も末だお腹

うっ りが重 なり疲れ 倍 になり

市

中

澤

伽

羅

食欲は暑さなんかに負けません

掃除機を怖がる犬を飼うてい 3

のは未練たらし 10 歌ば か #

n 京都

市 Ш

か

本

お 隣 たくさん生っ

てる

浜

市

巖

か ず 枝

ちょっとしたミスじゃないのが多すぎる

か

部

屋

中を物

Ŧ しにし

て狭く寝る

高槻

市

左

右

H

泰

雄

拍

の休み重ねて歩く杖

船

頭

0

のどにやんやの川下り

携帯を持ち安心な待ち合わ j

この 点滴 饒舌な男は風と去るがよい 黙っていれば賢く見えているも 身上 X が 一の都合 Ł 未練未練と落ちてゆく 缶 コー ~ 頟 ヒー く外は 0) 落 ない 人

0

を

增

えも 隣

せぬへそくりそっと確

か

め

まわりは威風堂々炎天下

お

先に聞こえるうちわもめ

気分次第で遺書を時々書きかえる

養殖魚に

似た生活ですぐ太る

和

歌山

県

坂

東

和

代

C

4

がいもをチンして皮をむく男

片言のジョ

1

クがとてもコケティ

"

1

ネクタイが寝巻の紐になる老後

礫

† - 3	界市村上 女也遠足の園児はごみを持ち帰る遠足の朝太陽と握手する。 切れぬよう愛の絆を緩ませる	鳥取市 有 沢 せつ子類問続出 危険水位を越えている 蛇口全開今日の不運を流し切る りょう はいすい かき出す電車は知らぬ片想い	富田林市 中 井 ア キ 大阪城高層ビルを睨み付け 生きとればどんな日もある四面楚歌 生きとればどんな日もある四面楚歌 生きとればどんな日もある四面楚歌	河内長野市 大 西 文 次
と か す す	旅の宿いつか初恋ものがたり 界 市 藤 井 一二三 が要とされる幸せボランティア 必要とされる幸せボランティア	安房に巴里のはがきは似合わないと中斜塔まだ倒れずに人集めいい線を厚底靴で崩してるといい線を厚底靴で崩してると、	大阪市 岩 崎 公 誠痛いとこ突かれひと声咳払い 古本屋店主も古書に似た風情 無職と書かず線を引く は顔 無職と書かず線を引く	豊中市 江 見 清

妻や子にまだ見せてない背なの傷むぐらしが鳴くから今日は斧仕舞うむぐらしが鳴くから今日は斧仕舞うすれ違う心を癒す酒二合	愛媛県 中 居 善 信熱風を吹きかけていく排気ガス 足だけの海水浴でがまんする 足だけの海水浴でがまんする	医者梯子診察券を間違える 今治市 中 村 好 恵	今治市 野 村 清 美部の大大人頂戴しますほめ言葉 かりがたく頂戴しますほめ言葉	今治市 塩 路 よしみ
あの頃は貧乏しても若かった真っ白いシーツに夫は気が付かず真っ白いシーツに夫は気が付かずら出いに頼りたくなる気の迷い	高知県 百 田ののでは、 ので	香川県 原 会識は母から受けた宝もの 良識は母から受けた宝もの 良識は母から受けた宝もの 様が蟻呼んで増やしてゆく仲間	愛媛県 宮 本 末 子釣ずきの無邪気な法螺を聞いたげる 中しエビが浜いっぱいにある活気 生いはずの高速道が動かない	愛媛県 安 野 案山子

藤

道

子

元

和

可

坂

田

由美子

デパートの外の暑さにほっとする 脈やかに山道譲る熟女達 不器用が最後に笑う二枚腰 情敗の背中の砂を追うカメラ	東京都 井 上 つよしアバンチュールへ嗅覚がしのび寄る 要想笑いに一票の下心 愛想笑いに一票の下心 がる宝くじ ればで座が盛り上がる宝くじ いの頃は貸した小銭も忘れがち	連の台迎えられたく善を積む 準の台迎えられたく善を積む	横浜市 三 村 八重子フルムーン哲学の道入れておく 日答えではありません自己主張 引き分けにされた喧嘩があとをひき ばあちゃんも孫もかわいい五等身	横浜市 保 田 絹 子
真っ直ぐに歩くしかない無位無冠朝取りの露に優しいナス キュウリ再会の白髪握手で笑い合い	日立市 加 藤 権 悟 を表で喜劇演じたエセ教祖 を表で喜劇演じたエセ教祖 はどほどの酒で夫婦の弾む口	林日のダイヤで走る盆のバス 白鳥の美の対極にいるアヒル 白鳥の美の対極にいるアヒル で入れる留守電話	八王子市 井 上 京一郎 東実が隠されている記者会見 平凡な中で刺激を求めてる 平凡な中で刺激を求めてる	東京都 清 原 悦 子

嘩しているフルム	とだ	僧若くブランド物の眼鏡買う	こんな顔やったかいなと夫を見る	元技師で角度正しいダンスする	橿原市 居 谷 真理子	禁酒すると威張っているが歳のせい	失業に満ち満ちている神の国	庭あるく鶏いつもしたり顔	十八番なくて唱歌で茶をにごす	ラベンダー摘んで富良野を持ち帰る	奈良県 江 波 正 純	優先席これから化粧始めます	うまそうに食べるあなたが好きになる	鍵穴の向こうで家族もめている	釈放へ捨てた故郷の駅に立つ	炎にも氷にもなるおんなです	奈良県 渡 辺 富 子	あの手この手誘いをかけてくるチラシ	百万ドルの夜景でうまい大ジョッキ	暑いほど天神祭り盛り上がり	チ	青い梅見ると口元引き締まり	
密回	空こ クナ	ての基本燕が教えてる	エリートに育てた先に待つ空虚		海南市 堂 上 泰 子	風鈴を吊るして夏の事始め	初なりの茄子とも角御先祖へ	残された夢が自分を老いさせず	すぐ許す私の心見透かされ		和歌山市 吉 村 さち子	小さい方取って童話を信じてる	優待券当たる中途半端な運	モンゴルの娘は七歳で羊追う	この人も周平が好き図書カード	段々とサドルを上げて親離れ	三重県 尾 崎 勤	娘の下がり派手目な服に気がひける	缶ビール仕事疲れをお出むかえ	うの花の昔を偲ぶ甘い風	梅ラッキョ漬け終えて母夏迎う	雨しとど紅茶のレモン厚いめに	京都市 勝 山 美千代

上手下手より花のある人気者でもない家の戸籍で気にかかり	可らな、家の三帝) 気こかかり	ケセラセラで来た家計簿が火の車	利き腕が泣きの涙の五十肩	好物を食べて忘れる悩み事	尼崎市 清 水 久美子	倒産の運救う神捨てる神	厚底に警告したい改札機	父の日につい母の日の品を聞き	つき合っていくしかないと医書を繰る	日参のリハビリ効果見えてこず	尼崎市 軸 丸 勝 巳	焦点をぼかす絵の具を溶かしてる	犬に優しく僕にはきつい妻である	ちょこと来て憎まれ口をたたいてる	退院して先ず手始めに墓参り	台風の進路気になるバスツアー	尼崎市 森 安 夢之助	噂など気にはするなとひとに言う	台風のニュース隣も槌の音	雨の午後 頭を空にして休む	ねる間だけ眼鏡休憩させてやる	あまのじゃく大人にもある反抗期	和歌山県 村 中 悦 男
なコント飛び出るiモ	だんじりの屋根でピエロの汗が跳ね	さあ荷揚げ大漁旗に鰹跳ね	満腹へ出されたケーキまた入り	胎動へ夢がふくらむ児のキック	伊丹市 延寿庵 野 鶴	燻し銀の人生だった父偲び	二人連ればれて咄嗟に兄になる	貪欲に新しいこと見つけ生き	跡継ぎの衣姿に古寺安堵	代役と思えぬ冴えた演技振り	三田市 久保田 千 代		年金の暮らし平和だなと思う	夫逝って35年闘った	心地良い目覚め元気だありがとう	真夜中の水感謝してゴクリ飲む	神戸市 船 津 とみ子	滝つぼにこの世の憂さを置いてゆく	グリンシャワー年を忘れて山歩き	鳴き下手な鶯が呼ぶ夏の山	約束をふっと忘れて楽になり	約束が零れそうです両手から	尼崎市 内 田 美也子

ためらえど否応なしの自動ドア一匹のはえ冷房で羽かくすー匹のはえ冷房で羽かくす朝顔を数え食欲うれし朝梅雨晴れにもの干し竿がせきたてる梅雨の日は原色を着て万歩計	の繁ツ物拶ぼ期トのは	鳥取市 河 田 のり代したけど抜けぬ親知らず 川 のり代したいとりでも笑えば心晴れてくるしかくちゃの顔が並んだ露天風呂	灯頭くるめく手術台をあげ胡瓜頂くいいトラの四字が尻かられるのはないで知る	篠山市 谷 田 多美子
船底に密航者たちすしずめだ。日曜日どうでもよいわ朝御飯日曜日どうでもよいわ朝御飯	何してもいいのにしたい事がない 何してもいいのにしたい事がない 自己中のたった一人を持て余す 自己中のたった一人を持て余す	人生の荷物はひとつ夢鞄 鳥取市 福 永 水がになるまで笑い続けよう 歯びてくる脳ヘレモンの丸かじり	皇気払うアイスクリーム売りを追う 山苺熟れているけど蛇とぐろ 山苺熟れているけど蛇とぐろ ・ 本道の木橋は朽ちて蜂巣食う	鳥取市西尾

ひかり

久子

尾 敬之介

愛

恵

喪服着て皆美しくかしこまる	ゆきずりにやさしい傘の愛貰う	皿を拭く一枚ずつをいとおしむ	ワープロへ指も頭もぎこちない	秒針にせかされ駅を駈けあがる	鳥取県	家に来た蛍が今日はよく光る	髪を切り梅雨をすっきり乗りきろう	生ぬるい風に吹かれてくたぶれる	桔梗咲きあっと言うまに盆がくる	老いた足三里の灸がよく効いて	鳥取県	今朝もまた黙して山は霧浴びる	同額を払って全没で帰る	休耕田に巣づくり まんの良い雲雀	胸底のマグマふつふつサイン出す	まっとうに生き抜く陰の操縦士	鳥取県・	人生の句読点は自分で打つ	大島渚カットカットに生き返る	親の老い受け取めるのに時が要り	死んでから勲章なんて要りません	命への畏敬薄れて罪犯す	倉吉市
					鳥						山						加						猪
					羽						岡						藤						Ш
					玲						久						公						由美子
					子						枝						子						子
にっこりと笑う緑とすれ違う	おばあちゃんぴちぴちしてる負けられぬ	別れようと思わないけど喧嘩する	古ミシン雑巾だけはまだ縫える	新聞はしめったままで届く梅雨	出雲市 佐 藤 治	気が付けばライバルずっと先にいた	満ち足りてパンもふっくら焼けました	雨雲に追いかけられているペダル	もういいと拗ねては見たが放っとかれ	さわやかな婿の人格変える酒	松江市 銭 山 昌	あずけてた命 謝罪ですむことか	どうしても解けないことが多すぎる	豊かさに埋れ善悪麻痺してる	お名前がすんなり出ない老眼鏡	使わない漢字脳から逃げている	松江市 山 根 邦	幟絵に武者生きかえる五月晴れ	出土片ジグソーパズル壺にする	造成地またまた遺跡出たそうな	カタコトの孫とババとの二重唱	叶うなら介護受けずに終りたい	鳥取県 山 下 節
					代						枝						代						子

ゴールまで牛歩であゆむすきな道の続き友も受話器でけだるそう不タミナを付けて明日へ早寝する大玉で昇る朝日へ決断す	婦うがあれば	いい寝覚め畑の雌花待っている いい寝覚め畑の雌花待っている さわやかな朝が待ってるウォーキング さかをかな朝が待ってるウォーキング しりが空しい風となってすぎ	とうなと一途な滝に論されるとうなと一途な滝に論されるとがある。 出雲市 岡 あきら と 関き流す術を覚えて楽になる と チピチのトマト大きな笑い声 と しょりもやっぱり私の色で生く	出雲市 伊藤 玲 子
何かいな長い行列並んどこあの人は無い無い言うて貯めてはる場浴みしに五千歩あるく梅雨晴れ間場がさつがひょいと首を出す	ま早ようと母に電話が日課なり お早ようと母に電話が日課なり お早ようと母に電話が日課なり	東市 斎 藤 さくら 年色一本足して手毬がよく弾む 大色一本足して手毬がよく弾む 大色一本足して手毬がよく弾む	岡山県 国 米 きくゑもう一夜泊まろう夕焼け見たいからもう一夜泊まろう夕焼け見たいからもう一夜泊まろう夕焼け見たいから	島根県福間博

目薬を外して顔を右ひだり銀行より大きく我が家かく略図銀行より大きく我が家かく略図をごうには縁もゆかりも思もないではいすぎ調子良いのもむくれ出す	生きて満足出来ぬかも知れず 百生きて満足出来ぬかも知れず 百生きて満足出来ぬかも知れず で もないる今日もお薬様々で で で で で で のように風邪を引く	原底のママを見上げている瞳 所でふきふき水を飲む熱帯夜 の回も湿度計みる寝苦しさ あじさいの青は私の安定剤	では では では が での での での での での での での での での での	堺市
	大	和	**************************************	喜
	Щ	田	橋	多
	道	つ づ や		美
	子	や	錦	波
金持ちになってだんだん寄りつかず吐き出した言葉の重み後で知り吐き出した言葉の重み後で知りせかせがまんの出来ぬ子に育ち女ひとり乗れる優しいタライ船	食うた嫁教えてくれる処世術 孫の目よきれいなままで居ておくれ 孫の目よきれいなままで居ておくれ は白一重咲きなら尚更に	大阪市 亀 では、	苦を抜けた涙は真珠色に映え 親切へ有りがとうもう若くない 世の中を犬搔きながら溺れずに 一田出しはせぬが唇よく乾く	大阪市 三
	本	井	井	浦
	日	円	正	千津子
	0			津

うちの猫ネズミに負けて帰るなり	限りある命と知って強くなり	うちの娘が隣の家の嫁になり	今日までのうそを埋める穴を掘る	虫食いの葉を切り落しバラ活ける	大阪市 **	公園の砂場に孫の明日を見る	酔いしれて軍歌哀しい屋台酒	惜春の森の谺が冴えてくる	伏せ字の中に人を許した跡がある	駅いくつ数えて傘寿いのち継ぐ	大阪市	一日をぼんやり過す充電日	誘われて今日もお出かけ弾んでる	植木鉢動かし出合うかたつむり	問いかけた花はきれいに咲いて見せ	テレビから団欒の知恵かりて生き	大阪市 区	どなたでも依怙贔屓しない体重計	勤怠をよく見分けてる体脂肪	診察券間違えぬ間はまだ安心	ラッキョ漬け臭い残して床の下	買う金が無くてよかったそごう株	大阪市
					熊						_						榎						伊
		100			代						本						本						藤
					菜						勇						舞						博
					月						太						夢						仁
社内では飲んで無いのか雪印	出発は準備次第のフルムーン	脛痛打自打球なれば痛がらず	おばん度を測って楽し向かい席	あなたより一歳若いわと杖をつき	高槻市	献血の検査が告げる不養生	行く人を遮るように募金箱	直角に受け答えする新社員	あっさりと詫びを言われてたたら踏み	不器用でいつも本音が出てしまう	吹田市	横文字を付けて何でもハイクラス	新聞は喜怒哀楽のマーケット	コンタクトレンズよ俺は此処に居る	青空に座って見たい白い雲	我が運命知らずに今日を満喫す	吹田市	ゲーム機が親子の距離を遠くする	少子化と親の未熟で子が荒ぶ	苦労して建てた此の家も共に老い	お向いの犬が吾が家も吠えてくれ	遺伝子の研究だんだん恐くなる	大阪市
					大						穴						木						中
					大崎						穴吹						木村						中村
																							#6 200000

名を下ガムノー すさしてし	合傘雨がやんで	減らず口大人たじたじでも嬉し	雑巾のように使いしぼられ捨てられた	朝起きて今日の自分に期待する	寝屋川市	冗談の中に本音が一つある	言い訳をしない男で信じられ	無口ゆえその一言が重み増す	花博のバラのアーチでハイポーズ	おしゃべりに傘も弾んで女学生	枚方市	タイガース後は奇蹟を待つばかり	0	十七歳少年法を呼び覚ます	紫外線怖いツバ広サングラス	夏日続き朝から唸る洗濯機	高槻市	駒ヶ岳残雪愛でるバスガイド	馬籠宿相合傘の老い二人	旧友と来て天竜下れば河鹿鳴き	諏訪の湖夕日に映えてトンビ舞い	目に青葉ライン下りの旅楽し	高槻市
			/_		岡						_						乙						生
					本						宮						倉						田
											紫						武						義
					勲						鳳						史						_
ロ)のおうやく)閉って外の前口	世の流れビックリさせる十七歳	どちらにも内緒があって倦怠期	生きている心の整理忙しい	数珠をくる指から愚痴が消えていく	羽曳野市	浮き沈み八十余年泳ぎ切る	想い出を入れ替えている衣替え	褒められて磨きがかかる花の顔	初夏の風抱いて一輪咲く菖蒲	親しさを保ちながらも車間距離	東大阪市	立ち話どこかでサンマ焼く匂い	ピカピカに靴を磨いて病院へ	羅針盤赤字黒字の波に揺れ	物忘れ笑いとばして二人住む	孫の歯が小さく光る誕生日	八尾市	余生だと言われたくないこれからだ	美人薄命私長生きしています	蛙の声農を捨てたる日を思う	ケータイでボクは彼女の手の内に	狼のごとき茶髪がカッ歩する	八尾市
コンジャンドン・オー・	の流れビックリさせる十七	緒があって倦怠	る心の整理忙し	えてい	曳野	き沈み八十余年泳ぎ切	い出を入れ替えている衣替	れて磨きがかかる花の	夏の風抱いて一輪咲く菖	しさを保ちながらも車間距	東大阪市 今	ち話どこかでサンマ焼く匂	カに靴を磨いて病院	赤字黒字の波に揺	人住	の歯が小さく光る誕生		生だと言われたくないこれから	人薄命私長生きしてい	の声農を捨てたる	ータイでボクは彼女の手の内		
	の流れビックリさせる十七	緒があって倦怠	る心の整理忙し	えてい	曳野市	き沈み八十余年泳ぎ切	い出を入れ替えている衣替	れて磨きがかかる花の	夏の風抱いて一輪咲く菖	しさを保ちながらも車間距		ち話どこかでサンマ焼く匂	カに靴を磨いて病院	赤字黒字の波に揺	人住	の歯が小さく光る誕生	尾市	生だと言われたくないこれから	人薄命私長生きしてい	の声農を捨てたる	ータイでボクは彼女の手の内		尾市
	の流れビックリさせる十七	緒があって倦怠	る心の整理忙し	えてい	曳野市 川	き沈み八十余年泳ぎ切	い出を入れ替えている衣替	れて磨きがかかる花の	夏の風抱いて一輪咲く菖	しさを保ちながらも車間距	今	ち話どこかでサンマ焼く匂	カに靴を磨いて病院	赤字黒字の波に揺	人住	の歯が小さく光る誕生	尾市田中ト	生だと言われたくないこれから	人薄命私長生きしてい	の声農を捨てたる	ータイでボクは彼女の手の内		尾市中
	の流れビックリさせる十七	緒があって倦怠	る心の整理忙し	えてい	曳野市 川 口	き沈み八十余年泳ぎ切	い出を入れ替えている衣替	れて磨きがかかる花の	夏の風抱いて一輪咲く菖	しさを保ちながらも車間距	今岡	ち話どこかでサンマ焼く匂	カに靴を磨いて病院	赤字黒字の波に揺	人住	の歯が小さく光る誕生	尾市田中	生だと言われたくないこれから	人薄命私長生きしてい	の声農を捨てたる	ータイでボクは彼女の手の内		尾市中島

ノーマルな十七歳も多くいる	たまになら嫉妬の炎燃やしたい	どれにしょう今日の装い風に聞く	原発と自然共存苦しい図	悲しみが赤い夕陽にいやされる	富田林市 中 崎 深	美しい蝶は昔を語らない	初対面同じ訛りに気を宥す	温室で育ち忘れた花言葉	アングルを変えても同じ丸い鼻	熱のあるうちに纒めておく話	富田林市 大 橋 鐘	隣ゴルフ向い競馬で僕ごろ寝	火・木・土曜演歌を聞いて般若湯	東京の友 仁徳陵へ連れて行く	世間並みの暮らしに感謝鰯焼く	満天の星をながめて手酌酒	富田林市 山 原 昭	クローンに恐怖いや増すヒトゲノム	リーダーの資質問われる危機管理	梅雨晴間夏ばて既に顔を出し	ライバルの本音聞き出す縄のれん	便利さにあえて背を向け戦中派	羽曳野市 永 田 章
					雪						造						水						司
票田もそっくりもらう娘婿	父の後継いだ寿司屋の学士さま	薄情になってぐっすり眠れます	義理で行く眠りを誘うコンサート	別れたら根刮ぎ持って行かれそう	岸和田市	思い切り鍋を磨いて梅雨ごもり	故郷のことばに戻り友と逢う	行く迄が楽しい姑の旅支度	明日着る服を鏡に聞いてみる	神前の誓いまたたくまに忘れ	大阪狭山市	最高と騙して億の金しぼる	今の内 達者な内とツーリスト	九十になれば老後の貯金する	夏バテに効く一品がまだ匂う	クーラーに敢闘賞をあげましょう	河内長野市	ほどほどの酢っぱさ母の漬けた梅	子供部屋聞く耳持たぬ反抗期	寄り添って歩けぬ理由がある二人	夏痩せがチャンス肥らぬ努力する	夏服のカタログどれも若すぎる	河内長野市
					木						矢						水						柏
					村						野						谷						本
					正												正						靖
					剛						梓						子						子

走らずに次を待つのも年のせいてきめんに効いても困るポックリ寺 岸和田市 田
П
穣
-
梅雨のうつ曾孫の声に癒される 綺麗な花も散ってしまえば唯のごみ 青森県
福
福士

大人にはなりきれぬまま歳をとる母に逢える病院の道好きになる喧嘩する相手もきっと病んでいる喧嘩する相手もきっと病んでいる東京都朴訥な語りに耳を傾ける株式者は用済みとなり消され行く影武者は用済みとなり消され行く	住む隣人の輪をはいる。	に急かされる に急かされる をも掃いてお を大きな輪 を大きな輪 を用がこる と肩がこる 横浜	横浜市
吉	JII	Ш 🖽 🕏	鈴
田	島	梨 中 沒	I
土	良	雅 笑	純
風	子	子 子 -	子
ここという時に 無い上がる心の 不況下で凄腕ひ お定めしてバー お定めしてバー よく吠える犬が	手捌きに粋な ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	解れ代境 ル来投碧	
がやがては糧となり う時には光るいぶし銀 る心の隙をのぞかれる ふる里の音虹の彩 定都府 前 上 でバーゲンの朝を待つ でがらの世間の広いこと る犬がいるから遠回り	れる土用鰻の日なり絵筆置くなり絵筆置く	が孤独を深くする 情間に老農ひとりごと 青田に老農ひとりごと 青田に老農ひとりごと 神岡市 中 えぬいている力こぶ みの雨におどっている がしんどいのよと岩田帯 の料理は初夏の味 の料理は初夏の味	静岡市 曽 田
には光るいぶし銀型の音虹の彩型の音虹の彩型の音虹の彩型の音虹の彩型の世間の広いことの世間の広いことがいるから遠回りがいるから遠回りがいるから遠回りがては糧となり	れる土用鰻の日 浜松市 岡 小名土用鰻の日	が孤独を深くする 青田に老農ひとりごと 青田に老農ひとりごと 青田に老農ひとりごと 静岡市 中 西 えぬいている力こぶ みの雨におどっている がしんどいのよと岩田帯 の料理は初夏の味 の料理は初夏の味	岡市 曽

しみじみと故里の香りの山菜めし	もうひと花 花芽しっかり伸びてくる	悪運が強いあなたの傍にいる	言いわけは許さぬ父の骨拾う	鳴門市 八 木	群れたがる姉妹で妻を奪われる	上昇気流弱気の僕は乗りそびれ	欲張って植えた庭木が混んでくる	同い年女はみんな姉に見え	香川県 瀧 井	癌告知あっさりすぎて無感覚	大船の人情映画幕下りる	パソコンのマニュアル積んで脳パンク	息災で今年も染める梅の紅	柏原市 永 浜	仕来りを省いて白い目で見られ	宵祭り風邪を引いたとずる休み	風鈴に朝顔恋の手を延ばし	民の声モラルハザート堰止める	奈良市 田 中	波長合い旧知のような仲となり	嫁姑ずばり直言嫌われる	意外にも気配りしてる現代っ子	ビニールを敷いて花見の場所を取る	滋賀県 中
				芳										加津					賢					宗
				水					勝					件子					治					明
ぬくい目の友と冷たい友の目と	亡夫を恋う唄の流れがとまらない	過去からの電話ゆらりとかたむきぬ	酷使した足が謀反を企てる	出雲市	赤信号ほっと一息押し車	南北の和平の夢に虹を見る	やる気十分模様替えする梅雨晴間	水やりの頬にひんやり風走る	出雲市	電話口片言しゃべりまくる曽孫	里芋の葉っぱの露がダンスする	雨蛙気持よさそに花の上	ゴトンゴー音の止まない造成地	出雲市	迷ったら僕は直ちに酒に聞く	僕のヘソクリ末は埋蔵金だろう	成長率ミクロの差異はない家計	各党首小結ほどで気は軽い	高知県	スランプが梅雨に入って逆戻り	里帰り手ぶらでいいと母は待つ	テキストは母が遺したアドバイス	子育てもすっかり板についた孫	松山市
				青					加					栂					桑					山之内
				山					藤					""					名					内
				久 子					スズ					"					孝					八重美

発想を変えて実行新世紀教え請う昔の人の知恵袋 がい迷ってしまう審査の目 が	温	イク手に政策不イク手に政策不可という。	母も子も居ねむり乳房ふくませて 悪友と遊ぶ話はすぐ決まる こっそりと義歯を外して涼しそう	老衰のインコとりんご分けて食べ でである。 では別のうなぎ美人にしてくれる。 では別のうなぎ美人にしてくれる。 とうが先を行く。 とうがよる。 とうがもなった。 とうがもなった。 とうがも、 とうにしてくれる。 とうにしてもてもてもてもてもてもてもてもてもてもてもてもてもてもてもてもてもてもても
皇太后さまに似させて髪を切り生き生きと生きたし生命ある限りすべて我がドラマは主演 人生譜 が 藤 秋	ī Ē	情報は井戸端会議からもらう 鳥取市 録 沢 風膳囲む感謝どこかに置き忘れ ビルの谷四十五度の虹のどか	高取市 田 中 憧 三日目に淑女の仮面剝げてきた。うろうろとしてる間に虹消える。継ぎ接ぎの夫婦意外と持つ不思議大波は妻に任せて逃げている。	鳥取市 田 賀 八千代 (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本)

我慢にも限界があるお人好し 意傷に浸る間も無し夏椿 鳥取県 橋 夏野菜朝の見回り待っている 鳥取県 橋 は りょう かんげんに新じゃがいもに夏の幸	ロのほころび糸を切る歯持つい部屋ハワイの海の絵を飾る 米子市 小の回り這うまで一人覚悟する 米子市 小の回り這うまで一人覚悟する	和星誰かの生命消えたよう おメモに蠟梅一枝そえてあり きメモに蠟梅一枝そえてあり きメモに蠟梅一枝そえてあり を祈るだなんてみんな嘘 の嘆き全山荒廃す の巣をあばく幾千の憎悪 倉吉市 牧	
谷	塩	下 野 田	
静	智 加	智	
江	恵	子 光 子	(1)
冷予二今 弥がん 東約十の 陀ん 魚せ一虹 のこ	間代 千女け発がに 歩よ犬の	老冷一ス 五助深留 い凍病ト 分手傷 のでとレ 五席傷電	
びっくり口を開けたず日に三回も持てる世紀見たくて竹を踏世紀見たくて竹を踏けたるでがを踏りまする	と 地球病 みつ に 今日は 二重 に まの 肩ほ に まの 肩ほ	知恵逃げ道一つ持の番りが逃げての番りが逃げで	
でいてますます石頭 はれる心がすくわれる に渡し隠居する に渡し隠居する 鳥取 に こ回も持てる 箸	と地球病みつづけと地球病みつづける場の今の君が好き 鳥取た今日は二重丸 鳥取に かんした まの肩ほそり	に小言も少し入れておく に小言も少し入れておく し乗って無口な人になる に乗って無口な人になる に乗って無口な人になる なが溜まり化粧も長くなる そろそろ登る喜寿の坂 鳥取 が逃げてゆく 鳥取	
なり口を開けたまま に渡し隠居する に変し隠居する 鳥取県	と地球病みつづけと地球病みつづけと地球病みつづける 鳥取県 一点ない は二重丸 鳥取県 一点できまる こうした した まの肩はそり した まの肩はそり した まい にくしい まいしん はいいる	に小言も少し入れておく し乗って無口な人になる が溜まり化粧も長くなる そろそろ登る喜寿の坂 高取県 なるであるである。 高取県 なるである。 高取県 に外言も少し入れておく 高取県 に外言も少し入れておく	
くり口を開けたままくり口を開けたる箸に三回も持てる箸アースカー原居する原理平原理平のれる心がすくわれるのれる心がすくわれる鳥取県平のれる心がすくわれるのれる心がすくわれる鳥取県平のれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がすくわれるのれる心がするのれる心がするのれる心がするのれる心がするのれる心がするのれる心がするのれる心がするのれる心がするのれる心がするのれる心がするのれる心がするのれる心がするのれる心がするのれる心がするのれる心がするのれる心がするのれる心がするのれる心がするのれる心がするのれるいのではのれるいのではのれるいのではのれるいのではのれるいのではのれるいのではのれるいのではのれるいのではのれるいのではのれるいのではのれるいのではのれるいのではのれるいのではのれるいのではのれるいのではのれるいのではのれるいのではのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいのでのれるいので<!--</td--><td>と地球病みつづけと地球病みつづけした妻の肩ほそりした妻の肩ほそり</td><td>に小言も少し入れておく 負ったその後の過敏性 負ったその後の過敏性 に乗って無口な人になる に乗って無口な人になる 点取県 鳥 気が溜まり化粧も長くなる たろそろ登る喜寿の坂 鳥の香りが逃げてゆく 鳥取県 河 鳥取県 河</td><td></td>	と地球病みつづけと地球病みつづけした妻の肩ほそりした妻の肩ほそり	に小言も少し入れておく 負ったその後の過敏性 負ったその後の過敏性 に乗って無口な人になる に乗って無口な人になる 点取県 鳥 気が溜まり化粧も長くなる たろそろ登る喜寿の坂 鳥の香りが逃げてゆく 鳥取県 河 鳥取県 河	

信じてた夫に梯子はずされた三猿を決めて耳鳴りひどくなり車椅子お世話かけます生きてます	のとだりつしこうないの	味しめてからパチンコがやめられぬ心洗ういいお話にめぐり合い復たきりが怖くてはげむ試歩の杖	いでの芽には今ので舌子	内定でもう未来図を描く親虎勝って読めとばかりに字が躍る亡夫の忌に向日葵だけが咲いていた野球っ子暑さに強い子に育ち	誤記誤読あれからずっと拡大鏡で上の結果家中ホッとする で母に会う思いテレビの寂聴尼	の鎌で草刈り手がすべるに朝顔配るいきな会に明顔配るいきな会	永ぐこりの水管でよない甲罹廃へ 倉敷市 撰 喜
	代		子		子	治	子
軽トラに家族の夢を積んでいる生涯の脇役でよし添いとげる暑い日にあつい珈琲ペアカップ		せせらぎに疲れを流す旅の宿束の間の宇宙の旅シャボン玉ファッションに合わせ眼鏡を変えてはる	和歌	ピンポンのした事思う過ぎた日日暦見て話のきまるめでたい日滅塩の味も工夫の寿司つくる無花果の青いを鴉試食した	に念をおされるほど太り 携帯デンワあいにく出れぬ場所に居る もめ切り日だけが急いでやって来る あたたかい絵が描けそうな白い雲	政策の実現ほしい選挙戦 - 兵庫県 山政策の実現ほしい選挙戦 - 大村子に帰るさして孫は言う	さいきこをつ
	屋		重		崎	本	平
	起世子		美		美 紗 子	泰	毬
	子		子		子	子	子

経側でなかなかのしる夏の私 近未来ロボットワイフ出来るかも ハンサムも今じゃお腹がデカプリオ 食べて寝るだけで安らぐ里帰り 百度踏む同じ願いの人の波 悲しみが続いて出来たダイエット	『では、こびりで、このでは、このでは、このでででででででででででででででいる。「では、このでは、このでは、このでは、このでは、このでは、このでは、このでは、この	田の血が流れていますお人好し 母の血が流れていますお人好し お隣もお向かいからも茄子トマト	和歌山県 頼りないナースへ血管逃げ回り 年ごみを出してるうちは元気です 生ごみを出してるうちは元気です	和歌山市
小	中	森	杉	木
泉	村	下	Щ	村
ひき	忠	順	精	親
さ 乃	敬	子	子	跻
連風も追い風もあり夫婦坂 関行きのある風景に我一人 奥行きのある風景に我一人 吹田市 で年のない妻の座が広くなる 定年のない妻の座が広くなる ではないでつける薬が出来るまで が風も追い風もあり夫婦坂	おう日は雨ですごゆが近く浄土のみやげまれるところ捜しまであるところ捜し	吹田市 現役のつもりが交替つめ寄られ 現役のつもりが交替つめ寄られ 総選挙まご子の時代やって来た	飯まだか言うてみたいな独りもの かの下でいいじゃない飯うまいから からずれたからがありまいから があるか一タイの大笑い	大阪市
木	大	=	み	星
下	谷	宮	き	野
敏	昌	栄	わき	きらら
子	子	子	きみ	5

ーじとき う切り	出雑 定年を 難 が が が が が が が が が が た 変 れ っ れ っ え っ え っ え っ え っ え っ え っ え っ え っ	しきカが イレかっ イレかっ で たン	
小をれ株 蛛啖7	たの質ごけではやきっせるかり質ごけではやきっせるを葉書ぎっしり書いてくるを葉書ぎっしり書いてくるを葉書ぎっしり書いてくるをでいるオン川面へ仲間入りめた恋も月日が甘くするの様ですが、 の質ごけではやまっせる。	るいい図 クイヤ 野野 男 リ	로
平	吉	大 森 井	
Щ	跗	昇 本 」	E
幸		隆益す	
枝	修	広弘	とし
では、 では、 では、 でいており、 でいており、 でいておいでが行括る でいており、 でいておいでが行話る でいている。 でいていている。 でいていている。 でいていている。 でいていていている。 でいていている。 でいていていていている。 でいていている。 でいていていて	停年でさあこれからが本音なり 停年でさあこれからが本音なり 山の道矢印変える悪巧み 山の道矢印変える悪巧み 岸和田市 水張った田んば蛙も歌いだす	ストレスのたびにおでこを叩いてる 、	2
木太	不	亀 山 與	Í
久	破	井 本 田	Ε

緑

月

明

プライドを捨てた心に風通るいじわるを眼の底に溜めさりげなし	胸の中で捨てせりふ吐く気の弱さ	野田市 那賀島 雅 子	くされ縁とか何とかで丸くゆき	ごろ寝して居ても三度の飯を食い	ショッキングな事件があまり多すぎる	字部市 中 田 忠 夫	茶飲み友いつか茶の間の主となり	垣根ごし覗いてならぬ花に酔い	勝敗の鍵を握った浮動票	高知県 近 藤 功	灯台に見張り頼んで岬暮れ	言った言わぬ雑魚は些細なことで揉め	自分史の序章林檎の唄がある	今治市 渡 邊 伊津志	押す人も悩みを秘めた車椅子	涙して聞く声キット発条にする	国境が解ける話だ春近し	香川県 松 村 輝 夫	水槽の魚に見られている裸	あじさいも傘をさしたくなる豪雨	店じまいのバーゲン長い列が出来	香川県 清 川 玲 子
書か絵かと思う書展の前に立つさざ波の夕映えに浮くしじみ舟	宇宙研 税金をまた空に投げ	松江市 小 川 注 湖	新鮮を唄い文句の冷凍魚	頷いて誰とも合すカスミ草	病院の梯子情報通になる	横浜市 荒 井 広 和	アウトオブファッションで行く寺詣り	知らぬ間にママのニコチン吸わされる	ママの顔本当の色わかるかな	横浜市 豊 田 羊 子	くちなしの花悩ましく匂う闇	横道へそれて十七歳が病む	みちのくの歌手にじみ出る地の香り	横浜市 布 山 嘉 信	原宿の文化に触れて皺が増え	医療ミスされど休めぬ医者通い	熟し過ぎ端から苦くなるメロン	横浜市 金 森 徳 三	夜行バスはじめて行った同期会	アドリブにいい夢のせて買う帽子	変なわたしザルを逆さにかぶってる	青森県 諏 訪 夕 香

カメラを飲んでオーケーうまい酒	に火を点し仕送る並の親	が朝昼晩の膳に乗る	倉敷市 家 守 政	つ人も待たせる人も馴れている	掛け声に若さピチピチ夏祭り	ホッとする椅子がきまった場所にある	米子市 猪 森 ス	くつろいで手足伸ばせる家がある	くやしさを明日に向かって反省す	ままの幸せ続くこと願う	鳥取市 岡 田 信	もさざ波ほどの老夫婦	めての顔して愚痴を聞いている	欠点をうまく伝えて縁結ぶ	鳥取市 横 田 春	嚙んでみて舌で覚えたかくし味	よき人に仕えて学ぶ人間性	子の理想 親の期待とかみ合わず	島根県持田多	抹茶が体に良いとそればかり	いからコーヒーの客長居する	一人ぼっちのところへ孫がやって来る	島根県松本聖
			子				スミヱ				恵				名				輝子				子
老い独り時計と相談して起きる	亡妻へまだ来る友の版画便	欲が出る孫へ高砂謡う夢	姫路市 服 部 一 典	釣り自慢聞いて頂く魚の味	老いてなおナイター好きのファンです	冷房につい誘われて乗りこした	川西市 田 中 喜 俊	父の日にひとりで紅茶飲んでいる	娘のいない庭に咲いてる桃の花	神殿の柱闇から蘇る	川西市 西 内 朋 月	遊んでる時の園児のつぶらな目	日記にはいい事ばかり僕は書く	自分だけ損したときは腹が立つ	神戸市 木 村 忠 義	鍵かけてまだたしかめる老いの家	初めてのお使い財布握りしめ	永いながい一日でした一人の日	尼崎市 野 瀬 昌 子	プール開き子供の夏が始まった	定年と還暦祝いのロゼワイン	ひまわりも百本揃うと暑すぎる	尼崎市 松 下 比ろ志

広瀬 房 江	マイカーを我が家と思い磨く老い宿題を教えるつもりがためされるヘソクリの場所を地震に教えられ	和歌山市 おれがのみょうに色気のあるお尻 白桃のみょうに色気のあるお尻	四角い部屋まあるく掃いてカルチャーへ六甲のオンザロックで上機嫌アルバムに片道切符だった恋	あきらめに徹して夫婦もめもせず あきらめに徹して夫婦もめもせず 妻名儀これもリストラ気にくわず	住みついた庭の蛙に話しかけ 信みついた庭の蛙に話しかけ を ですます筆不精	忘れずに古巣へつばめ来てくれる何もない日にあいにくのお客様 引き立て役グリンピースの自己主張	兵庫県 宍
房 江 ダイオキシン生活犯すゴミ捨! ダイオキシン生活犯すゴミ捨! マーカー マーカー マーカー マーカー マーカー マーカー マーカー アーカー スーク であると で変しげな 京の料理を目で食べるのは 薬 おいんが押して 経になる が押して 経になる が押して 経になる 乳母 で 変 で 産れていまを生きて 防空壕で産れていまを生きて 防空壕で産れていまを生きて 防空壕で産れていまを生きて たたにお化け 西瓜置いてある 高 大を恋うお化けはとても淋し たちにおんけ 西瓜置いてある まったいこと言える仲間の 温 東 東 まったいこと言える仲間の 温 かんしょう アール注 で かっと が で 産れていまを生きて な で 変 で 産れていまを生きて な で 変 で 産れていまを生きて が で 産れていまを生きて な で 変 で 産れていまを生きて が で が で 産れていまを で 産れていまを で で で で で で 産れていまを で で で で で で で で で で で で で で で で で で で			J.,		88		
ダイオキシン生活犯すゴミ捨! ・				4			
ダイオキシン生活犯すゴミ捨! ・		寿	登 美			世	
	いたいこと言える仲間の温いあ又も派手に動いた自己嫌悪度も波乗り越えた夫婦舟	西瓜置いてある 西瓜置いてある	で産れていまを生きての切符鋏を入れぬままが押して絵になる乳母	車に乗るから軽い傘選び 糸家裁でやっと切れました	大阪の鍬三坪の畑荷が重い がな京の料理を目で食べるがまたり増えてくるのは薬だけ	大阪持ち何時か当ると宝くじ りこだわり続く三代目 りこだわりにでいると宝くじ	歌山
						230	DZI
中 藤 崎 井 村 岡		中	藤	崎	井	村	Imi
中 藤 崎 井 村 岡 美 志 黄 露 五 健 弥 津 三			志				

忙しくて淋しさをなだめてる病院で何してるとはないでしょう白黒はPK戦でするけじめ	√7 <u>§</u> ī	旧姓の友に会いたい虹の橋ライバルのお歳を知って気を変える信頼と恩ある人の頼み事	河内長野市	の最前度が上手に打ら返り合うしをせっせと作り友を呼ぶらずしをせっせと作り友を呼ぶらずしをせっせと作り友を呼ぶらずしをせっせと作り友を呼ぶらずしをせっせと作り友を呼ぶ	時らしに試してみるかバイアグラ 段を年期でくれる稽古事 とであるが、日本のである。 である。 である。 である。 である。 である。 である。 である。	堺市
稻	i 1	前	杉	横	岸	荻
葉	1	发	谷	山	本	野
	<u>=</u>	三 七 子	カズ	捷	寿	像
洋	=	7	エ	也	代	山
付時もより早く出て行く安売! 何時もより早く出て行く安売!	と短無のエ	※目手会司記交換告返る 横浜市妻となら音が無くてもズンチャッチ妻となら音が無くてもズンチャッチ	するる格	散歩では満足しない万歩計を形りュックサックも素敵だなの形りュックサックも素敵だない。	じさいの一際勝弱りテレビ	岡山
日熊本市	に津ゴ市	浜 チャ	浜 市 市	兵 潟	果るり	市
		浜市 平	浜市 市	海県 県	大	市清
本市	市	+	市市	海 県 高	県	市
米市 北	市岩	+	市市市	海県 高野	大	市清

俺よりは先に死ぬなと肩を揉み万札をくずせば羽根が生えてくる	ライバルを蹴落す靴を買ってくる 空間に私の夢をちりはめる	男女平等 男女の垣根あってよし 出雲市 城 多 喜幸せな女演ずるマタニティー	安来市 原 煩 悩 児因果だよ不器用にしか生きられぬ腹の虫が邪魔して何も結ばれぬ	ちぎれ雲お前も一人俺もだよ 鳥取県 竹 森 富久 江相槌は打つも本音は伏せたまま	鳥取県 西 沖 彰 雄夢の中亡母の電話を待っている	公約はどの政党もバラの色 米子市 足 立 由美子二つだけポッケに残る恋がある	負け戦 蟹の鋏がもげたから 鳥取市 宮 脇 道 子愛もまた時が風化をさすんだね	愛媛県 黒 田 茂 代
紫陽花をかごに盛りつけ紙細工湯上がりの肌心地よき初夏の風	歌だけは明るくいこう暗がらず 見 章級の元かれかれは楽なのに	婦なんでもア	山に生き海には縁のない家系生きるのに重荷になると欲を捨て	好きですと言えぬ思いの勇み足 幻想的なホタルのような恋したい	でくらんぼどなたか紅い名に替えて欠けやすきこころよ悔いのある風よ	知らぬ間に落としています老いの愚痴梅雨晴間 草取りゲームして暮れる	魂を和紙に吹き込み昇る凧 倉敷市 森 本 文 子食べ物の安全乱れ国乱れ	宇部市 藤 本 一 規

(森田四三郎・野田栄呼両氏の句は47ページに掲載してあります)

麻生路郎の作品とその周辺

なのこ、 3

(116)

橘

風

高 薫

文が掲載されている中で数篇を再録する。 柳漫画に寄す」のタイトル、 辛一郎

古川柳は

折に見てあげて下さい。 川柳君のスピード 二人三脚と思えばいいのじゃありませんか。 (詞的価値) 等は、 独走の

川柳中の漫画的なところ

この二線に関する限りのコンビネーション 漫画中の川柳的なところ

福されるであろう。 は最も安全なそして古典的なアダジオで祝

川柳家は今日の川柳漫画なるものに満足し

П 塊

るのであるまいか。そんな絵が多いと思う。 る為に漫画家は川柳漫画の現状に満足して居 らぬ。漫画は売れる。川柳は売れない。売れ て居ない。句も絵もさらに向上しなければな 私は川柳は素人である。そのつもりで聞い 細木原 青 起

て貰いたい。

りで裏がない。漫画にしても句の説明になっ 諷刺があっても真っ向から切り下し、表ばか 解く形になって句も漫画も活きる。ところが 相人事を諷したものが多い。故に漫画が謎を て了うから甚だ面白くない いようなのが大部分で漫画にはなりにくい。 今日の川柳はお上品で叙景が多く、俳句に近 (全部とは言わぬが) 謎を以て世

想である。 川柳漫画を画いて居るので、私の偽らざる感 を蒙るに違いないが、私は『日の出』に毎号 し控える。 こんなことを言うと川柳家諸兄からお叱り 其の為に私は川柳漫画の批判は差

たいと思う。

Ш

Ш

れは又別である。しかし川柳は滑稽詩である 欲しいと思う。大衆を対象としないならば是 滑稽に描いても結局画作者に依って品の上下 うが、しかし、俳画風では意義をなさない。 という先入主が大衆から失せない以上は、大 は左右されるものである。 絵になる川柳は矢張り古川柳のようなのが 川柳家は上品な漫画を希望されることと思

> 究運動することである。 まい。要は川柳雑誌で川柳漫画の行く道を研 衆雑誌が桁はずれの漫画を描いても止むを得

描くとすれば素朴に純真に訥弁に描いて行き によってはあれでいいのであろう。若し私が ものと思う。大衆向なら仕方もなく出版目的 私もその通りと思う。要は川柳を選べば画も 雲霞の気持ちでなくてはならない」と言う。 る。誰れだったか「画は山川草木、 る、絵に川柳の賛する、其処に自ら二途があ り川柳挿画だと私は思う。また川柳を絵にす 各態各様に面白い。早く言えば漫画と言うよ 浮世さまざま、楽天の金言警句川柳漫画等々 挿画や説明画でなく、なんとか展開してくる 路郎柴舟の累卵の遊び、素文の命の洗濯 前 田 句は棚引 Ŧi.

筆描きノースロップは仲々むずかしい。 ピッタリきません。しかし川柳家が重爆機な 描きの漫画はホークで飯を食べているようで どの新しいものを詠んで絵にする場合、 柳漫画は、やはり筆ですナ、どうもペン

モボやアパートばかり描いている漫画家にと っては川柳漫画は何よりの勉強になります。 長尾のヲッさんかて筆描きですね。それに

波多野五楽庵選

題のない坂でキリキリ舞をする 私からわたしへ投げる牽制球 折り返し点で賽子振ってみる プライドに支えられてる土ふまず 和歌山市 弘前市

鈴が鳴る風に答をするように 嬉しさに思わず声の裏返る 鳥取県 岩崎みさ江

一本の棒杭となる自己主張

鳥取県

小西

雄々

泥舟に一緒に乗った蝶も老い 輪廻転生なにか省略できないか

大きめの柩に柳書入れてくれ 富田林市 池

森子

寂しさと二人で火消し壺の中 安心を激しく揺するのはあなた

仏さまこれは種なしぶどうです 松原市

小池しげお

寝転べば郵便受けに音がする

俺流にやる就職も結婚も 十八のうなじに夕陽振り返る

河内長野市

加島

由

日立市 加藤 権悟

指切りのなんときれいな嘘だろう 八月を綴る昭和の正誤表

ゆらゆらと揺れる煙のかくし事 いいのですこれが私の塩加減

虹つかむまでは歩けと影がいう 大阪市

理屈抜き軽いリズムが性に合い 鳥取県

人間をやめる話を海とする

コーヒーにいつまで待つか聞いてみる 尼崎市 長浜

凡鐘に一念発起するもよし 流れ星運命論は信じない

〇Lのきれいな爪が謀反する 凸凹の路でドラマが終わらない 三宅

終着駅の時計が明日になってい

る

無から無へ歩き読けている余韻

古里に武蔵が残した道しるべ

手離したとたんに道のつく噂 時々は低温火傷する淑女

岡山県

大石あすなろ

富田林市

藤田

富田林市 中井 アキ

西 Ш 幸

宮崎ヒサ子

三浦千津子

上田 俊路

澄子

羽曳野市 酒井 壶

戒名を聞かれて答えられますか

海南市

保州

岡山県 福原

悦子

安全の死角にあった落し穴

時々は夫を独りにしてあげる 横浜市

和可

七円のハガキ昔を語り出す あれこれと愚痴るが鈴は付けられず 秋元

シナリオは神に任せておく老後 とことんを落ちて登った半世紀 岡山県 矢内寿恵子

鳥取県 土橋はるお

神の国意外にうまく切り抜けた 男ですずばりと癌の告知しな

流されてよけいいびつになった石 寝屋川市 龍島

忙しい人に前略箇条書き

西宮市 西口

沈黙という武器を時々行使する

後ろ姿が若いのでついてゆく 倉吉市 山本 玲子

松江市 川本

畔

鏡の中の劣等感を拭いている 東京都 後藤

早智

海深し敵も味方も抱え込み

尼崎市 春城

馬鹿付きねって言われたことを忘れない 川崎市 和泉あかり

善信

運と縁ハローワークの群れにいる

中居

謎ひとつ解けぬ男で鈍感で

Vi

わる

尺取虫の腰のあたりの処世術 少年がおとこになった部屋の鍵 曇天の向こうをいつも考える 人の名が喉の関所にひっかかる 勲章をもらい古傷消えました 戦争を忘れてしまう愚かもの 引き締めの箍が弛んだ丈のこと 耳底で故郷の蟬が鳴き止まぬ ほおずきが熟れた子供のいない家 越えてきた道平坦に見えてくる はしゃぎ過ぎ大字小字見失う 無上甚深勝負をつけたのは没後 石舞台みんなカラオケしませんか 滑らかな嘘も時にはけつまずく 羽曳野市 和歌山市 和歌山市 東大阪市 米子市 八尾市 弘前市 鳥取県 鳥取県 青森市 枚方市 高槻市 土橋 福井 高瀬 安永 吉川 榎原 田村きみ子 前 桜沢 乙倉 保田 政岡日枝子 村上ミツ子 漆戸凡々子 古久保和子 たもつ 桂香 霜石 千世 武史 寿美 絹子 公子 螢 ひとり子へ愛が時々煮こぼれる 毒舌で鳴らしているが淋しがり 沙羅双樹あんなに今朝は輝いた 諍いの続編ごはんすんでから 私が抜く私の墓地の草 七曜めぐる何事も無かったように 弱点を曝し裸のお付き合 愚かにも自分の影にけつまずく 空は真っ青あっさり潰のうまい朝 道を訊くことに方向音痴馴れ 知識だけ詰めて五感を研ぎ忘れ 自然発火しそうで水を飲んでおく 残り火を年俸にして値踏みされ 野に伏して突撃待ったことがある 通過列車ばかり見て来た喉仏 大和高田市 和歌山市 鳥取市 大阪府 米子市 横浜市 松原市 横浜市 和泉市 大阪市 西宮市 奥田みつ子 枚方市 横浜市 横浜市 三村八重子 川上 岸本 山下 玉置 菱田 中川 小林 寺川 澤田 白根 鍛原 長島亜希子 田中 宏章 省子 大輪 和重 ふみ 重人 満秋 周信 千里 正坊 弘 風船の空気よどんでいませんか 本物も知らず名画を買いたがる 無駄話言わぬ相手で肩が凝り 青写真だけは立派な子の頭 ひたむきさだけは忘れぬ花の種 繋がれた鎖に勝てぬ自己主張 占いのはしご自身を見失う 耕して耕して母小びとなり 砂糖菓子壊れて還らない夏野 敗因へ触れずに先ずは酌いでやり 束ね髪解いて迷いの中にいる 賛美歌と艶歌を使い分けるのど 逆縁の墓へひっそりおとぎり草 病棟で余生をかじるじれったさ 人間の裏を覗いた突然死 和歌山市 藤井寺市 和歌山市 和歌山市 尼崎市 横浜市 茨木市 米子市 箕面市 美祢市 鳥取県 弘前市 黒田 中島 木本 田辺 藤井 青枝 安平次弘道 田中 椎江 籾山 高野 木村富美子

朱夏

鉄治

清芳

隆盛

正雄

さえきやえ

戸

ツネ

宵草

吉村さち子

鹿太

茂代

志洋

笑子

卵割るなんの罪悪感もなく 最後まで握ってるのは何だろう 冗談の恋がいろづくロゼワイン ほどほどがみんな違って梅雨あける 有頂天になったら見えぬ花の色 さやむしりするモナリザがいる我が家 にっこりの会釈に起きた静電気 ほほえんで握手してやるおもいやり 横波に耐えてきずなを強くする 風向きを少し気にして靴をはく 送り火の井桁くずれて茄子の牛 病む母へ月見の窓を開けてやる そして初夏孕んだらしい寒立馬 親も子も本気になった別れ道 粒の種の謀反を侮 藤井寺市 和歌山市 岡山県 弘前市 京都市 島根県 香芝市 鳥取市 尼崎市 出雲市 弘前市 弘前市 大阪市 横浜市 市 大内 都倉 高田美代予 宮本かりん 神夏磯典子 春城武庫坊 近藤 小林 徳田ひろこ 岡 福士 桜井 高橋 斉藤 あきら 求芽 寿美 朝子 道子 慕情 千秀 岳水 妻子 劦 親ばなれやっと離陸にこぎつける もつ五年延命措置を恨みます 間をとってちょこちょこ投げて来る無心 風化した夫婦接着剤が要る ばったりと意外な人に逢う喫茶 持ちごまをはめ込まねばという情け わたくしが私を留守にする電話 的にたつ男影武者かも知れぬ 宗教の誘いに昨日よろめいた 古傷が痛み出すのも梅雨の憂 動いても動かなくても汗が出る おしろい花わたしを覚えていたようだ 大屋根の月を味方に書く日誌 信号青今のチャンスにかけてみる 本の木に逢いに行くにぎりめし 藤井寺市 太田扶美代 和歌山市 寝屋川市 唐津市 黒石市 鳥取市 唐津市 倉吉市 鳥取市 鳥取県 米子市 米子市 鳥取県 唐津市 池田市 米田 井上 夏目 和田美寿子 土橋 青戸 岩原 栗田 平松かすみ 仁部 山門 相馬 石谷美恵子 勝視 喬水 睦子 幸子 健 瑞枝 田鶴 久子 四郎 タミ 一花 胸の内読まれてからの不眠症 哀しいなつい愛想笑いをしてしまう 弾まない毬の言分聞いてやる 相槌がほしくて花の話など 原風景残る故郷は過疎となり 子に見せる背だからたまに掃除する 幸せは自分の足で踏む大地 奥様と呼ばれてこそばゆいシッポ 逃げるのでなくて離れていくのです 小屋ながら当れば凄いくじ売場 物納の土地が泣いてる夕茜 還暦が米寿を背負う介護法 お言葉に甘え過ぎてはいませんか 入道雲いよいよ別れが辛くなる 人様にあきらめなさいと言い易い

倉吉市

牧野

芳光

米子市

鷲見

正子

出雲市

石倉芙佐子

奈良市

米田

恭昌

和歌山市

池永

正匍

池田市

藤井

計光

高槻市

左右田泰雄

羽曳野市

森田四三

郎

和歌山県

村中

悦男

岡山県

山本

玉恵

高槻市

傍島

和歌山市

山口三千子

横浜市

清水

潮華

箕面市

出口セツ子

洋

水 煙 抄

8月号から

Ш 水

古

嫁や娘に温いリモコンされている

伝っている。頼もしい母の姿が見えます。 筈。しかし、煮付のこつや味付けの技を問わ れると、遣われていると知りながら喜んで手 若い世代に主権を引継いで自由な身となった 明るいご家庭で笑い声も聞えてきそうです。 亀井円

無駄遣い直してくれた不況風

不況によって所得収入が少なくなると、再生 と応用の心得が芽生えました。いい事です。 しいとされていた時期がありました。しかし 創意工夫を忘れさせ、繕うことなど恥ずか 沢せつ子

前で音読する姿を我が家で見たことがある。 が届いた。その内容は嬉しい結果であり、 生前には志に望みを掛けていた子から便り 灯明に嬉しい便り読んでやる 中井アキ

欠点があるからみんな面白い

水清ければ魚すまず」とあるように美点 日の出

手で人生を楽しくする秘けつなのか。 持が湧き、話題も生じる。欠点は口説かれ上 るとそれを補いたくなる。だから助けたい気 ばかりであると近寄りにくい。少し欠点があ

冷蔵庫掃除が好きな食べ盛り

宏

至

僭越な言いかたになるかも知れないが、

転率が高いから何時も新鮮。貯蔵品で満庫に も強いから食中毒も少ない。庫内の食品も回 くる。不思議な現象である。 なりかけた頃には子達が孫を連れて集まって 子供の成長盛りは食欲も旺盛、 また免疫力

賞味期限に追われて今日もまた肥る

変るかも知れない。飽食から糖尿病に注意の 新鮮な食料品が貯蔵でき、潤いのある生活に 前句の家庭と共同生活ができれば、 高野不二 、何時も

冷凍庫いっぱいにして旅仕度

言葉も聴かなくて済む。

うえで揃えておきたい。待遇をよくしておい て、気分よく旅に出たい。詰込んでおくか。 について考慮に入れたくなる。好物も知った 何と言っても留守宅を守る者に対して食事 中 子

セピア色の写真に深き縁あり

那賀島

雅

深まり、毎日生き生きと過す幸ですか。 年輪として現れていようが、夫婦の縁は益 の歴史をたどった証。容貌は気づかぬうちに モノクロがセピアに変化するまでには多く

湯の旅の疲れがとれる家の風呂

間

タツヱ

何時ものような身のこなしが出来るからか しかし留守宅の者に旅の疲れは聞かさない。 だと思う。でも家庭風呂は遠慮がいらない。 庭風呂は旅先の湯殿に比べると、質素な設備

携帯の電池切れたかしっぽ切れ

池切れ通話不能となった。果報は寝て待てか。 に結果報告した上、最後に自宅だった時に電 に伝えるまでに、母校や指導に関係した先生 今春体験したので理解できる。朗報を家族 松本

ぎりぎりの譲歩で続く夫婦仲

は失敗でも赦してくれる。 夫婦は甘えれば甘える程慰められるし、失敗 譲歩と解説された貴殿に尊敬の念を贈りたい。 私は、辛抱と妥協の生活、と答える積りです。 人生で結婚とは何ですか? と問われたら

子

女性コーナー

向者の七

西 出 楓 楽 選

色眼鏡かけた話が風に乗 だんご鼻 良いことばかりかいでくる 本番 を少し厚着にさせてい 命すべてを光らせて

夏帽子 後 はいだとて仮面の下もまたピエ 頭部ずきずき疑問 も実もある余生だと信じてる 弾めば転びそうだけど 符が いっつ ば U

刃こぼれ 浪 丹念に知恵の 費癖こころの飢えを引きずっ 画像をにっこりさせてきた絵 に優しい顔になる研ぎ師 輪解いている月 H 7 筆

西宮市

渕

富喜子

妥協して黄色でいつも立 青空を仰 自 ラの散る幽かな音よブラー 一本手元に をそろりそろりと飲んでい iř ば 拳開 あれば恐くない 13 てく ち止 まる 4 3 ス

> 歌山 歌山 崎 市 市 市 和 か

和歌山 寝屋川 田 市 市 市 桜井 Ш 本希久子 あ やめ 干秀

H

市

鳥 取県 崎市 岩 みさ江 澄子

羽曳野 米子市 歌山 鳥取 福 田 ŋ 日 ひろこ i 枝子

テンショ

の上

上がりっ

放しの

乱

n

3

歌山市

八尾 横浜市 伊 111 子

での花

は

癒し

の色に咲

中

わと向きになる未

泉 あ 通帳が

母

から

喪服が母を送り出

キリキリ 0)

舞をする余生

ひとく 深爪に 指 風 切り しく 穴を入れたくてにっこりとす 拒 なっ 0 せ 指がじりじり焦げてくる もふたくせもあるぼんの 也 て本音が喋 疑問符溶けるまで ŋ だす 3

叩 欠点を隠す 着地点確 も皆 かれる事が怖くて貝になる 0 孤 朱思わせ振りな過去が かめてから飛ぶことに 独と知った安堵 保護色見 つからぬ あ

毒 のうちに生 をダブルに恋の話 を薬とし 一き身の て生きる 補修する

1

0)

鍵

を宥

め

て待ち惚け

すぐに忘れるから

陰 V 燭 創 2 を 0 は日 灯 枝 た と昔 堪忍 付 Vi 陰に えの 母 0 ば まま夏 なしが 似 間 合う花 で揺 貼 理 を盛 0 かい ĩ 7 れるぶらんこよ 涼 があ を呼 たくなる 3:

浜

元

田

たず とし子 美也

咲き終えて花は小さく息をす 和 #井寺市 西宮市 囲 大阪府 歌山 屋川 林市 浜 米 澤 Ш 田

H

更に

理

由は

伏せてある余白

羽曳野市 太田 白 Ш H l扶美代 いみつこ 森子 ふみ 鈴 美

芦屋市 歌山 鳥取 歌山 塚市 取 Ш 武 西 池 H 石 Ш 黒 本 JII 田 地 谷 本 H JII 登美代 美惠子 寿美子 玉恵 和子 稚代 碧

1

ぼ

愛媛県 出雲市 大阪市 富山 浦 Ш 多賀子 杏花

箕面市 米子市 米子市 出 田 "

二人と ライ 守るも 内 1) IE. 野 待てど来ぬ蛍 躓 KK 向う 木 春 申しひらき出 脇腹をつつくと本音こぼ 響き合う五感でつなぐ手 小 クーラー 女が女見てい 眼 けせない 14 V 槿 灯 容な妻を演 い豆おだてに乗っ づくろい忘 ずに て た 白 コ を満たし 13 岸へうしろ姿を残 ル お 越えふるさとの > 刻 逆 ひとりこんなに違う 疃 1 0 10 事も許 かげ様ですミシン マネキンの 也 縁の子をダ が風に乗 父が還って来たよう 0 なくて気楽に生 の部 なろうと靴 役でハ 先 時 で動 ングラス 計 まっ 来ぬ誤 屋 てフッ じて n 即に生 上で風 してゆ てならぬ てる蛍 ŋ 27 ば 42 不 服買 命 ブら て艶 たが 0 スル 给给 解が歩き出 ٤ T 服 0 L しゃべ 遠 黙りこ 風 紐 保 動 2 L < 症 此を出 まだ 上きてい E せる 話 か 0 古 3 してし n 7 余命 をし 釈 Va 遠 れそう 3 7 夢 仲 WD 0 6 Vi n 花 な 女 間 1 1 80 しまう る 3 水 な 13

> 寝屋 西宮市 大阪市 大阪 大阪 浜 奥 本 田 久保睦子 中 田 島 美 2 か つ子 す

横浜市 尼 崎市 近 春 城 藤 年代 凡子 道

忘れ

ん坊

b

たし

が自分叱

ってる

羽曳 富田 和 田 野 林 市 市 市 宮 吉 藤 野 H Ш みつ江 満津子 寿美 泰子

大阪市

本

間

和高田市

鍛

原

千里

お

む

鳥 歌山 取市 本市 取市 rhi 木本 永田 植田 福 H 登美 朱夏 俊 一京

> 言 あ

か

大阪市 出雲市 歌山 II 板東 福 石倉 111 本 本 芙佐子 倫子 英子 畔

でい

東京都 取 山県 内 寿 恵子 早智

っては、

寝屋

III

市

4

松

か

す

定位 本 0 置 打 あ 球 で 0 男 ルよみ ち着 が パえる 3 ・父の 松

倉吉

松見

所もあっ

7

短

所

もあ

0

てでもわたし

くち 流 追 されて住 伸 なし 0 文字にチクリ 0 香 所 不定になっ 女心をもて余 ٤ 刺があ た石 1 3

物解 元気よとトー りよくて離せぬ ンを下げる 秋の 椅子 姑 0 事

ふり ナー 年 スに 0 向 早 it ーさ身に , ば長 も約束をするダ い荒野 しむむ 昨 を来たも 日 今日 1 工 0 " だ 1

ドラキュラになっ 7 1 7 1 の丸 か C n

> 和 東京都 交野 歌山 倉吉 田 尾 播本 福重 高杉 野口 中 Ш Ш 崎 日 充子 出 千步 美子 深雪 節 子

和 和 横浜市 歌山 歌山 歌 Ш 和田 杉山 長島 楠 見 美寿子 亜 希 章 精 子 子 子

った。そう言 を書いているのは七月の暑い盛りなので、一読して元気をもら と言ってさして句に優劣があるわけではない 持主であると言うだけで、 びを作り て頰がひとりでにゆるんでくる。さち子さんの句 葉数 着 向 りさん 噂話も含まれ、句が少し大きくなるからである。 厚着になると身動きがとれなくなるという共通点 位にいただいた。 暑を楽しまなければ、 命のきら がぴたりと的を得ている。千代さんの句―だんご鼻 が多くなり、 次頁の福田登美さんの「躓いた噂が…」と比べこち 行くとこ えばギラギラ照る太陽も、耳障りな蟬も見方によ 0 めきだろう。 句 T 言 考える 往々にして言わずもがなまで口に い訳をする時うしろめたさの 「色眼鏡」の 善意の人であると錯覚 と考えさせられた。 時には発想転換して目の位 方が解釈の 和 歌山 幅も広く 三千子さん 古久保 する。 ため ーこの評 だか 置を変 もあ して 和 子 L 6 0 L 0 n 0

台

風

降 風 選

乾

盆休み豆台風がやって来る 無責任と思う台風禍の土産 熱低よ君は未熟のままで良い いつ来るか分からぬ妻の台風だ

ミツ子

招かざる客に手古摺る防波堤

台風のように大荒れ十七歳 台風の目から赤鬼覗いてる 台風に公共事業また作り 台風がそれて祭の櫓組む

進歩する科学も台風潰せない

台風が一役買って値上げする 台風が去って群れ飛ぶ赤とんぼ 台風より恐いあなたは罪な人 気まぐれな台風やっぱり左巻き 台風の補償やきもき損保界 南から一つ目小僧左巻き わが家にも台風の目がひとつある

ただし

きみ子

よしえ 敬之介

台風の蛇行に見えて来るあせり 通り魔のように台風来ては去り 台風の目を瓦屋が待っている 台風とひとり相撲で待つ夜明け

(土) 睦 多賀子 富美子 緑 城

台風の目がそばにあり黙秘権 台風の目の真ん中で笑う鬼 賑やかな台風たちの夏休み

宏

だんじりの太鼓台風連れてくる

(種)輝 柱いっぽん台風に折られたり

妻の乱台風なみの高姿勢 台風の火種を持ってくる熟女 台風も心して吹け老農に 国際化台風の目は沖縄へ

台風に耐える健気な古瓦

台風にやられた傷にトタン貼 赤とんぼ台風一過知って群れ 五寸釘打ち台風に耐えた過去 台風も日本の秋が好きらしい

台風がそれて安堵の慈雨貰う 妥協せぬ意地は台風かも知れぬ 台風に気付いた猫が落ちつかぬ

薄化粧老人会へ今日は出る 老母さんに化粧をさせるダンス靴 良く観ると眉も黒子も描いている 化粧したペット片足上げている 老妻の化粧少しほめておく お化粧の仕上げ信号待ちでする

みつ江

男

巳酔

はるお 日枝子 約束はないが化粧はしておこう あの方の笑顔に似合う薄化粧 浴衣着ると少し化粧をしてみたい 入念な化粧素顔が好きという ひと休みパフそそくさと忙しい 占いに吉と出た日のコンパクト 百年を生きて化粧を欠かさない 酒よりも安いと妻の化粧品

> 随輝 たもつ

壶

千枝子

台風の目になる奴が隅にいる 台風が住宅ローン押し流す 風向きを変えてやって来る台風 豆台風虫籠ひとつ置いて去に

台風はそれたが取れぬ補強板 台風の進路に母がひとり住む

樋輝 あらた あずま

> 志 田

千代 選

しげお 美也子

鼻筋に白粉塗って祭りの子 化粧した俵を跨ぐ恵比寿さん さくらんぼ素顔のまんま里をでる 雨の日は雨の化粧が似合うひと 無人駅アジサイの花化粧する 雪化粧皆平等に白くなる 雪化粧融けて桜の城下町 化

粧



94

あずま

(松)輝

ちかし

山男のび放題の荒化粧

路

何故だろう化粧した亡母浮かばな

口紅だけで戦い抜いて来た私

弘

寬

ふる里の母に会えない厚化粧

それにしても厚化粧だな糖衣錠 靴履いて妻の化粧を待つ煙草 避難する荷へ忘れない化粧品 駅迄ももたない汗になる化粧 愛失くすたびに化粧がうまくなる 裁かれる朝も好みのルージュ引く 胡蝶蘭舞台化粧にむせている 心にもお化粧してネ女子高生 常識を塗り込めメイクできあがり 口紅を引かねばならぬ時がある も一人の自分を試す厚化粧 して六十歳を持ち直す

化粧ほどほど仲間と離れたくはな

男女平等明日はおとこも化粧する

霜

石

失礼がないよう化粧しておこう

大

輪

ゆとりの幅の化粧する 森下

0

お化粧が長くて靴が磨けない

読

化粧して切り札一枚ふところに

隙のない化粧相談持ってくる

すっぴんの秋田のひとに負けている

寝たきりへ

刷けの紅夢持たせ

to

石 原 淑 子 選

報告書社長すたこら斜め読み 墨象の世界読めない字と遊ぶ 読みかえし心あそばす歎異抄

高美代子

昭和史をそうだそうだと読んでいる

八月六日ピカドンの詩を読

千

扶美代

みつこ ロボットもタウンページを読 不況風明日が読めぬまま暮れる つれづれに般若心経一人読む

Œ

次の手は読めぬ相手は火星人

日枝子 ライバルに先手読まれていた不覚 約款のだいじな所読み落とす 良いニュース読みたいメガネ拭いている 公園で経済紙読むホームレス 六法をいつも読んでる怖い妻

唇を読んで重たい秘密知る 読んでても姑はその先既に読み 目の動きだけで相手の心理読む 飼い犬にすっかり心読まれてる

参謀の読みと違った票の数 タイトルで読む気にさせる週刊誌 演説を只うつむいて読む首相 一挙公報読めば未来はバラ色だ

> みつ江 31.

りつえ 太陽の心読んでる鬼瓦

あらた 木簡 の一字が読ます二千年

読みとれぬ非力を詫びる蟬しぐれ

読み人が戸惑っている国歌法

怒っても金は出す気と子に読まれ 読む程に哀しさ募る特攻記 知られては困るファックス他所にいき 立ち読みで時代をつかむ散歩道 英字新聞写真みているだけですか

幸

日枝子 ひかる 勝 圭一郎 瞳の奥の迷い女は見逃さず 手に豆を作り啄木読んでいる 胃カメラに心の動揺読みとられ 会話減りさっぱり読めぬ子の心 阪神の勝った日は読むスポーツ欄 酌ぎにくる魂胆を読む苦い酒 秒読みになると眉毛が動かな 十七歳軋む世相の記事を読む 読むほどに五体が燃える相聞歌

計正一愛み慕鉄

光雄風論ね情治夫

わたし読む鏡をどんぞこで拾う 節穴の向こうを読んでいるおろか 死角読むかごめかごめの輪の中で 清張を読み古傷も癒えそうだ 潮の目が読めずに男立ちつくす 妻 ちかし 雄

太

行間を読めばスルメの味がする 霜 石

彩 子

寺川

弘

95

お

題

吐法

▽調子乗りおだてられてはつい弾み

下五が遊離

○ひやひやの話が弾む散髪屋

ひやひやの話ととられかねない。 剃刀を使っている様子だろうが、

原句では この場合

のをでに。ひやひやはヒヤヒヤにすれば

ゆっくり型とせっかち型、散策型と直進型、 パスが異なるように作句の進歩も自ら異なる 寡作型と多作型いずれも一長一短であり、寡 前回少し述べましたが、 人生それぞれコン

○四季の歌弾む洗濯爽やかだ

紫

上五が遊離している。

単に枝巧の問題だが一

みるようにしていただきたいということ。 読んでいるとその進歩が如実に感じられる。 ではないが、毎回投句しておられる方の句を 因みに初歩教室においても、継続は力なり、 ただ私として助言できることは、 できる限

> ▽若いねと言われ弾んだ赤い服 ○若いねと言われ弾んで赤を買う 下五に具体性が欲しかった。

> > 栄

呼

○露地裏で弾んでる声夏祭り

小道具を用いると案外よいのでは

○調子乗り弾む気持が徒情け

晚

翠

▽夏祭り子供神輿が弾む声

郁

子

○内定と弾んだ声も小踊りか

様子が見える。同義といえる 小踊りとあれば内容から言って弾んでいる

○窓灯り足取弾む里帰り

▽内定と駆け込んでくるドアの音

てる代

上五と下五を入れ替えると、

▽里帰り足取り弾む窓灯

○勝ちましたそんな駒音弾んでる

禄

▽宿敵に勝つ駒音が弾んでる そんなが冗長。川柳は省略の文学です

○強がりを言った弾みに金を出し 静 子

言った弾みにが二句も。できれば表現 付けを変えた句を創ること

○しおれた心に恋歌うたい弾みつけ 步

○弾む胸電話の指が定まらぬ ▽恋歌で滅入る心に弾みつけ (伊)玲

子

冗長な表現のわりに、具体性に乏しい。

▽ダイヤルの指が弾んでいる辞令

Ŧi.

▽ふたりして荷入れも弾む新世帯 ○新世帯あなたと弾む兎小屋 事実であろうが、兎小屋はいただけない。

り、いかに川柳を愛するかの一言に尽きると 要は川柳に立ち向うその人の姿勢の問題であ 作型だからといって強ち悲観することはない。 言えましょう。

> ○欲望の弾む若さを持っている ▽洗濯が弾み出してる雨上がり

志

重

練り上げ不足の感

りの多読と、少しでも視野を拡げた作句を試

▽阿波踊り弾む故郷の輪の中で ○阿波踊り阿呆になって弾まされ 阿波踊りとしたのだから郷愁を詠めば

▽大口をたたいた弾みで見栄を張

上八を五七五の正調に整えると

〇パソコンを弾んで熟へ夏帽子 てにをはの添削。がとすることで擬人化 志津香

▽乗り越した話弾んだ終電車

○お隣りと話が弾み下車忘れ ▽欲望が弾む二人はまだ若い

四三郎

句に広がりがない。お隣りは不要

▽パソコンが弾んで塾へ夏帽子

○エージングなれど体操弾んでる 原句は突っ込み不足

春

江

サト子

▽社交ダンスヘルンルンのエージング

96

○白球が弾む真夏の甲子園 満子 一〇温めた毬弾み過ぎ戻らない 純子	みると	○ボーナス日口笛吹いて家を出る 深 雪	上五が固い。少し具体的にしてみると○恋順調弾む口笛吹いている 煩悩児	▽パスポート弾みがかかる旅支度中七が冗長	〇パスポートしっかり入れて弾んでる傷玲 子	▽かくしても靴が弾んでいる内示	よろこびの内容を詠むと	○よろこびを秘めても靴が弾んでる 千代	▽駅までの道のり弾むデートの日	を入れ替えてみるのも一つの方法	再三述べていることだが作句した時、前後	○デートの日駅までの道足弾む 章 司	▽魚市場の声が弾んでいる大漁	これはあたり前の情景を詠んでいるだけ	○弾みよくてきぱき処理の魚市場 宗 明	▽愛し合う二人三脚弾み出し	は異なるが	スパイスの効いた言葉を探すように。句意	〇弾みでもここまで来れた二人なら 周 作
老妻の弾んだ声は息子の電話 圭 二 修	▽カラオケの声弾んでるペアマイク 興奮の内容を具体化すれば	○興奮がピークに達し声弾む 敬之介	遠い気がする。句意は異なるが親を急かせるということでは、弾むにやや	○巣の燕五つの口が親急かせ 賢治	この二句のいいとこ選りをしてみると	○日に日にと悲しさあれば弾まない 美寿子	○この暑さ共に生活弾まない 美寿子	▽石はずむ起死回生のこの一手	○妙手あり起死回生に石はずむ 純	各人へは添削の上返送します。ご参考に	が多かった。それだけ着想が甘いと言える。	ス会)の句はこの外にも沢山あり、類想句	毬(ボールを含む)や合格・同窓会(クラ	○クラス会弾む話に時忘れ ト キ	○同窓会話が弾み二次会へ すすむ	○合格のしらせを弾む息でする よしこ	○合格と電話の声を弾ませて トシエ	〇合格を報す弾んだ娘の電話 政子	○さよならのボールが弾む左中間 つよし
次世紀へ弾みをつける老いの足私の句(時にはこんな日も、お見事)		話の輪弾ます嘘も少し混ぜ 喬子	五線譜をはみ出し歌う山開き	ふる里の駅から弾む靴の音 栄 翁	わたしより弾みすぎてる影法師 たえ	まだ少し弾むものあり手まり唄 美也子	婚約に見あきぬ夢の青写真	手がふれて息弾み出す月の下 恒 世	再会へ弾むこころのカレンダー 美弥子	爼の弾んで今日も妻元気 燗玲 マ	留守電へ嬉しい話弾まない ひさ乃	二人きりになるまで待った弾む声 勤	半世紀ぶりの会話に弾むもの 方子	隣より少し弾んだ寄付の額 敏マ	再会は想い出の場所靴弾む 和 可	さい銭が軽く弾んで落ちてゆく 智加恵	ほめられて弾みがかかる逆あがり 君 江	三回忌あなたの話弾みます 栄子	二人旅老いを忘れて弾む靴 彰 雄

私の 木 千 代

震えたものでした。 初めての体験なので私は背筋からぞくぞくと それはわずかな小さい空間でしたけれど、

もう帰れまい駅前の灯が濡れる

畳に紙が触れたとたん、最後の天という所に 柳壇のページ、そして森田茗人選とある次の おまけに短評まで添えてありました。 紛れもなくこの句が「八木千代」と記されて 左に移して一行ずつ「やっぱり、駄目か」と 行からおそるおそる眼の焦点を二ミリくらい 暮らしでしたから には自分だけの時間を持つことを考えもせぬ やっと許されたとはいえ、家事と介護以外 新聞紙を一枚ずつていねいに捲りようやく

これは得難い感触でした。 空間が、私の身に添って生まれて来たような ほんのちょっぴりながら、奇妙な不思議な 一歩手前で危うく神がおっとっとっと

嬉しかったですね。

の主婦だったのです。 恋愛らしいことも知らず、結婚、出産育児 試練に遇うのですが一一応は不満もなくて只 戦中戦後もくぐりぬけ―ずっと後には大きな 両親に守られながら親の言いなりに育って、

眠るまえにたとえ数分にしても、川柳さんと 忽然と登場したもう一人の私を見極めたくて 最初に感じたあの自由な風の新鮮な肌ざわり とってもタイムリーな出会いでした。 にもならず、明るく暮らせるのが有り難く こまず世間さまを騒かせることもなく、鬱病 だったというのが、家族をあまり波紋に巻き 大気の流れをも感じるようでした。 濃い会話を交わすようになったのです。 こんな惰性めいた生活に現われたのが川柳 雲が迎えに来てくれて、うまく飛び乗れて、 短詩の韻律と余韻がよほど合っていたのか、

一行にしても私の書き下ろし

月に二度くらい新聞を持ち寄って情報を交換 きゃらぼくグループを創ったのは情熱でした。 嬉しがり高揚した気分で、きゃらぼくはごく したりするのが愉しくて、文芸に関わる事を 手内職の共同作業という大義名分のもとに、 ありませんでしたから、レースの袋編みなど みんな若くてみんな忙しくて家計も余裕が 石垣花子さん佐伯越子さん林瑞枝さん達と

自然に誕生しました。

星たちの爆発です。きりりと発言をなさって きました。 三十九年のことでした。女性ばかりの小さな たが、同じような精神的な悩みを持っていた いた花子さんを中心に活動しはじめました。 のですねえ。川柳さんのおかげで一層結びつ 以前からの仲の良いグループではありまし 衣食ともにまだ戦後から抜けきれない昭和

神さま」と。多くの神さまの優しさに触れな 大事にしながら、川柳塔の誌友になりやがて 僅かずつ内部が膨らんで充実してくる実感を がら、川柳の芽も育ててもらいました。 逢えました。初対面のたび「この方はきっと 清水白柳先生はじめ、勿体ないほどの師とも 私個人にしましても一行書き終えるごとに

筈の私に、次なる苦悶が、発生したのです。 近付きになれたのなら、その時点で大満足の 思い込んで今に至っているわけです。 言い方ですが、孫弟子の一人には違いないと なりになった年の七月でしたから、身勝手な ところが、それからが悩みの日々。神々と 川柳塔の同人になるのは路郎先生のお亡く

わたくしの枕に三日月の匂い

夜が続きだします。全くどこまで我が儘なの なんとも大それた願いにまんじりともせぬ

姉の忘れ形見の姪達の世話と、きりきり舞い 母も主人も大事、二人の子はもっと大切、亡 らせます。月だけが相談相手でしたから。 と、叶う筈もない駄々をこねてお月さまを困 でしたのに、句会に出たい、大阪に行きたい か、もともと中途半端な私は、家も大事、老

月の子を産むかもしれぬ水たまり

思った川柳さんに嫌われてしまいます。 月の下では歪な醜い影を見せます。 ます。第一義であるべき家庭と両立しながら 躱したりしながら愚かな私を照らして下さい 介護を重荷と感じはじめて来た私の身勝手が ずんずんと好きになり急角度に傾いて家事や 真上に澄んで、ときには朧に雲を連れたり、 から覗かれて、零時ごろにはぴたりわが家の つつましく手を染めた川柳の初心を忘れて、 恥ずかしかったです。初恋かとも、仏とも お月さまはだいたい九時ごろ向かいの屋根

耳の底の細胞に棲んでいたらしい言葉の鞭が 姿が月に浮かんできたのでした。 諺ともつかぬ文句を口ずさんで教えてくれた 月を見上げていた祖母が解るはずもないのに 中から遠い昔の祖母の声がしたようでした。 不相応の願いをするから叶わないのです。 「無理しないこと、分を知ること」と月の 「満つれば欠ける」と幼い私をおんぶして

空想ですから建築費だけは要りません。

思い切って咲いて椿は裁かれる

絶対になさいません。 痛くて、久々の祖母の叱責でした。 川柳さんは困った者を見捨てられることは おかげでまたも救われました。

招待席です。バックミュージックは潮騒です。 苦し紛れながらの構築と飛躍しました。 机では窮屈になりました。イメージホールの ひろがりましたが、私の夢と想いは、小さな という文芸。イメージの空間での実現です。 でも、夢を見る能力が人間にはあったのです。 中に流れているようになりました。 あとは退くのみの潮の約束ごとがずっと私の 月という海というロケーションが心の中に その夢を短い時間で確認できるはばたける 時間が無くても外に出なくてもほんの一瞬 その頃から満ちては欠ける月と、満ち潮の 敷地は海の上、桟敷は海浜ですから、渚は 月は遙か海は死ぬまで満たされぬ

続演している理由は師に友に恵まれたから

舞台は現在も使用可能です。 したりしながらも「イメージホール椿野」の 何度も海中に投げ出されたり、不入りを気に 子想とは大きくはずれ、帆柱は傾き、何度も したりの他愛のなさ。笑っちゃいますよね。 から、その都度、有頂天になったりがっかり 振り返ると幼稚な句でしたが、精一杯でした 波に怯える弱小のホールですから揺れゆれで、 思いつきは良くても、舞台は海上に浮いて

四、五年は続けられるかな」など、たちまち になったりすると「まだまだ元気。これなら かけたり、たまさか喝采が多くてロングラン 覚束ないままに、今すぐに引退すると口走り とめています。気力も心許なく波を切る舵も 感じました。いいとこ五年くらいでしょうか。 です。真摯で愉しい語らいが土台でした。 なにしろ古びた小屋で、壁も骨組も限界を 真夏と真冬は余儀なく休館にして修理につ

ればーとりーは二つ

結局、思い切りが悪いのでしょう。

前言を翻すという始末です。

咲くこと落ちること

との違いも見て貰うつもりです。

植えましょう。一応は屋根も造ってサーカス

ホールのぐるりには、境界線として藪椿を

最初に交わした約束の一つでした。

川柳塔にもきちんと投句を始めたのも月と

投句という手立てもあったのです。今ごろ

細々と上演だけは続けるつもりです。 増やすことなく、小屋の手入れを大切にして こんな日を繰り返しながらレパートリーを

99

到着順

恵利子のこと

井 千 秀

桜

をあちこちしても別に文句は出ないのが幸い。 して居ればやがて開店、来客同様広い売り場 開店準備をする半時間位隅っこでおとなしく の幼児が紛れ込んでも目立つこともなくて、 欠勤するよりはと考えた末であった。 ることにした。職場は百貨店の地下食料品売 意を決し、子連れ出勤ならぬ孫連れ出勤をす 私は産守りの休暇も終わり、斯くなる上はと りの出産に娘は何かと戸迷いがちであった。 中二階の書籍売り場で童話や漫画に夢中の 店員の朝の出勤時は、雪崩込む状態で五歳 弟雅憲が生まれたのは恵利子五歳。四年振 一郭を任されていたので責任上、

> 持ち続けて居てくれると信じている私です。 頃の利口さ、そして人への思い遣りをずーと 度も私の側へ来て無理を言うことはなかった。 東京弁は忽ち評判になって来た。さあこうな 娘はお洒落、自分の子供の服装にも凝ってい しい。東京のど真ん中で暮らしていた娘夫婦 来てるの」ハキハキ答えて印象をよくしたら こへ来てるわね」「弟が生まれてお母さんた 三日と続くと店員が気になって来るものだ。 恵利子に私は胸を撫で下ろした。だがそれも てとうとう一週間続いた。その間恵利子は一 て身支度をして出勤の用意をする孫が愛しく まりお叱りは必然。 でも朝になると起きてき い。日に幾度か回って来る部長、次長の目に止 ると困るのは私、孫連れ出勤がばれるとやば いへんなの、それでおばあちゃんとお勤めに 「あんたのおうちは」「東京なの」「毎日こ その孫も去年11月嫁いで行きました。あの 髪型や履物まで。可愛い盛りの女の児の

孫 は十人

木 あきら

ていた処へ郵便が三通配達された。その中の 七月四日第二次森内閣成立のニュースを見

> とする。私は妻との間に男二人女三人計五人 月号に掲載するので送れとのことであった。 子供があるので都合十人の孫が存在する。 の子供があり、その子供がそれぞれ二人宛の 原稿を綴るに当り私の家族構成を述べること 一通が奥田編集長からで「孫自慢」の記事を九

と思い私はこれを歓迎していた。 で続けていた。情操を育てるため、 きで、ピアノ塾へ毎週通っていて高校卒業ま 中である。 の社会人、女の孫は女子大四年で県外に下宿 人で男孫は本年三月大学卒業後、家から通勤 している。茲で内孫について気の付いた処を 住しているので、私は次男夫婦と白鳥に同居 一、二取り上げることとする。内孫男女各 長男は勤め先が東京電力のために茨城に定 この孫達は幼稚園の頃から音楽好

えず、帰り着くとやれやれと安心して眠りに 着く。老婆心とは困ったものである。 では孫の夜勤等で帰りが遅れる時は心配が絶 るのかなと心配するほど野球に熱中した。 する。大学在学中、四年間勉強の時間が取れ 敗退した。今も社会人野球で時々県外遠征を として、憧れの甲子園へ出場したが一回戦で 男孫は野球好きで高校野球部員(但し補欠)

であろうか。家族の安泰を祈りつつ。が、これという佳句が生れてこないのは天性が、これという佳句が生れてこないのは天性がちいる事もなく、川柳の作句に励んでいる

孫は長寿の妙薬

山門幸夫

び、部屋は凡て満員となる。 もはや小五、そして上は中、高、大と五月雨 に手刀切って並ぶ始末。若しも米寿までお迎 玄関は大小カラフルな履物が出船に一杯並 故郷帰りして、総勢十九名に及ぶこともある。 東京、大阪、福岡住まいの子供達一家が揃って 予算の編成が忙しい。春夏や正月の休みには れば、爺婆は顔つき合せて進学祝の均等割り 学ともなるとだんだん重くなり、三月末とな ランドセル位で出費も軽かったが、高校、大 の進学が続いている。小学校までは誕生祝と れた嬉しい長寿の感謝の句である。その孫娘 番目の一番最後の次男の孫娘への入学祝が贈 る。「ランドセル九つまでも買えました」九 僕には息子二人と娘二人に合計九人の孫があ 仁部四郎さんに取り上げて頂いた句である。 一熨斗袋均等割りの進学期」塔誌七月号に 正月にはお年玉

まではねえ。

東京保谷の幼稚園児で「目のある花」を画東京保谷の幼稚園児で「目のある花」を画に展示されたり、大阪府豊中市の第十三中学校一年生で、市主催の「健康づくり標語」に応募して「運動は心と体のリフレッシュ」に応募して「運動は心と体のリフレッシュ」に応募して「運動は心と体のリフレッシュ」の作品が最優秀賞に選ばれて、写真入りで新問や市報に掲載されて、爺婆に早速報告があり、その都度ご褒美も大変である。ヘアーカり、その都度ご褒美も大変である。ヘアーカり、その都度ご褒美も大変である。ヘアーカり、その都度ご褒美も大変である。ヘアーカり、その都度ご褒美も大変である。ヘアーカリ、その都度ご褒美と手を繋ぎれて、爺婆に見かる花」を画はいて、おけいない。

孫歷二年半

菱田満秋

判断の本などで研究して五つほど候補の名を百花(モモカ)という名前も、息子が姓名ほどの初心者である。たった一人の私の孫歴はまだ二年半である。たった一人の私の孫歴はまだ二年半である。たった一人の私の孫歴はまだ二年半である。

えがなかったら、そろそろ結婚する孫も出て

て画数が最も良いという事だった。したが、息子にはそのような殊勝な気はなくしたが、息子にはそのような殊勝な気はなく書いてきた一番目にあって、私の父が百助で書いてきた一番目にあって、私の父が百助で

生まれたときは3400もあって大きな子性まれたときは3400もあって大きな子門だ。嫁というのが三人姉妹の末っ子なのに見だ。嫁というのが三人姉妹の末っ子なのに見だ。嫁というのが三人姉妹のまっと小柄なろうとお正月に、また父の日にプレゼントをろうとお正月に、また父の日にプレゼントをのつもりなのだろう。そのような訳で今までのつもりなのだろう。そのような訳で今までに百花に会ったのは十回もないと思う。に百花に会ったのは十回もないと言う先生が多いし私もそんなことを言っていた。しかし、可様ではない。没にしようとしても抜かざるを得ないない。没にしようとしても抜かざるを得ないない。没にしようとしても抜かざるを得ない。

一様ではそのをはまたなりと言うが生た。 いし私もそんなことを言っていた。しかし、 百花を想うときそのような事は言っておられ ない。没にしようとしても抜かざるを得ない ない。没にしようとしても抜かざるを得ない ない。没にしようとしても抜かざるを得ない ない。没にしようとしても抜かざるを得ない ない。没にしようとしても抜かざるを得ない ない。没にしようとしても抜かざるを得ない ない。没にしようとしても抜かざるを得ない でうと小さな手を差し出してくれる。そのよ うな仕草には弱くて可愛い服を見かけたりし うな仕草には弱くて可愛い服を見かけたりし うな仕草には弱くて可愛い服を見かけたりし たら買ってやりたい衝動を抑えきれない。私 もやはり普通一般のおじいさんでしかないん だなあと思う昨今である。

まで頑張るつもりでいる。 等と言ったが、実は百花に振袖を買ってやる 等と言ったが、実は百花に振袖を買ってやる

イタリアの旅

二〇〇〇年七月二日~十日

時差ぼけのままで

安 藤 寿美子

が、精一杯だった。て歩き、おくれないようにバスに乗り込むのて歩き、おくれないようにバスに乗り込むの減った石敷きを転ばないように足元ばかり見

のてっぺんには、流石ローマカトリックの国イタリアの土地はなだらかな起伏が多く丘

そ本物の青空やと感心するのみであった。

関西に住みふりた私達は、日本と同じで暑い

ロキョロしたが見える筈がない。日本列島のルトも越えたブレンナー峠はどこやろとキョの憧れの的だったらしい。ゲーテもモーツア

で、教会の尖塔や古い城壁があり、それを民で、教会の尖塔や古い城壁があり、それを民で、大和国だとか、山の中腹までバスで上がり、共和国だとか、山の中腹までバスで上がり、共和国だとか、山の中腹まで、転ばないよう後は坂道と階段が天辺までで、転ばないように杖を頼りに歩いた。

2名の最高責任者と60名の評議員がいて、 の疲れを癒す楽しい見物であった。二○○○ の疲れを癒す楽しい見物であった。二○○○ があり、旅 であった。二○○○ であった。二○○○ であった。二○○○

れたサンビターレ教会を見学。ここのモザイクは色の大理石を使って居るそうで床のよくりは色の大理石を使って居るそうで床のよくかかすかに浮かび上がっているようだった。 それからいよいよべニス。宮殿や聖堂よりがかすかに浮かび上がっているようだった。 それからいよいよべニス。宮殿や聖堂よりがかすかに浮かび上がったが、途中いくつものがを身り降りする形であった。やっとゴンドラに乗り込み、モーツアルトの滞在した家やマルコポーロの住んだ家を教えてもらい、やマルコポーロの住んだ家を教えてもらい、やマルコポーロの住んだ家を教えてもらい、といいまでも、この石造建築の街の時間のながれは五○○年くらい昨日のように思えるのだと感心した。

・様でイち にの旅 う 、 の 中が良

ラベンナにて 美子・泰子・楓楽・芳子・正坊・美穂

歌った。

温暖なこの国はドイツやオーストリアの人々

さあこれからはロンバルジア平原である。

— 102 −

の声に従って歩いた。の声に従って歩いた。

をうええと言うほどのゴシック様式の粋を仰もうええと言うほどのゴシック様式の粋を仰いだ。歴史のある十字路のアーケードを通ってスカラ座博物館を見学。飾ってあったトウランドットの衣装が印象的だった。コモ湖は世界の有名人の別荘を見て、船着き場のカフ世界の有名人の別荘を見で、船着き場のカフ世界の有名人の別荘を見で、船着き場のカフ世界の有名人の別荘を見で、船着き場のカフーを通っている。

「ナポリを見て死ね」

藤田泰子

ではこう言葉に違う。 をで関空へ、通算二十三時間かかってナポリ に辿り着いた。

時代の中世を思わせた。カリブの海はコバル車が走っていただろう。この風景は古き良き古い石積みの城壁があり、石畳の道も昔は馬士ポリはその言葉に違わず素敵な街だった。

アに来た甲斐があったと思った。で、幻想的だった。洞穴を見ただけでイタリ乱反射してトルコ石のような色に輝き神秘的トブルーで「青の洞穴」の中は太陽の光りが

でズビオ火山の灰に一瞬にして埋もれたポンペイの二千年前の古代に遊び、アッシジへ、フランチェスカ教会への参道は、天王寺さんでながら善男善女の列が続き、両側には土産さながら善男善女の列が続き、両側には土産さんに逸れないように歩くのが精いっぱいでさんに逸れないように歩くのが精いっぱいで

フランチェスカ教会その他たくさんの教会を訪れたが、どの教会も無神論の私でさえそを訪れたが、どの教会も無神論の私でさえその荘厳さに祈り懺悔をしたくなるような心境にさせられた。このような教会が家の近くにあれば、半日ほどこの木の椅子に座ってボーあれば、半日ほどこの木の椅子に座ってボーあれば、半日ほどこの木の椅子に座ってボーからい丘の上には十字架が光っていた。

移動中の車窓から見える一面のひまわりやをうもろこし畠、牧草地に人っ子ひとり見えないのが不思議だった。私たちがナポリからミラノまで乗ったバス私たちがナポリからミラノまで乗ったバス私たちがナポリからミラノまで乗ったバスが、午後になると機嫌が悪くなり可愛い添がが、午後になると機嫌が悪くなり可愛い添がが、午後になると機嫌が悪くなり可愛い添かが、午後になると機嫌が悪くなり可愛い添かが、午後になると機嫌が悪くなり可愛い添かが、午後になると機嫌が悪くなり可愛い添かが、午後になると機嫌が悪くなり可愛い添かが、

る、これもいい思い出になる事だろう。妊娠八カ月のような風体で写真に納まってい

みんなショルダーバッグの上から上着を着て、

にもやさしかった。
かいていたイメージとは違いその男性も、ゴ挽いていたイメージとは違いその男性も、ゴ乗員さんを泣かせていた。イタリアの男性に

不味かった。

不味かった。

不味かった。

不味かった。

不味かった。

不味かった。

不味かった。

「帰ったらキツネウドンをたべよう!」「帰ったらキツネウドンをたべよう!」 一〇〇〇リラ。物価は日本より安価だったが 一〇〇〇リラ。物価は日本より安価だったが 一〇〇〇という単位が日本円の千円に繋がり ついけちん坊になってしまう。一〇〇〇リラ にも、ホテルにも慣れ、熟睡できるようになったがちっ帰国の日が来ていた。機上からスイスアルプスの山並みを見下ろしながらハードスケジュールだったが来て良かったと思った。 「イタリアはジプシーがいていたる所で貴 重品を狙っているから気を付けてください」 を、添乗員さんが口を酸っぱくして言うので、 と、添乗員さんが口を酸っぱくして言うので、

本社 八月句会

八月七日(月)午後五時半

アウィーナ大阪

休耕田ひまわり咲いて村の顔

義子

つづや

かすみ

ひまわりの一輪笑う見舞状

堂々と過疎のひまわり胸を張る真っ直ぐに育つ子供も向日葵も

ひまわりに怒る顔など見せられぬひまわりの強さ明るさそれが母ひまわりの何処を切ってもゴッホの黄

柳右子

表現にも通じると結ぶ。
また表現法に東洋的と西洋的の違いがあるが存っている。私という主語抜きで私が存をさしさを持つ。私という主語抜きで私が存ま洋、特に日本語の表現は、奥行があり、内に西洋的表現は単一的であり、直接的であるがある。

(受付―寿美子・冬葉)(清記―義)(司会―遠野)』(記名―月子・朝子)月間賞は藤井寺市の鴨谷瑠美子さんに輝く。

負けるもんか孫ひまわりと背比べ

 ひまわりも一輪添えて墓参り
 変論

 ひまわりが一人明るい部屋となるかりんまわりが一人明るい部屋となるかりんまわりが一人明るい部屋となるかりんまわりが一人明るい部屋となるかりんおひる寝の時間ひまわり首をたれおひる寝の時間ひまわり首をたれおひる寝の時間ひまわり首をたれおひる寝の時間ひまわり首をたれまりません。
 月子

ひまわりの罠には誰も気付かない セツ子ひまわりを揺らす風あり思慕ひとつ たず子ひまわりを揺らす風あり思慕ひとつ たず子ひまわりを揺らす風あり思慕ひとつ たず子ひまわりの天衣無縫にかなわない 靖 日ひまわりの天衣無縫にかなわない 靖 日ひまわりの天衣無縫にかなわない 靖 日かまわりを揺らす風あり思慕ひとつ たず子ひまわりを揺らす風あり思慕ひとつ たず子ひまわりを揺らす風あり思慕ひとつ たず子ひまわりの罠には誰も気付かない セツ子ひまわりの関には誰も気付かない セッ子

向日葵の愛想に少しだけ不満り熱にシャキッとひまわり自己主張り熱にシャキッとひまわり自己主張ひまわりがうなだれていた終戦日ひまわりがうなだれていた終戦日

弘

長浜澄子

選

天 歳ですね向日葵はもう日を追わぬ 萬

ひまわりのおごりか風になびかない 鹿 太

軸

弘

兼題「チャンス」 津守柳伸ノーモアヒロシマ向日葵は忘れない

的

とぶチャンス女に空が高過ぎる 選をするチャンス選者がためされる 起き上がるチャンスをくれたのは女神 見る人が見れば溢れているチャンス 毎日の汗がチャンスを実らせる 汗流す男でチャンス気にしない 何回もチャンスはあった結果論 俺のこけるのを誰かが待っている 作ってくれたチャンスがん張ってみよう 今チャンス胸のふるえが止まらない 拗ね者でチャンスの鐘を聞きもらす チャンス逃して今年もわたし夏太り もついちどチャンスをあげる口説いてみ チャンス来ることを信じて汗を積む 自動ドアみたいにチャンス開かない チャンスつかむ少年の掌は無限大 幾たびのチャンスのがした無位無冠 チャンスだと乗った木馬が動かない チャンスとは気付かずチャンス摑んでる ゆっくりとチャンス待てない余命表 勘鈍い男チャンスをまた逃がす チャンスにも亀には亀のマイペース 心せよチャンスのあとに来るピンチ わたくしをお誘いなさるならマンデー 今がチャンス女心が揺れてるよ でんでん虫この機逃さぬ俄雨 あの時がチャンスだったと今思う 秀才でないからチャンス待っている 美代子 希久子 つづや かりん 篤 子 武庫坊 あやめ いわゑ 昭 笛重 弘 柳右子 はじめ 泰 天章英 修 洋 歩 子 太笑久子 世話かけず死ねるのならば地獄でも アクセルの快感地獄へ突っ走る 地獄まででも一諸と言うたのは昔 地獄とも思わず子らの塾通 地獄から団体で来た阿波踊り 地獄絵を見た鎮魂のキノコ雲 都合よいことだけを聞く姑の耳 地獄から帰って来たと胸を張り 就職地獄東奔西走新幹線 地獄への抜け道だけは開けてある ヒロシマの地獄はとわに伝えねば 今地獄小さな光がみえている ランドセル背負い地獄の門くぐる ひと呼吸置けばチャンスはきっと来る 人間の驕りへ見せる地獄絵図 波乗りが下手でチャンスをまた逃す 一度とないチャンスつかんだパスポート 身上の都合で地獄行きになり

チャンス到来ちょっと愉快な午後である 立ち上がるチャンスだ父の笛太鼓 大声で笑えるチャンス待っている 扶美代

諷云児

欲に目がくらんでからの蟻地獄

睦

地獄絵図見せてやりたい十七歳

鬼の目にも此の頃くるって来た地獄 地獄へ堕ちる切符が掌から離れない

笛

生

あの男とはきっと地獄で会うだろう

千 寿

子子里子的子

諷云児

米寿まだひそかに保つ地獄耳 獣から見れば人間地獄行き 戦争の地獄を忘れたことがない

ブランド志向カード地獄を見ぬように

正ますみ

あやめ

隆

盛

地獄見た男に恐いものはない 倒産をもう知っていた地獄耳

風吹けば風を味方にするチャンス

尻馬に乗ってチャンスにめぐり逢う

江

度 選

ドミノ倒し不況の底の蟻地獄

語り部が語る被爆の生き地獄 極楽を信じて耐える生き地獄

美弘来月

この世にも地獄はたんとございます

寿

寿美子 武

願望の一

つにからみつく地獄

地獄から這い出た男芯がある 地獄の底へ堕ちる覚悟の恋をする

地獄から帰るとビール冷えていた

澄かすみ 子

地獄耳自分の噂だけ知らず ユーモアのわかる閻魔もいるだろう 幸せな人地獄の話などしない 天国か地獄か列車は西を向く どん底の地獄へ清く耐えた母

つづや

たず子

美代子

もしかしたら通り過ぎていた地獄

あみだくじいくたび辿っても地獄

扶美代

弘倫

地獄だと言いつつ何かたのしそう 天 10 わる

地獄行きもうきまってる十七歳

中原 比呂志

冬

新聞を読みながら腹立てている 見出しだけ読んで飛び出す宮仕え 新聞で名前を見たと来る便り 新聞で総理の顔は見ぬことに ホームレス昨日の新聞読んでいる 古新聞子供会から感謝状 新聞から拾う知識で話の輪

社説よむ姑に一目おいている 国会がどうと気にせぬスポーツ紙 階段を朝刊一気に駆け上がる 古新聞君もリストラされたのか 図書館で新聞五紙を読む日課

新聞休刊さみしい朝をかみしめる

バスの中隣が覗くスポーツ紙

サー

薄っぺらな新聞紙だが芯がある 美しいゆとりを探す家庭欄 新聞の切り抜き母のなんでも帳 新聞社頑固な父の職場です 輪転機の音が止まって朝がくる 新聞に載って悪事がまねられる 新聞の記事に削った跡がある 方紙に単身赴任いやされる

柳も載せて職場のカベ新聞

社説から三面記事へ飛び移る 眠れぬ日朝刊の音待っている 新聞の特ダネやらせの匂い **新聞の四コマ漫画から朝に** する

虹を背に夕刊届く雨上がり 新聞を支えどこかの森が消え 新聞に載らぬ噂が面白い ビスに負けて新聞また替り

太

思い出し笑いをしつつ書く便り

心間のひとりやふたり殺すペン

かすみ 寿美子

自分史を書く重いペン軽いペン 動揺が随所に残る滲む文字 嘘八百書いて借金申し込む 暑中お見舞い無理はするなと書いてある

昭 利

子昭

新聞を見る気にさせた七分粥 寝たきりが一番知ってる世の動き 新聞にくるんだ真心をもらう 面に平和を誓う原爆忌

武庫坊

郎

新聞に十七歳とある憂い 昭和後期の新聞に会う畳替え

新聞を逆さに見てる詰将棋

たもつ

中立というて新聞傍観論

希久子 美代子

兼題 ۷ 田 中 正 坊

選 子

絵手紙にしてから楽に書くハガキ

白紙とは誰も思わぬ遺言書 歳月も消して他人となる署名

もう逢わぬ人へやさしい事を書く

充

書く暇はないと言いつつ長電話 書き馴れた母の手紙にある乱れ 新聞が近づいてきたスリだろう

みちしるべの如く明るい記事探す 新聞は美談すっかり飢えている たず子風笑

鍵っ子に母とを繋ぐ愛のメモ

自分史に筆を曲げてる妻の章

保ますみ

風

埋め草を書くためのメモ溜めている 横文字もすらすらと書くホームレス 禁煙と書いて三月で逝った父 さりげなく書いた本心汲んだ母

雅洞寿 つづや 隆勇 + 子的 太文庵

月日すぎて素直に書ける胸の内

ながながと書いて追伸だけの

溜飲の下がる社説に拍手する 英字紙をアクセサリーに持つ才女

吐寿 子来 美野

幸福を祈ると書いて消えた恋 監督の揮毫はいつも和の一字 きれいな字で綺麗な嘘が書いてある

はじ

干 秀

美代子

窓ぎわの達筆アテにされている

病状を書かぬ手紙に増す不安

新聞が書くと総理の値が下がる 簡単なことしか書けぬシャープペン オーバーに書くから売れる私小説

無口だがさらさらと書く筆達者 しげお

良いとこへ来たなと筆を持たされる はじめ 風

ますみ つづや

-106 -

諷云児

孫たちを迎えるポケモンの浴衣 ご先祖を迎えこの世のおもてなし 新盆の迎え火を焚く家静か 弟と決めて待ってる呱呱の声 書き足して十年日記買う命 書き溜めて過去をゆるりと眠らせる 上申書胸に決意を秘めている 書くことで胸のモヤモヤはらしてる 箸紙に待ってると書き先に出る 立秋を迎えて何も変りなし 立秋を迎えて何でこう暑い 満月光あなた迎える香を焚く 天国の妻へ心に書く手紙 スクープへ削りつづけているいのち 離婚届あっさり書けるのは女 大正の男だまって辞表書く まだ嫁には負けんと顔に書いてある 達筆でないが書くこと好きな筆 真実を書けば鉛筆すぐ折れる なぐり書きのメモに本音がみえる妻 火の中をくぐって書いた一行詩 **八間よりペットが先にお出迎え** 衆題 迎える 高 風 P 武庫坊 たず子 希久子 柳 倫 選 + 治 伸 来る人が来て始まるクラス会 出迎えがみんな荷物をとりあげる お迎えは白手袋の運転手 迎える人すっかり忘れ飲んでい お迎えの一人がそっと目をそらす お女将まで着替えたらしいお出迎え 金婚夫婦箸を揃えて迎えてる 迎撃ミサイル妻も開発したらしい 迎え火を焚くこともない大都会 七歳の亡姉を迎える酸漿よ いつか転機を迎えるだろう子の また一つ悔いを残した迎え酒 お迎えが来る迄毎日飲んでやる 誕生日迎える度に無に還る 迎え火を焚くぎんさんの細い肩 ふるさとの山に木霊で迎えられ 受付のスマイル ビルを華にする ピンポンと鳴るとやさしく迎えます お帰りと言う人のなく夕焼ける 歓迎を強い握手で感じとり 昔話に傘が迎えに来たことも 人民服最高の礼出迎える 奥深い老いをゆっくり迎えたい 金婚を迎えてペアの指輪買う **遠暦を迎え時間が走り出し** 笑顔で迎え笑顔で帰す長っ尻 おじいさんが迎えに来ないおばあさん **今** うわさしてたと笑顔で迎えられ 弘 典 たもつ 柳宏子 いわる つづや 希久子 靖利 いわる たず子 千 度 修 月 昭代 野 子 子 鳩時計迎える送る同じ声 誕生日ひとり迎えたことがない 声 出迎えた腕に西瓜を渡される 胸像で社員迎える創業者 出句料 ۲ だけが迎えてくれる家である 連絡先〒590-0944 堺市櫛屋町東一丁 席題なし・各題2句・締切午後2時 ところ おはなし 第14 1000円 省く ワープロ 影宝 堺市立栂文化会館3階 9月10日(日)午後1時開場 しぶちん 「川柳よもやま話」 2梶川雄次郎方 泉北高速鉄道とが美木多駅3分 電話0722-9-0015 3 堺市文化団体連絡協議会 堺市民芸術祭川柳大会 L (作品集·参加賞呈 渡部 河内 田中 重谷 板野 中田たつお選 堺川柳協会 河内天笑 鴨谷瑠美子 美子選 月子選 桂香選 峰彩選 和子選 美代子 哲 IE

坊

夫



毎月25日締切・ 30句以内厳守

編集部

慎浜あおば川柳会(前月分) 菱田 満秋報

恙なく年中無休母の愛

た年に脈拍乱れだす

風紋の見事さに浜歩けない 情報の渦に巻かれて五感麻

青畳大の字になる帰国の子 気が付けば足許にいた青い鳥 少年を叱る言葉を選っている お隣に座った縁が続いてる 横丁と一緒に消えた子の遊び 横丁の隠居を目指し今日も生き 身に着けた若葉マークが外せない しその葉に巻かれた梅が熱くなり 人恋しおんなハーブに凝っている 入社式青い背広が息を詰め

> 来年も花に会おうと竹を踏む 青年の樹になりきれず吠えてい 五大陸まだ踏破せぬパスポート 五感研ぐ朝の冷気を独り占 軽い飢え女は年を化粧する 美しい方の横顔ばかり見せ 横並び目刺しは皿に乗ってまで 忘却を知らずに悩む青い辞書

五分という予想はすでに敗けている 濡れ落葉妻の介護で見直され る

東大阪川柳同好会 森下

遊び心で飛ばした輪ゴム的を射る

文

消印が証拠になって疑惑はれ 消印のないラブレター引出しに 消印が決め手となった逮捕劇 並び数字消印求め自分宛 消印をしっかり捺したが嫁は逃げ ぐずぐずと言い訳だけをする総理

平行線を丸い輪にする話し合い 美しい花だが毒がありそうだ 生きつらい輪の中星が重すぎる 輪の中のひとりがいつも雨降らす

ただお

3

良

新緑の山を洗って雨上がる モナリザの涙はきっと美しい 火遊びをする整った目鼻立ち 寄り添えば初老に入り日美しい 人情をつつむ訛りの美しい

八重子 かず枝勝 あらた

風

凡人で気楽に空気吸うている 数合わせぴったり合わぬ宝くじ 皆勤賞だけで凡人何もない 妻だけが凡人をまだ見捨てない

猪太郎

あの人を避けて余生を生きている

路

盛昭 辰

郎

城

諫言を避ける与党がだらしない 妻の愚痴聞いてる素振りしてるだけ 外出を避けてごろ寝の連休日

大阪がよかった頃の橋の数 刃こぼれの数だけ冴える父の太刀 未知数の数字で招く新世紀

風的

傘で顔隠して避ける梅雨最中

スコミへ居留守をつかう社長室

残置灯の横に立ち飲み屋見付け 即答を避けてひとまず身を守る

白光子 すみえ

浜っ子と言われ嬉しい住み心地

横文字で書いて漢字でルビを振り

為佐子

鈴

五官みなといて童話の里にいる 五分五分で賭けた脱サラ夢となる 浜風の気まぐれホームランにする

道

あかり 句多留 裕 徳

可

亜希子 峰

ぐずぐずとしてたら解けた春の

緑

お見合いの話ぐずぐずする娘

愛論報

千太 たもつ 柳宏子 雅 定 里 郎 文 男 なつかしい仁丹広告ある田舎 読み終えてPRの字につき当り 広告費それは消費者から貰う 大阪弁だと美味そうなコマーシャル 謝罪する広告文字は小さめに 買わないがよく見る水着コマーシャル 不始末を広告変りする謝罪 絵ハガキの消印温い旅便り

美弥子 朝

すかたんの夫婦で数に弱いです

爱

岸和田川柳会 長谷川呂万報

それごらんぐずぐずしてるからと母 屋久杉のいのちの音へ耳を当て

的

ダン吉 司

みつ江 さよ子 東 信 武 吉

-108

よく言えばおっとり早よ言ゃぐずでんね 柳宏子

雄々

蛍祭りぱっと盛り上げ 過疎の村 恋しさに今宵も点滅蛍の灯 母の背で幼い頃の蛍狩り 夢を追う二人は何時も蛍です 蛍とぶ源氏平家の舞をする 詩心湧いてくるよに蛍飛 公美枝 鈴 江女

清流へ戻れば蛍すむだろう 愛の絵の中にも蛍二三元

自然保護蛍の里もできました

蛍とぶ二 三匹でも安堵する

川柳塔おっぱこ吟社 木村あきら報

手話の子の笑顔に輝く明日がある 土壇場で味方に足を掬われる 九回の裏でも女髪を染め 朝咲いた花に試練の雨嵐

かおり

あきら

ひかり

あれこれと悩み続けて寝付かれず 点滴に自由の重さかみしめる 身の丈に合った巣造りする野鳥 この儘でいいから母さん生きていて ライバルにやっぱりあった似た弱. ひと先ずは鬼と手を組む四面楚歌 カラオケで浮かれストレス飛んでゆく 悩んでも老いが独りで城護る 寿々女 坊太郎 八重子 マツエ よしみ まさる

当てに無い招きに悩む熨斗袋 悩み事胸に収めて寺詣り

仙

主のいない家にも紫陽花の律義 主のいない庭に今年もバラが咲く 妻の手に主権盗られてゆるむタガ

ちっぽけな悩みを抱いて不眠症 原爆病に悩める人の声あわれ 釣り馬鹿のパパを家来に孫帰宅 ふる里の便りに亡母の声がする

心血を注ぎ会社の鬼となる

今日一日満足でした花見バス

美和子

大原川柳社

金魚売りの涼しい声も遠い思慕 ある打算男が酒を注ぎ回る

智恵子

弘

風除けの主人が痩せてくる不安 金魚売りのどかな時代なつかし めしふろ寝る満足でしょう高鼾

忠実な犬で夫をこき使う 金魚掬い昔の紙が正直で 主婦らしくなった娘をほめてやる 満足をしてます君のてのひらで

また飲んでいるのか主遅い夜 風向きが変わり視線が注がれる たっぷりと愛を注いでいる乳房 縄張りがここにもあった金魚鉢 **過告知さすが主治医も重い口** 今何を言ってもあかん酒を注ぐ 金魚からのんびりせなと声がする

柳弘報

注ぐ愛見返りなどは要りません 満足な五体心の深い闇 絹 國 子 治 あやめ 真理子 雄

とし子 むつみ 美代子 支え棒見えないように後を押す 水見する稲と話をしてかえる

干孝步子

治貞

くに子 延

いさむ 満ちたりた笑いはじける豆ごはん

秋道 夫雄子

季世恵 主婦業ができぬ女にある魅力 床柱艶に主の自負がある 次の世も夫婦でいたいフルムー

心血を注ぐ刃に入れる焼き 東大寺主人のような仁王様

本の釘を効かせている主張

真生夫

矢内寿恵子報

はるみ あすなろ

散歩道一面青き様変り 再会へ句袋をしのばせる

口下手が一言が過ぎ頭下げ

今朝も又元気をもらう青田風

ひでの

佳句地十選 (8月号から

人間という折り紙に苦労する 二階から朝の活気が駆け降りる お茶点てる心の棘を抜くように 杏

もう一度もどって店の前に立つ 兄の顔ダンゴ鼻までいばってる 書くことに疲れこけしの頬つつく 遺言書にもの申すほど財もなし ブランドの靴にかまれた足の豆 きみえ

みつ子

タイトルを握った鼻は折れ易い

長寿万歳なんて煽てにのるもの

振り向けば兄弟同じ道だった 風邪の一撃案外もろい歳を知る 古傷の相手にひょっこり鉢合せ あの日ふと知らぬ振りする思いやり 生と死に潮どきあると人の言 夜の田に蛙呼び合う声しきり 理想とは程遠いが生きている 新茶供え仏の笑みをしばし見る それぞれに薬飲んでるクラス会 ハビリの プール水着の花が咲

L

ず

すがる瞳に病室を出る潮がない ちょっぴりと心が痛む手ぬき食 恵まれた形でパンが焼けている 火と水の中で女の業の数

あやこ

玉 辰

さちこ

新築の槌音山にこだまして めぐる忌の殊更沁みて雨季に入る 川柳塔まつえ吟社 恒松

> 寿恵子 みづえ

玉の汗湖の夕陽が慰める わが影に自問自答の汗を拭 草刈りの汗を野バラが慰める 汗拭いてふいて見上げるひこう雲

音楽に合わせて雨が降っている 青春の楽譜は里の山にある 音楽が流れ全細胞が沸く 音楽は天才という不精髭 解らないくせに音楽癒してる 廃田に先祖の汗が哭いている いい汗を流して明日の夢を見る

与根一

茂

たけし

突堤で日本海を釣っている 強いねと言われ涙を抱いて生く 青い空黒一点の胸の傷

石花菜

蛙

枝

みさえ 座るたび鏡はやさしさを探す 座ったり立ったり忙しい人だ 丸い石座り続けて不整脈 座っても立っても涙まだこぼ 肩書きも上下もない輪に座る 囀りも山の音楽五重奏 n

恍惚の母が鋏を手離さぬ 軽快なリズムで鋏研いでいる 鋏では切れないものがある思い 波風をたてぬ女の座りだこ

> 閉めて下さい一色を見せましょう 針程の誤報が一人歩きする

和歌子

発表がすんだ後から良い意見 ポケットに薬が無いと落ちつかない 貸し借りが無くて気楽な肩パッド 両腕の調整忘れぬヤジロベエ ふる里に思いをはせる城がある

V

枝夫子

芽由

司

(前)

喜美子 こふゆ

悦

子

果てしない夢を描いている机 必読の本が机上に積んである 若かりし頃から鋏磨く癖 枝振りの松が鋏に喋る庭 枚が切れぬ迷いの花鋏

きっかけは机並べた出合いから 十七歳の心理机の知らぬこと 恋人の名前見つけた古机 合併で社長の机二つ減り

叮紅報

きみえ

代

良

神の国言葉発して青くなる シャガールの青逆立ちの視野にある 白い花青いみかんの粒になる 青嵐羽根を伸ばせとラッパ吹く 頭撫でたら青大将が怒ったよ 石上

明かつみ

蟹

郎

博 早貢 畔

きみ子 苗 節代

僕の布団ダニがいっぱい僕もダニ

主詩朗 すみこ 紫 桂 泡

知恵子 煩悩児 多賀子 注 静

叮

悦子報

介護する手順に慣れたティータイム

省エネヘバケツに入れた日向水 子守唄になったゆるんだ椅子の脚

文鳥の慣れは確かな愛だろう 慣れ過ぎて彼女の良さがわからない 幸せに慣れて不足が口に出る 慣れ過ぎた心の隙の医療ミス 闇夜でも通い慣れたる田舎道 慣れたとて俺の代理はまだ無理だ 慣れ過ぎて礼が欠けてはいませんか (最)和 (米) 勝 美恵子 真 京 枝 砂

別れの日バケツひっくり返す雨 兵隊ごっこバケツ被ってトテチテター 十リットル入るバケツのひとりごと 満月をバケツ一杯すくい取り

田辺 太報

尼崎尾浜川柳会

生き方が違えば顔もそれなりに 宇宙まで行けば私も泳げるぞ 躓いた振りして話の輪から抜け 織姫と泳いでみたい天の川 繁華街水着のような娘が泳ぐ

輪多朗 忠 よしえ

良

亀与子 鹿 ま 3

睦

宣

園児から大臣までもあるいじめ 追伸の文字は慌てているらしい 七転び八起きへかけた虹の橋 月の暈内緒ばなしを聞いている 御利益を信じる肌に美人の湯 夏帽子胸の真珠が海を恋う 鬼も蛇もほとけにかえる花の寺 少子化にペットみたいに子を育て 大法螺の話聞いてるティーカップ 果てしない残影を追うクラス会 農繁期汗の汚れは喜ばれ 品切れと脅し売り切りたいチラシ 喜怒哀楽毎日のお茶に嘘はない 美しい顔をしていて刺を持つ 親譲り冴えん顔だが人気者 見違える女引き出す美容院 小さな幸探して登る老いの坂 三つ指の挨拶亡母に似た女将 孫可愛い余りに我が子かすみたり 人情の優れた街から出られない 越後獅子脱げば優しい顔になり 人波を泳いで明日の米を買う 十七歳の話を嫌う吾子の顔 落ちこぼれ介護にやさしい手を伸べる ほど遠い自慢話がこそばゆい 夜行性またも出会った北新 日でない何時も母に感謝する 川久保睦子報 久留美 登美子 志華子 トヨ子 久美子 柳宏子 夢之助 高 十四郎 満寿蔵 吊皮が停車の度に寄ってくる 人の死をあの星だよとはかなげに 星空がきれい歌って帰ろうよ 流れ星待って願いをかけてみる 背後には星の王子が見えかくれ 静寂な夜空を走る流れ星 友達を誘ってならぬ流れ星 腰がじりじり棒になる石になる 年ごとにじりじり退化するわたし 虎の子をじりじり狙う者がくる 仏前のいのちじりじり燃えている じりじりと焼いたするめの旨いこと じりじりとにじり寄るほんとうは好き じりじりと白髪も増えて派手好む 何するもいやな日続く五月雨 ほろ酔いの女ますます熟れてくる 雨風はいっとき明日はきっと晴れ 母は派手娘は地味な色を着る 六月の雨はやさしく君に降る 君が代の次には歌う海征かば 時刻表捲ると旅の夢を見る 生活のリズムがくるう妻の風邪 披露宴あれだけ褒めて島流し 寂しさと愉しさの日々ルージュ引く 鯉のぼり見上げてご覧十七歳 今日もまたひとりよがりに弾む毬 柳塔鹿野みか月 土橋 孔美子 みさ子 はるお みどり 富久江 実和小久 あやめ はじめ 寿美子 政 史 白 茂 早い者がちに見え隠れする欲 子思う親の気持はたよりない 思い出を口にだすから野次が飛ぶ かさぶたが取れてさっぱり初夏に立つ さっぱりが過ぎていつでも損をする 被害者の叫び少年法思う ライバルの動きを読んで先手打つ 早食いの癖をいまだに叱っている さっぱりした瞳の肖像母の日に 腹の中なんにも無いよ空の鯉 答案を出してさっぱりケセラセラ 去年より元気になったお爺さん 宿り木も一人前に生きてゆく あらっ蛍時々テレビから光る 鍵っ子かな爪をかんでる淋しがり 私小説瓦礫坂道 水たまり 涙なくしては書けない私小説 せんそうの悲劇を小説が謳う 住みついた屋根裏からの私小説 不渡りが何だ小説ではないか 星空を病気の母に見せてやる 寝たきりになりたくなくて杖を持つ 小説のモデルになった小百合の碑 私小説書くには紙が白すぎる 小説に喜怒哀楽のドラマ見る 十七歳が小説の真似をする ーカルのきらめく星へ乾杯を 占 宣子報

きみ子

かつ乃

八重子

くに子

みさ子

葉士人

ユリ子

偶然を大事にしてる絵の具皿 偶然の出会い古木が芽吹く春 早とちりそれも治らぬ病かも 恋びとと思えばそうかそうだろう 偶然をくれる神様ありがとう 母の日も病床にいるむなしさよ 消し炭の中から哀しい偶然 早熟とすまされないぞ十七歳 横文字が出るとさっぱり落ち着けぬ 母の日は素敵な顔が揃います 偶然の出会いに火照る夏椿 こざっぱり生きる雑巾縫っている 幸せと思う遍路のぼっくり死 人間を摑んでにんげんは熱い つき合いが上手と思う人と居る

偶然のくらしを丁寧に生きる 思い通りにならぬこの世が面白い さっぱりと首を切られたチューリップ 和歌子 登美枝 ひろこ くにお 男 度忘れも苦にせず今日も生きている 鴛鴦が川の流れに色彩添える

宮崎シマ子報

はやばやと蛍見つけた季の移り 野次馬のはやばやと湧く事故現場 はやばやと香典返しのご用聞き はやばやとエス・オー・エスのあかんたれ 遠雷にはやばや夜店去に支度 陶工の汗が火の色読んでいる 冷や汗の汗も心を浄化さす がんばった汗だみんなにみてもらう 敗因はやっぱり汗の量だろう 一年もつ雨もりになやまされ 巳代二 加津子 シマ子 扶美代 柳宏子 ばっは ダン吉 度 郎

> 祝い事済んで帯解く四畳半 飾られた埴輪やさしい目をしてる

句多留

新築を祝って戻る古畳 祝杯の場を盛り上げる芸達者

手の鳴る方へ倒れかかっていくからだ やさしくて老母の言葉が身にこたえ 待った甲斐あった山百合咲いている 話の腰を折る人いつかふりむいた 少し怠惰な刻を楽しむハンモック 大きめなパジャマで夢の続きみる 川はさんで小石投げ合ったのも青春 しばらくは純度の高いミルク売る ふみ 富美子 八重子 日枝子 てい子 喉あめを貰うてからの胸さわぎ 湯上がりの喉にビールが躍り込む

たもつ

あづま

汗一斗祭りばやしの勇み肌 うぬぼれがマイク握って放さない 目も耳も鼻も動いている得意 素人と見えぬ得意の松手入れ 川下に住みお喋りは超得意 喉まで出たことば飲み込み和を保つ どこまでも得意に伸びる豆の蔓 破調でも心の空を聴かす喉 言い勝って喉の小骨がまだとれず 一匹の正論を吐く喉ぼとけ

なぎさ

得意先回りはいつも低い靴 横浜あおば川柳会

現代をなんと見ている埴輪の目 妻の句に知らぬ男が棲んでいる 神かけた愛を疑うくすり指 銅鏡に映るわたしは埴輪の目 展示品よりもパソコン子の興味 陳列の埴輪の中に知った顔 農耕の原点を見る石器類 お肩でも揉みましょうかと夫が言う 嘉鈴和

風

吊りしのぶ茶席に揺らり自己主張

寿々子

子

冬がもうにこにこ笑うウインドー はやばやと鬼やんまと会う晴れ間 はやばやと嘘泣き覚え困らせる 政岡日枝子報

バカンスはさっぱり歯車のひとり

太陽をたらふくたべた野菜食べ 頭下げることが上手で社長職

急停車とっさに前へのめり込む

やはり起こったミレニアムの予言 素敵な友が私のシンボルだ

夏バテにいつも元気なかぼちゃ好き 隣まで伸びた西瓜を二等分

スミヱ

写真判定ゴキブリの勝蠅叩き

火叩きで守れというた神の国

お尻ピシャピシャ母が躾の平手打ち 八起き目の男は誰も叩けない

とみを

火打石打てば古代の香りする 疑いを知らぬ女の幸不幸

> 士三子智 可

-112

有珠の山このまま世紀終えますか

健

益

へと日々を紡いで時を待

由美子

政

母の海 祝盃をあげた金盃磨く朝 神前の言葉時には信じない 頑張ったテストの点に疑惑の目 キャンバスを青一色の海で埋め おおらかな海に明日の詩がある 星条旗誇りを月の海に見せ 南北の夜明けを祝うチマチョゴリ 山の湯のみやげに届く海の幸 た祝辞一行飛ばされる 時には怒り岩を嚙む

よくもまあ税金使って歴史館 美柳士 サト子 純 徳

今開くつぼみこのまま咲かせたい 親の威厳号令かけて保ってる 中傷の言葉はそっとカットする 幸せになれる号令なら聞こう

このまんま白を愛して生きてみる このままで仮面脱がずにいる辛さ 荒波をたてずこのまま生きのびる 抜け殻に力んで生きた母子の章 十七歳父の号令届かない ままで風の動きを見るゆとり

三津子 悦 春

願掛けが多過ぎ神もカットする カットした素敵な言葉皿に盛る

夕焼けが海の広さを見せつける

川柳ふうもん吟社

杉本

孝男報

号令も昭和一桁まで効いた

このままがよいです涙こぼすから

疑いを抱かぬ妻といる平和

海底のマグマ離島の夏奪う

良 喬 大康 子 博

呱呱の声未来の地図の第一歩

宗 明

こう言うとああ言い逃げる回り椅子 男

たかがデマ七十五日は我慢する

良

郎

一静正登悦 子生子良

デマでよし思う心は深くなり

すっきりと割り切る太刀の大上段 太刀さばき父の意見に逆らえぬ 太刀一本古墳の謎を語り出す

はつ江

名

写経一枚命の地図を画くように 血が騒ぐ地図にときどき蹴つまずく 新装開店チラシの隅に地図を入れ 刀疵維新のドラマ語りつぐ 意地張った手前助太刀頼めない 背広着てそれぞれの太刀もっている ひさの

デマの波紋をじっと眺めている策士 盛り上がる海に男の竿躍る 釣りあげた真鯛みごとに弧を描く 好きな時目で旅をする世界地図 白い地図気ままな旅の供をする ふな釣りの竿で悟りを持っている

子

気がつけばとっぷり暮れている写経 眉につばつけて聞いてる選挙戦 敗戦をデマと信じて泣いた日々 なきさ 子

聞きたいがプライドじゃまし口つぐむ まぽろしか卯の花陰のわらべ唄 大鯉に恋の二人をゆさぶられ **若き日の思い出池につがいどり 梅鯉庵古池にみる過去の夏** 新緑がストレス消してくれた道

ふじ子 余吏子 デマ飛んで夜道帰れぬ嫁と孫 地図にない道で拾った愛ひとつ ネオン塔くっきり映えてきた夜景 ママを待つ砂場とっぷり黄昏れる 七回忌とっぷり亡母の小半日 一世議員親の権勢どっぷりと

号令も耳が遠くて揃わない

悲しみを拭ってくれた聞き上手 親の見え聞く耳捨てた子に育ち

このままじゃ介護保険が行き詰まる 憎しみが消える念仏唱えたい

茂登子 輪多朗

> 袋かけラジオを友に泣き笑い 母の瞳思い浮かべて電話聞く

女

日の出

雑音はカットし耳に届かない 予科練の号令砂にうめてある 父の声母の声聴く峠越え

人生にカットをしたい傷がある 号令かけると一匹の馬になれる 号令のままに動いて骨ポキリ このままで死にたいなどと嘘を言う 悔しいがカットするほど髪がない 咲き急ぐ花よこのまま散るじゃない

香水にときめいた日よいま一

日出子

信

とみを

重

人的峰秋

久

-113 -

揺れる大地だんだんデマも耳を貸し デマ流れ以外田舎が早回り 一目惚れ撒き餌擬似餌で釣り上げる 清 柳宏子 遠

倉吉川柳会 松本よしえ報

シャワーより風呂に入らにや気が済まぬ 万歩計シャワーを浴びてくるっちゃった シャワー浴びた娘の顔はマリア様 三病に耐えてそろりとシャワーする 映画村屋根からシャワー降ってくる 突然にシャワーの如き俄雨 布団干して下さいなお父さん 下さいと言われる前にメッチャ惚れ タクシーのお釣り暫く待たされる 蛍火を下さい母の迎え火に 知らぬ地にいきなり飛ばす辞令なり 下さいと言われて見ればおしくなり 下さいと小さな声で言った奴 水垢離は知らないだろうシャワー 我が身よりお花のシャワー忘れない 下さいと言った責任重いもの 口下手が好きといきなり言った夜 いきなりに猿がカバンをひったくる みち子 賀寿恵 美ッチ 日出子 秋 紀美子 ゆり子 和 康 よしえ 雄

少年が助けを乞うていた目線

あずき

シャワーして昼寝しようか誰も留守 釣り上げた人魚に指し図されている ホームレス星のシャワーを浴びている 下さいが素直に言えぬねじり草 世話やきがいきなり人の仕事とる 金持ちがお釣り一円待っている きみ子 睦 かつみ 石花菜

西喜美子 男 芸のない男 子犬に芸仕込む 将軍に負けず劣らず犬を抱く

正節

生牛枝

力

ラ・クンパルシータ悪女の種芽ぶきそう 結局はひとりと知った闘病記 べっぴんが悪いお人と言うてくれ ときどきはワルを味方にして生きる 夏休み可愛い悪魔おでましだ 智恵子 哲 靖

悪いのはみんな他人のせいにする 芯のある男悪人とも呼ばれ 気張っても出てくる汗が光らない 悪人は一人もいないベビーカー 真夏日へくさびが少しずれてくる 希久子 IF.

時広 路報 悪女とは見えぬ可愛い片えくぼ

いわる

第三者で居れば良かった肩の凝り

竹原川柳会

浮草と遊び輪を画く水すまし 束ね髪のルーツさわやかなる輪ゴム 輪ゴムはずして女に脱皮する私 早朝に釣り好き九人楽しそう 友達がひとりもいない一輪車

幸せを下さいいのちあるうちに

はたちに戻るクスリ下さい僕にだけ シャワーばかり使って娘でてこない 蟻の行列如露のシャワーで大騒ぎ

すばらしい愛を下さい燃える夏

芳

キスのシャワー浴びて無残な顔になる

久玲

気分転換マニキュアの色変えてみる 喜久恵

> 僕の眼の盲導犬を信じきる 親子して犬の躾に力んでる 見えぬ輪を画く秒針の中で生き 世紀犬死には無いだろう

あじさいの宇宙を旅する親子 雨乞いの上手な蛙今いない 雨しとど蛙ピョコピョコ唄ってる 蛙のいない梅雨の田圃も寂しいね よく笑う犬で役にはたちません 魂があるから犬はもう飼えぬ ホームレスに憧れている夜のポチ 蛙

子喜狐恵夫

優勝の自信コーラスに持つ蛙 川柳クラブわたの花 吉村

蛙とかえる金婚式を迎えたり 蛙の子が蛙に育たないニュー

ス

尾行する夫を消した赤信号 まっすぐか折れよか迷う交差点 内科歯科整形眼科つかれます 合父は音痴な佐渡おけさ

迷いなく率直に言う姑想っ こども叩いてぼくにこぶできました 新しい風が吹き込む交差点 交差点首の運動して渡る つり書には料理得意とあっ 樽の栓が弾んで喉が鳴る たけど

宏

ミツ子

八寿子 美代子 知佐子

ほめられて得意な喉がマイク持つ

風報

-114 -

階段の響きでわかる妻の乱 青テント気儘な姿して暮らす 尻尾振る姿は子には見せられぬ 輪廻転生次の姿は何だろう 炊事する妻の背中が丸味おび この気質母の姿をみて育ち 赤信号まちのカラスに通じない 犬連れた人に道聞く交差点 信号を待って気がつく忘れ物 若い日の君を見そめた交差点 水泳帽一列歩く温プール 交差点迷わぬ亡父の道しるべ まあいいか貧乏神に慕われる 軽はずみ重荷と知らず引受ける みつけたが残念ながら交差点 まかしとき胸を叩いた頼りなさ 高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

ますみ 一朝正友 奈良司 まさと 幸 子 枝風子江 母さんのおしゃれが目立つ参観 底入れのまだその下の底で泣く 脳細胞賞味期限が切れかかる 六月のワルツ奏でる雨の音 川柳で余生に花を咲かせたい 孫二歳もう口紅に目を細め 訳があるから留守番を買うて出た 留守番もまともに出来ずぼやかれる 阪神戦みたくて留守番かってでる てんてこ舞い妻の苦労を知った留守 キッチンを汚したままのお留守番 心臓に響くタイガースの苦 一生に一度のおしゃれ白を着る

あやめ 治三郎

幸川柳教室

能面の奥の炎は覗かせぬ 竹光でみごと奥義を極めてる 反論の言葉奥歯でスタンバイ 未亡人に用心棒を頼まれる 奥まった部屋で熟成する謀反 マンネリの脳の奥からかき回す 奥の手を出して女神を引き寄せる

> さち子 豊太郎 栄之進

> > 11

大

郎

新婚の二階がひびかぬのも不思議 胸に響く温い言葉に涙する 高齢者の死活に響くゼロ金利

> 熟女の恋花のうねりの中で逢う せっかくの相合傘に雨が止む 同心円の愛をくるりとコンパスで 盗んで下さいあんな夫はもういら ちぐはぐを若さおしゃれに着こなして 如 比ろ志 波留吉 吉之助 柳宏子 慶 高

あんぱんマン読んで子供と対話する

スミ 発五靖 子月巳 食パンのような飽きない人が好 ステッキが外出先を全部知 過労死のトップ走った棒グラフ 切れのパンが人生狂わせる ーブは布でバットは棒だっ

健三郎

登山靴山の掟と響き合う 以心伝心お茶の時間にお茶が出る

風よけに棒一本を立ててみる

大ジョッキ天下国家も泡なのか故郷が見えるラムネの泡のなか パンを焼くランドスケープ憧れる エスプレッソ私の午後が満ちてくる うたかたの泡となりても散りぬるを 美辞麗句しゃぼんの泡で流しとく ぶつぶつと干潟返せと蟹の泡 一泡を吹かせるつもり眼鏡買う 手のひらのミクロの泡が髪に消え パンの耳みたいな彼と結ばれる 張り込みへ届いたパンは丸齧り あなた似で少し堅めのコッペパン パンのみに生きる男の無味無臭 飽食の時代を嘆くパンの耳 振り向けばふかしたパンにあるドラマ 三千子 正桂千昭利み匍香秀枝治ね 鉄正町和保当 起世子 美 キミエ

金持ちにやさしい介護作り出し男気があふれています甲子園 逆境に耐えて男の顔になる 正論で生きた分だけ浮いてい 3 柳弘報

雅信すがお

伸朱次

夏根

-115-

浮雲に私の心さらわれる

ウインクが下手でお辞儀をしてしまう

美智子

た凧携帯電話で呼び戻す

神様はいまヨーロッパ旅行中 初体験苗植え嬉しい小学生 遺伝子に記紀が生きてる神の国 嘩して笑って孫とおじいちゃん

> 111 笑

奥様のお顔の艶がオホホホ 夏至の花梅雨に競って咲き乱れ 故郷の訛りはダムに沈まな 老妻も活きいきとなる紅一つ

剣郎汀明夫翠視夫

よしこ

某課長金魚の刺身食ったとか

大

弱者から毟った金で企業保護

尼崎いくしま川柳会

さち子 射月芳

南禅寺湯豆腐かこみ聞く法話 スーパーの豆腐に家族慣らされる

十四郎

健三郎 あき子 克

ひまわりの元気のほしい苗うえる 太陽を愛したひまわりの孤独 湯豆腐がぐらぐら踊る差し向

ひまわりと並んでバスのロスタイム ブランドの肩からのぞくエレキバン 寂聴尼の法話にほぐす肩の凝り ヒサコ 弘正和紫 治

ダン吉 本蔭棒 まつお 久志 雄 步 風 嫁ぐ娘としみじみ入る仕舞い かかわりになるなと友が目で合図 ウインクに愛と真心込めてある ウインクで通じています新世帯 ウインクで摑んだ男横にいる ウインクでママはお客の骨を抜く 拒まれても来世も妻でいて欲し 義理人情絡んで無理が拒めない 待って待って待った臓器が拒否をする 余韻まで拒むつもりか砂時計 弾まない毬がわたしの手を嫌う 土壇場で拒む台詞を持っている 逢うまでは風を拒んでいるセッ 厚底の娘にもやさしさあふれてる 嫁ぐ娘に嫌なら帰れという時代 雨降れば降ったで嫁った娘を思 さじ投げた娘に介護されている 娘など要らぬと妻の淋しそう 足跡を褒めてあげたい粗大ごみ

萬

土用迫るを肌で鰻は感じ取る

的博

一秋

引き算の顔が介護の部屋にある つまずいた男励ます妻の酒 修羅一つ越えて男の顔になる 年問わず男の性は死の日記 矢が尽きた時に男の値が決まる 釣り糸の横へ魚が浮いてくる 花いかだ揺れて川面の夢を追う 介護する夫の苦労見えますか

女系家族父がぽっかり浮いている

一朝元

三十四 柳宏子 ごみゼロをめざし地球が息をつく まだごみにされたくは無い職捜 山の湯へ心のごみを捨てにゆく 使い捨て人間までもごみにする 良心も捨てたのですかゴミの山

高

夫 州 男

英稚

乗車券元気定退呼びあつめ 未練ある経木流れず浮いたまま 車椅子どなたが押してくれますか 古希だって浮いた噂も欲しいもの

寝たきりの母に合わせている介護

介護法老人ホーム泣き笑い 看る方も少し疲れた紙おむつ 介護保険枯れ木にやはり水ですか

火種だけ消してはならぬ浮き沈み

要介護白衣の白が目に眩 縄のれん男の本音渦をまく 着る人が着れば模様が浮いてくる

凶行が頻り少年法いじる

ゴミの日の鴉人間馬鹿にする

柳宏子

めぐみ

平凡に生きるが伸びる髪と爪

息づかい聴こえるようにはす開く 老犬の黒目日毎にうすくなり ぐんぐんとひまわり空に近くなる 骨太のひまわりの絵に見るゴッホ

つも気になるごみの嵩

緑良報

柳塔わかやま吟社

子

近くても遠い娘の嫁ぎ先

ごみ拾い袋の嵩を競い合う の思へゴミを肥料にしてかえす

-116 -

ひょっとしてあの指切りが初恋か 澄んだ瞳の孫の指切りだませない 指切りのあしたへ心弾ませる 指切りの小指の先に奇麗な眼 指切りで子供に還る老い二人 思惑を秘めてやさしく譲る事 七光り親の地盤を譲り受け 指切りをしてから重い荷をかつぐ 最後まで譲らぬ男に意地がある おさがりの辞書くせのある兄貴の字 有名になりたくはないゴミの里 有名になると疎遠の人も来る 有名に成れよ成るなよ孫二人 飛車角を使い残して時期を待つ 速足で蟻も良い汗かいている 超の付く音痴で僕の名が売れる 有名になって支えた人忘れ 有名に成らずともよし孫二人 車には似合いの人が乗っている 病院に単行本の一冊と 水墨画ままならぬ筆みつめ 総理どのやる気ないのが神頼み 七夕の色紙に老いてなにを書く 目標も予定も狂い半夏生 冷蔵庫満タン誰か訪ねて下さいな 勘ぐればすんなりゆかぬ針の穴 リサイクル母が三つも若く見え はまゆう川柳会 中後 清史報 生米子 すみれ まゆみ 美佐子 恵美子 さだ代 利ぼん 比斗志 比ろ志 しづ子 てる坊 昭 笛 惠 穗 もう十年若ければなどときりがない 欲言えば美人に生んで欲しかった なに不足あってナイフを振りかざす ひと言が足りず誤解の闇の中 クールではいられぬ妻の捨て台詞 これという時にクールにかわされる 何事もクールに解し和をはかる 失言にクールな視線四方から 高原の花はクールに咲いている 少年法クールな判断できかねる 冷房に慣れて気温に呆けた皮膚 人間の都合で害虫決めている 地球から来た公害の果し状 母鳥がいずれ飛び立つひなを抱く 花を買ういずれ眩暈するだろう いずれまた 電話が切れて何十年 適当にずぼらしながら生きている 緑風をごちそうにして山歩く 加茂川の柳に秘めし恋あらん 指切りが待ちぼうけする喫茶店 奥深く指切り胸に秘めている 大きい字の辞書はやっぱり使いよい 大戦が指切りの仲引き裂いた 家で看る指切りしたが施設行き 一票をボクはクールな人に賭け 一期一会の佳き女と会う花の縁 自己紹介 恥ずかしながら傘寿です 京都塔の会 吉之助 美智子 百合子 ただし 友 満 武庫坊 清修公 輝欣 年 宏美達 益 飛正 葉 之鳥 坊 子配 子穂 史也治 美 胃カメラがしつこく論す酒たばこ 二十一世紀バトンを受ける手を洗う 新世紀緑の大地脈を打て 夢を売る人を呼び止め一 絵の題を見てからハハンと眺め入る 無題という題にとまどう老いた脳 難題をかかえて娘の里帰り もぎたてのトマトビニールには入れぬ 不足なくそれでも切れる十七歳 食べて寝てこの上何の不足言う 色ひとつ不足のままで折る絵筆 やぐら組み流れ読みます新世紀 長生きをしていいですか新世紀 米を研ぐ二十一世紀の朝も ビニールの袋に機嫌よい金魚 罪深い心を洗う青い海 四季のないビニールハウスからの四季 ビニールの強さもろさを持つ私 問題がひとつ片付くまたひとつ 不足分は払っといてと言う男 日記帳妻の不足は書いてない カルシューム不足へ朝昼暁とジャ あと一歩力不足をバネとする 一十一世紀生きる年月数えてる 一次会へしつこい愚痴もついていく 柳若葉の会 つ買う 原

欣史子

+

シマ子

あずき

みさを報

紀清彰雅

子子雄通子一

孝

7

柳宏子

代

高 求

芽

七転び八転び続き黄昏れる しつこいと言った彼女が今の 月月火野菜農家は休みなし ラッパ吹く七つボタンの生き残り 紫陽花は七色化けて夏を告ぐ 七月はうなぎに恐い土用丑 七癖が有って人間らしく生き 七転びもう芽が出てもいい頃だ 七人の敵のひとりにされている 七難を隠し可愛い嫁が来る 歩いても跳ねても脂肪あざ笑う しつこい嘘で童話の森を抜け出せぬ 妻 富貴子 由多香 幸次郎

クラス会昔のままの花そろう お見舞いにひとこと添えた花ことば ひまわりにうたた寝の顔のぞかれる 七光り一夜明ければ議員さん おじいさん七福神に仲間入り せつ子

花柄の浴衣が似合う二人連れ 露草のけなげさ万歩計止める ユーモアも入れた祝辞で花添える

みさを

宏 章

靖子報

アレルギーの錠剤パックに旅の宿 楢山の月が程よく照らす足 無駄骨を折って出直す足がある また一つカルテに重いアレルギー 最高のメニュー横目にアレルギー 意地にでも切れぬ鋏で切って見せ 急いでる時に出会った話好き 多美子 とみ子 八重子 美智子

友と逢い心の掃除して帰り

そよ風に六感冴えて浮かれ出

りつえ

冬支度することはないきりぎりす

有り難うだけを忘れず生きのびる

自然体他力にまかせている心

ハワイならビキニぐらいは着てみせる

孫が来る朝から足が地につかぬ それ位歩けと車降ろされる アレルギーになりそう恋の火種失せ 追風に乗った花粉に泣かされる 客の子のアレルギー出てあわてさせ 口惜し さびかけた頭よりかけ辞書を引く そば好きな私いじめるアレルギー アレルギーやっぱり親のもらいもの 勝ち残る足場固めている野心 雑魚なりの頭が揃い多数決 頭打つ数だけ人間丸くなり いねお酒呑めないアレルギー 美紗子 かつ子 すず子 房 寿 毬

(前月分) 河内 月子報

111

恥じろうて来た嫁ですが強くなり 力んではないが力は入れている 掃除したわたしを飾る台所 そそくさとローテーションの渦の中 赤ちゃんが力まかせで泣いてます 失敗に学び恥かき生きてきた 重箱のすみの掃除で嫌われる お月さま見てはる窓を締めてから 八千代 玄 Ŧi. 錦 春

楓 也 月

過信した力の脆さ闇を嚙む

大掃除思わぬ宝出た隙間 粒も残さず食べて恥ずかしい

> 子供部屋そうじしながらチェックする 恥搔かぬように夫の財布見る 風呂掃除スランプはまだ終らない 力瘤この頃お呼びありません 母がもつ貧に負けない底力 満身の力で生きるやせ蛙 弱虫の咄嗟に出した馬鹿力 人生の楽しさ恥をかいてから 漱石も蘆花もとまどう浮世風 青空に箒のあとが残ってる

> > かりん

お隣の前も掃いてる戦中派 そのころはロックンロールウエスタン 恥じらいを捨てずに余生飛んでます 傍にいてろくに話さぬうちの人 ぶつかって時々力試してる

JII 河内 月子報

ドンファンは千人ぼくは妻ひとり 月夜には傷を癒して鎧脱ぎ よく笑ろた日は張り切って夕支度 忘れるな爆弾降ったあの恐怖 散骨の支度ぐらいは出来ている お迎えはちょい待ち支度まだですの カレンダーに書いてあるのに見忘れる 吸い込まれそうな瞳に騙される 深

月ごとにきちんきちんと養育費 度忘れを笑い合えてるうちが花 つづや さくら 玄 也 平 羅 丰 虹

朋 なぎさ みつこ つづや 泰 さくら 虹 丰 子

-118

夏空に若さ集めて櫓組む 騙された方にも罪はあるのです ほどほどに忘れて脳を軽くする バラ百本用意して待つ初舞台 辛くって君を消すため酔っている 追伸で君の心がよく見える 未練ばっさり落とした財布忘れます 月あかり牙は見せずに寄りかかり ビー玉の中に忘れたままの恋 ええ梅やええ梅やなとほめて漬け 芋づるのひもじさ忘れダイエット つまずきに気付いてくれる嫁がいる つついたり気を遣ったり嫁姑 つんつんと気取っていたら夜が明 ケセラセラ忘れ上手を身につける つらい記事今日もいっぱい読まされる つくづくときついしぶとい嫁となる 高田美代子報 ける 喜代子 日の出 小朋 かりん 紀美女 りつえ 春 太 雪 月

多種多様雲の流れが読み切れず 昭和の日廃案にして票を読む 結ばれていろいろ苦労かけました 再会へ何から語ろう深い皺 良宮さま逝かれ昭和が消えました いろいろな予定壊しに孫が来る いろいろがあって眉間に傷がある いろいろな節目のたびに懺悔する いろいろの証拠を焼いてから死のう 自分史にいろいろ変えた母の顔 夢いろいろ手探りしてるフリーター イヌと並んで世を憂う尾を垂れる 投げ返された憂いとシャワーを浴びる いろいろな欲が老後を弾ませる いろいろな過去は問わない遍路笠 手くらがりほどの憂いと黄昏れる 相槌がずれて憂いが胃に溜まる 、間が歩いた後にある憂い 婦美枝 終 瑠美 かつみ しげお 絹 悦 +

マサ子 扶美代 美代子 子郎 留守にした嫁のメモあり箇条書 旅がえり留守の我が家を見てほ 留守電に借り忘れるなと入れておく 気配りもすぎればうるさい人となる うき静か今日は魚は留守らし テレビゲーム母の留守待つ子がひとり アルツハイマー平たく言えば脳が留守

らっと

千里志 正三郎 安 正竹 憂国の志士を気取っている詐欺師 ジューンプライド憂いは梅雨の所為だろう

向日葵がお辞儀している休耕

身体中休め直せとうめいてる

休耕田むらさきの彩菖蒲園

二風治童清

気休めのつもりが深い仲となり

社内初育児休暇をとったパ

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

長

山の辺に今日一日の大和

息切れに挑戦古希の万歩計 負け戦承知でエイと手を上げる 美女熟女龍宮城に来たような 終着駅にアタックをした跡 紫陽花の色を盗んだネックレス 真っ白な紫陽花あなたも移り気か がある

お洩らしのパンツも入れて保育園 作戦が洩れたか敵は乗ってこず 内緒事何時かどこかで洩れてくる アタックがいつか守りとなる月日 木洩れ日に心がなごむ梅雨晴れ間 ひとすじの洩れた光に救われる 警察署次から次と秘密洩れ 氷壁に挑むロマンの登山靴

梅雨ごもりワインの色を灯に透かす ストレスを捨てに旅立つ雨の 雨もいいなあいっぱい傘の花が咲く ジャンプ傘はずんで君に逢いに行く バーバリーの傘です雨を待ってます 横綱の肩が濡れてる蛇の目傘 雨あがり子供も竿に干そうかな

みよ子

寒くなるニュースの続く暑い町暑い日は熱い茶がよい竹すだれ

ただし

実

重き荷を背負い休まず坂いくつ 気がもめる休み休みに言わない シマ子

暑中お見舞ミルクを変えて元気です

熱帯夜離れていてもなお暑

直

ほたる川柳同好会

田辺正三郎報

一つ子に憂いを見せず背を叩

雨降ってほっと一息タイガース

久仁子 みつこ 美代子 ダン吉 満寿蔵 吐

明日のことどうあれ今日を努力する うす灯洩れてメルヘンひなの窓 あっさりと洩らしてしまうお人好し 余生また好みの彩に努力する 優等に無縁で努力賞はある 金婚の妻にやりたい努力賞 追い風にやっと努力の実が結び 禁煙の努力ひたすらガムを嚙む 玉手箱洩れる中味は妻の愚痴 獏 明 絢

逆縁の黒の切手が乾かな

頑固

風佑

六十路からようやく父の汗になる りつえ かつみ 元 知紀 洋 ライバルの入院まっ先に見舞 入院の日も大安を選ぶ母 入院は辛い家族は猶辛い 美人ナースの言う事は聞く へ村が総出でくる騒ぎ

江

頂上の風が私を呼んでいる 花咲かす正直者が蒔いた種

川柳ねやがわ

葉

留守電へ入れた母さん標準語 逆さに貼った切手が届く梅雨前線 梅雨しとど思慕が一気に深くなる 個びた骨には

丁度よい

梅雨だ 梅雨の空和解に遠い夫婦仲 梅雨あけを待ってもおれん万歩計 お隣と花と新茶で梅雨に入る とし子

暗証番号押す癖が出るプッシュホン 持ちかえた受話器まじめな顔になる 勇太朗 高 かすみ 修 度 成

Eメール読んだと孫からの電話

クロネコが切手を出せば国変わる 古切手悲喜交交の骸たち 返信の切手返り血浴びている 海鳴りの音が電話の向こうから

し大典の記念切手は額に入れ

背丈まだ縮んでいない確かめる 基地縮小みんな待ってる平和の日 縮かんで瞬発力を撓めている

知香子

母の壺叩くと質素な音がする

叩かれてのされて旨いスルメイカ

鎮魂の鐘を忘れぬ夏の蟬

太らぬようゆっくりかんで食べている また一病足手まといになる予感 退院をしたら死ぬほど飲んでや 入院のベッド祈りが深くなる 自転車で通う会社で気がゆるみ りんごむきながら介護を考える 信頼の眼がものを言ういい仲間 病院から出社してくる社長さん

空が碧すぎる真っ白に歯を磨 豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

四つ辻でまた思案する空になり

散らかった部屋で私を取り戻す

手鏡で含み笑いのおしゃれする 手鏡の奥に野心が燃えている 嘘をつくたびに曇ってくる鏡 老婦人コンパクトそっと身だしなみ 食中毒のお詫びで忙しいスーツ お出かけの住職スーツにベレー 一線みなライバルと見るスー

柳宏子 寿美子 石

> 萎縮する心励ます座右の 見栄張りの足元にある水溜まり 真実を吐けば止まらぬちびた筆 反抗期すんで息子と飲むビール 雑草という名 図鑑にないのです ゴム紐を縮め時節を待つとする 大声となった電話と勝負中 日一善果たしゴクゴク飲む麦茶

腕白と言われた友の人情味

あやめ

1

ルイ子

波留吉

弘 昭

きく子 しげお

高靖

栄巳

思いっ切り今叩かねば戸が閉まる ちくちくと幼馴染みに皮肉られ 肩叩き小さくなった母の肩 子を叩き胸のマグマは涙ぐむ 衆院選大物ぞくぞく落選

出しゃばった天狗の鼻に杭を打つ 目論見が肩叩きするちっちゃな手 叩かれた記憶遠くにねぶた笛 大口を叩いた父の衣紋掛 警策の音で煩悩ひとつ消え ノックする度胸で摑む縄の端

叩かれて自分の意志をとおす釘 大物も天才も居なくなってたわが家 泣きながらビンタをくれた父は亡い

吉太郎

諷云児

世渡りが下手で石橋叩いてる 誠雨

三千子 たもつ

泉

ヒサ子 ふさる きよし

女

うらはらの心と口が喧嘩する 駆け引きのうまい女のうす化粧 蕉 子

あるがままの姿を海に見てもらう

陽が沈む水平線の燃える色 郷愁を誘う海辺が遠くなり 神様も悪魔も住んでいる樹海 さと美

ブールで自信まだかまだかと海開き

子

漫才師の書棚雑学山と積む

日の出 正 雄

青春に戻り大声海に吐く 雲海に心洗われハミングす

梢

無一文三途の川も渡れまい

英壬子 宣 峰 司

引き潮へさっと岩のり摘む早さ

海の日あり山がないので嫉妬する 歌舞伎見に外国人もちらほらと まゆ引いて今日の獲物の皮算用 夜の海淋しい人を知っている

夕暮れにチラホラともる団地の灯

会

花束が漂う海は凪いでいる 惜し気もなく柔肌曝す海開き

水平線やっぱり地球丸いのだ

喜美子

夏が逝き戸板さびしい海の家 数合わせ鬼でも蛇でも引き入れる 傷口を海の青さに癒される 海辺をなぜコンクリートにしてしまう 正

返事待つ長い一日暮れてい

いわる

顔の汗手で拭き男夏の顔

悪縁のズルズル地獄までおちる 悪いこともする日本銀行券 銀行に預け心配ばかりする

京郎 漁

> ずるずるとこのまま土になるものか 薄氷を踏んでも君を守り切る

橋いくつ渡れば悩み解けるのか 雑談に花を咲かせて見る夕陽 雑魚のまま運命線が延び悩み

旅人が渡る時間と風がある 雑巾のあきらめ過去へ戻れない かき氷の向こうに炎の乳房

雑魚が来て大きな啖呵切っている 残高のゼロをカメラに覗かれる 雑巾の絞り方にも子の個性 冷静になれば渡れる橋もある

不渡手形透析へ出し浄化する

雑談は心をほぐす潤滑油

雑音の中で要は握っている この橋を渡ると因幡弁になる 猪の被害雑木林の乱伐だ 日銭追う暮らし銀行用がない

亀岡 哲子報

西宮北口川柳会

母の星長い電話になっている 空白の長さを埋める肩を抱く 歳月は長し わが身もつつがなし

好きでない夫と続き米寿来る つかず離れず思えば長いお付き合い

今はもう二本柱でささえ合う 五ルイ子 しげお

和歌子 きみ子

節 男

かつみ 徹 車

美恵子

不器用で黄色いままのさくらんぼ

大黒柱消えて男も丸くなる 内閣のときどきポカをする柱 柱と柱真っすぐ生きていく夫婦

まだ少し遊び足りないから生きる 床柱背にした父にある威厳 血と汗の結晶先ずは柱立つ

み 房 子

てる

あっさりもしてるがきつい事も言う 遊ぶのは性に合わない蟻の列 遊ぶ子が街から消えた世紀末

富喜子

靖

生き方を考えなおす星が降る やめときなはれ雲つかむよな話 夢さめてあっさり消えた虹のあと 子が見てるここはあっさり負けとこか お若いと言われあっさり買わされた 比ろ志 貴代子 千代美 キク子 江 美

パン焼けて朝からじりじり暑さ来る 筆不精だけど欠かせぬお礼状 週二回小の字なりに父と寝る 周 禄男

札ビラを切っても花はなびかない 玩具箱あしたの夢を遊ばせる たず子

松本はるみ報

わかあゆ川

木登りの上手な人も年が寄り 雨漏りを聞いて育ったねずみの仔 木の株に座れば何かが見えてくる 雨の中彼女に会いに行く若さ かつ子

-121 -

高

アリランの心は同じ手を握る

恋愛論まだ幼さの残る顔

なぜだろか汗を拭きふきクシャミする 葉っぱだけ濡らして逃げた通り雨 故郷の亡母の香りの木の芽和え 折鶴も眠れよ今夜は雨が降る 雑木にも陽は射すことも忘れない はるみ 清 ちよえ

幸子報

美しい姉で小箱に納まらぬ 箱書きをつけて高価な壺になる 踏み台にして踏み台になる寄せる波 大都会ネオンの林おそろしい 小箱の底には大きな田舎の森

克

枝

光

どの道も工事だらけで旗振られ 苦い実をネオンの花はみのらせる 幸せの小箱は夫婦だけのもの ネオン街カバンぶらさげ蟻がとぶ

貴玲睦

三食と同じに大事 薬箱 母恋し面影求め今日も泣く 重箱の隅をつつけば火傷する せっかちな母のリズムで回る朝

台座には黙って乗って居んなはれ 石花菜 忠

東大に大きなすべり台がある ばあちゃんの宝石箱にさくら目

かつみ

よしえ

しろう

からくりの仕掛に魔性乗り移り 踏み台にされて嬉しい子の成長 魔性仏性ミックスされた俺の性 美しいネオン狂想曲のように 鏡のまえ魔性の女化けかかる ネオン街企業戦士が羽根のばし

> 偽善者が魔性あらわし蠅叩く 金儲け心まどわす穴である ローマ字の手紙ネオンの下で読む ネオン街バッタリ会った息子殿 龍宮城遊び過ぎたか玉手箱

魔性とは百も承知で落ちて行く 箱に穴思想が少しずつ漏れる

取替えのきかぬ部品に出る疲れ 蟬の声胸にとどろく大暑なり 松の影私一人のものにする ロボットの胸に冷たい使命感 いい話なにか新聞めくる朝 いじわるでおてんば娘もひとの 誰よりも自分の胸に問うて見る 母

ライバルに読まれてしまう胸の内 可愛くてすこしいじわるしたくなる 蚊取線香遠い昔が匂い立つ 遠い恋が時々胸をよぎるなり 水たまり自分の影の歪み見る たそがれが意地悪をするのであした バラに逢いたいただそれだけのリハビリよ 炎帝よ少し意地悪過ぎないか はつ絵

必着のこと。 いのないようお願い申します。 各地柳壇の原稿は毎月25日までに事務所 作者名など、よく確かめて間 漳

定信

子

元

明子

節 雄 子々

裏町のネオン横目に通り抜け

ーズ川柳会

山崎 君子報

まさお 十三工 ミサヲ いわる キク子 貴代子

武庫坊 年

> せんりゅうぐるー GOKEN発足記念 第一 п 誌上川柳大会 33

題と選者

夏

俊正

番 2

傘

蘭幸 III 柳 塔

山本

毅

à

W ろ

高橋 角本 信之(俳誌 華峰(ふあうすと 水煙

中川 渡部 珂夏子(歌誌 一(ふあうすと 遊子

②各2句合計4句を一組とします 上岡喜久子(番

切 2000年9月20日必着 11月下旬頃発表誌送付

投句料 台点表彰をしないので一 組 1000円

人何組

成績優秀者の中から次回選者 各選者特選句に呈賞 でも可。郵便小為替

投句先 投句用紙自由 せんりゅうぐるーぷGOKEN事務局 松山市吉藤2-3-8原田否可立方

₹791 -8011 電話089-923-3305

海海許出海五海海海海海海海開海海天四マ祈 峡峡さ稼峡線峡峡峡峡峡峡城拓峡峡気島ゼ願 力 0 灯 が にする 理川 だぬねて握 るり山も 子 りいる カ る 長社 函 山青佐今高新吹箕京浜山鯖日長埼加八千弘札

●応募要領

官製ハガキに1句 (何枚でも可) 郵便番号・住所・氏名 年齢・電話番号を記載 の上、時計台ビール宛 お送り下さい 街にする

五回「ラーメン」11月末と四回「憧 れ」9月末と

●川柳応募者に限り2割引!!1 ケース¥3,000を2,400円 応募はがきの表面でご注文下さい

〒060-0051 札幌市中央区南一条東7丁目15-16



時計台ビール株式会社



柳贝

第60回 大阪川柳の会 的△効く・礒野いさむ 各題2句 ケイビル本館3階322号室 とき=10月3日(火) ・竹森雀舎△太陽・筒井祥文△出会い・阿萬萬 17時開場 題と選者=無駄 ところ=サン 席題なし

会費=800円

18時締切

15日に表彰式がある。 光の両氏が入賞した。 に誌友の原煩悩児・牧野芳 野哲男同人、佳作賞(10句 その大賞 (1句) に9歳の 8291句の応募があり、 また、奨励賞(5句)に北 黒川紫香相談役が輝いた。 坂道の高さで見える港町

★第一回文学ルート川柳は 母の手の届く高さのタオ 日曜市大阪弁に値切られ しみじみ故郷だ 煩悩児 芳光 哲男 紫香 館で開かれ。 7月29日 楽副理事長の一人50句「晴 月1日発行)58号に西出楓 社同人の秀句は次のとおり ★第18回夜市川柳大会は、 のち晴」が掲載された。 ★川柳春秋 が参加して開催。 れぬ 的にたつ男影武者かも知 しを食う 戦いのポーズしっかりめ 背伸びして愚かな汗をか 日がない 余命表めくるとずばり明 いている 堺市総合福祉会 (NHK学園7 本社関係の各 鈴木 鈴木 両川 石谷美恵子 当日の本

黒川

がいる 千枚田千の命と咲く田舎 掘り当てる 居酒屋でともだちひとり 光らない星があっても良 ように 父が病む象が崩れてゆく 来る耳よ 珈琲館ここだけで逢う人 いんだよ ぼくのところに一直線に 中井

始めるべく鋭意準備中。 村梨里・哲夫親子で句会を 9月で終了。引き続き、 教室は一年間の予定通り、 ★川柳塔東大阪カルチャー 人事往来△

新 同 人 紹 介

田 狸村・萬的 口 ・ダン吉推薦 穣

薫風・天笑・岳人推薦 井 P

薫風・月子・ようじ・まさよ推薦 森 本 弘

鬼遊・朝子・一風・隆盛推薦 尻 民法

薫風・天笑・岳人・美代子推薦 大 鐘 造

笛生・比呂志・恭昌・朝子推薦 谷 真 理 子

聞社で投句者含め167人

ない

和田つづや

回文学ルート川柳」の選

7月11日、薫風主幹は「第

会は7月9日、

新日本海新

ふる里は未だ玄関に鍵が

★第三回島取県川柳文芸大

題秀句は次のとおり。

ルかけ

と思う 夕映えに

大阪川柳人クラブ 第一回 吟行

\$ 9月27日 (水) 2

行き先 鳴門観潮吟行ツアー

(45人乗り大型バス)

午前8時半 集 合

大阪駅前 桜橋

ヒルトン・ホテル

8日

、交通事故のため死去。

子さん夫君・神戸市)は8月

多数がお見送りした。

岳人副理事長はじめ、 行われた告別式には、

■木村智氏

(同人木村貴代

連 〒669 絡 -1515 先

553

旅

出発9時一明石大橋一 渦上45メートルの渦の道 散歩-徳島阿波の里(昼食 · 句会)-明石海峡大橋-17時半帰着予定

「渦」「当日雑感」 宿 題 各題2句

6000円 経

申し込み先

信

大阪川柳人クラブ事務局 竹森雀舎宛

 $\pm 565 - 0824$ 吹田市山田西1-15-2 Tel 06-6877-3639

子

は選者として、 長・柳宏子相談役はじめ同 人多数が出席した。 楓楽副理事

柳本社句会に、

天笑理事長

■8月6日、水府忌番傘川

考のため、

尾道市役所行き。

64歳。

8 月 10

11

H

め死去。 田 は8月2日、 辺灸六氏 計 79歳。 (同人・倉敷 8月3日に 病気のた

サカエエバーホール玉島で

会場

午後2時から

館分室

多数がお見送りした。 平安祭典での通夜・告別式 薫風主幹はじめ柳友

川柳さんだ」

日時 9月19日 火

代上

子

0795.63.4593 三田市中央公民 三田市大原1 哲男 12 以上5名 宵明・ 笛生・比呂志・恭昌・朝子推薦 春嶺 薫風・ 出 城。 銭 佐 みの れいじ・きみえ推薦 山 Ш 藤 辺 ŋ 美津子推薦 治结 あ 昌 富 き

喜

枝

句会名	日時と題	会場と投句先
城 北川柳会	16日(土)午後1時から 風船・ジョーク・踊る・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅 2 号出口徒歩 8 分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川 柳 会 花	16日(土)午後1時から 顔・チェック・ふとん・雑詠	鳥取勤労者総合福祉センター 1 F 会議室 (鳥取駅南) 〒680-0044 鳥取市御弓町40-3 宮木方 坂田和歌子
岸和田川柳会	16日(土)午後1時半から 口裏・下駄・困る・誘う	市立福祉総合センター 2 F 南海線岸和田駅東歩 3 分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川 柳ねやがわ	17 日 (日) 正 午 か ら 王・計算・バランス・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	17日(日)午後 1 時半から 視線・どことなく・包む	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川 柳 会	18日(月)午後1時から カード・吹く・支える・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩 5 分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
川柳クラブ わたの花	22日(金)午前10時から 折る・肩・頑固	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
はびきの 市 民 州 柳 会	24日(日)午後1時から 口論・救う・アピール・「経験」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8―31―11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	24日(日)午後 1 時から 残り火・ハプニング・もうすぐ	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
川 柳 塔 みぞくち	25日(月)午後 7 時半から 空(そら)・月・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757—3 小西雄々
南大阪川柳会	27日(水)午後 6 時から 毎週・味覚・結ぶ・メジャー	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
京 都	29日(金)午後 1 時から 身・パック・難儀	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
東大阪市川 柳同 好 会	30日(土)午後 6 時から 薬・ゲスト・飛ぶ・未練	東大阪市立社会教育センター 2 F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉 3 — 3 —21 片岡湖風

川柳塔東大阪カルチャー教室 9月29日(金)午後2時から 布施駅前市民プラザ 「自由吟」3句-5句・〒593-8305 堺市堀上緑町2・16・3 河内天笑宛

[★]日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6629-6914) へご連絡ください。

句会名	日時と題	会場と投句先
尼 崎いくしま	1日(金)午後1時から すすき・水・雑詠(A·B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	2日(土)午後1時から ケース・慌てる・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
川 柳 塔 みちのく	2日(土)午後4時から 裏切る・人形・なごやか	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぽ二階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川柳塔なら	7日(木)午後1時から 待機・土・化け	船橋フロムワン (船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ7分・JR奈良駅北歩5分 〒636-0144 奈良県生駒郡近鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
川 柳 塔打 吹	9 日(土)午後 1 時から ながなが・内緒・急	倉吉市上灘町上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川 柳 塔まつえ	9日(土)午後1時半から 野菜・調教・台詞	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
川 柳 塔わかやま	10日(日)午後1時から 自慢・すっきり・オブラート 揺れているもの「揺れる」は詠み込み不可	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
八尾市民 川 柳 会	10日(日)午後 6 時から ちりぢり・沈む・首・表情	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
西宮北口川 柳 会	11日(月)午後 1 時から 根・困る・派手・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
川 柳 塔唐津支部	11日(月)午後1時半から 荷・公園・切る	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田天満町1-2-13 仁部四郎
ほたる 川 柳 同 好 会	12日(火)午後 1 時から 願う・選挙・欲	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
尼 崎 展 無 無 会	12日(火)午後 1 時半から 風・惚れる・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス級番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
高槻川柳 サークル 卯 の 花	14 日 (木) 正 午 か ら 舵・憎い・羅針盤・とぼける 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
堺川柳会	14日(木)午後 1 時から 親・破る・(折り句)めがね	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑

編 後

代り、より良い川柳塔誌に

号から編集後記を書かせて お・宮園射月芳・西出楓楽の いただいた。初めは田中正 伝いをして、平成三年一月 一年から編集のお手 小池しげ けられると思っていたが、 なることを祈っている。 また残念でもある。

る。 多いが実に多くの勉強をす ることとなり、申し訳なく 心ならずも任期途中で辞め 主婦が社会に出ると、壁も ★現主幹在任中は何とか続 趣味の世界とはいえ、 家庭の

坊編集長が毎月、

らの年賀状で、 あ ゆ

私が川柳を知ったのは従姉妹か 五七五を作るよう

なり、54歳で悲しいお別れになり が、最後の投句は娘さんの代筆と 川柳を愛し、共に語ってきました れもそのはず、 当時彼女は38歳で

と入って来られた太田藍子さんと ことにしました。戸惑いつつそっ た。昭和56年、 ご一緒の会へ毎月投句していまし にと言われて、老人ホームの方も 心者教室の募集があり、参加する 「おじいさん、おぼあさんばかり 市の広報に川柳初 らご指導を頂いて参りました。 今年で無事19年を迎えることが出 と命名して頂いた川柳サークルも ました。高鷲亜鈍先生に「花の輪 講師の里小路先生には最初か

ですね」が最初の会話でした。そ 願っています。 つまでもお元気で、ご指導のほど (平松かすみ

平成八年には高須賀金太・

三氏と私は二人ずつ交代、

楓楽・私の隔月交代。

楓楽・私の三人が三ヶ月に

重な体験は有難かった。 らねばならず、数多くの貴 締切など守るべきことは守

回ずつ書き続けてきた。

とか三年九ヶ月、大過なく 頼りなかったと思うが、何 ことも多く、みなさんには 仕事を続けることが出来た。 ★専業主婦で不慣れな素人 編集長に、お気に召さぬ 〇映画 地が舞台だったので、何だ れから行くイタリアの観光 興味を持っていたのと、こ 旅行の往きの国際線機内で ドショー一ヵ月前に観た。 である。以前予告篇を見て ーリブリー」をロー て欲しいという、彼の父親 息子ディッキーを連れ戻し 〇ヨーロッパで遊び暮らす とはありますか」 の人生を欲しいと思ったこ 映画広告のコピーは「他人 回の方が原作に忠実と聞く。 ちょっとしたきっかけでキ O他人の人生を自分のもの だりは、 彼になりすまして逃げるく レ、殺人に至る。 キーに対するトムの感情が、 スリルに満ちてい

坊前編集長と隔月交代、 を仰せつかり、一年間は正 ★平成八年十二月に編集長

月十三日急遽入院された。 ている。今後、新しい人に 私も家人の緊急入院のため 信さんが体調を崩され、 ★今年一月から編集部に入 の欄に駄文を重ねてきた。 成十年一月号からは毎月こ 病室でこの記事を書い 各地柳壇担当の小林周 心から御礼申します。(み) 気持の良いチームワークが 感謝申し上げます。また、 偏に同人・誌友のみなさん 何よりの支えとなり改めて 印刷を含む編集メンバーの の御理解と御協力の賜物と

か得をした気分であった。

から仕事の依頼を受けた、

に出来るのは俳優で、

演技

〇ご存知の方も多いと思う っぱい」と同じ原作の小説 ンを世に出した「太陽がい 『トム・リプリー』で、今 数十年前アラン・ドロ のように生れついたディッ 出来ハンサムで快活、 O働かなくても 贅沢三昧が ドラマである。 貧しい青年トムが主人公の 太陽 する醍醐味はよく聞く。 ともなさそう。 きるのだから、 ョンで他人になって作句で れど川柳だって、 うらやむこ フィクシ

128

その後

	柳塔・			種目「
2				」 発表(11月号)
	2			地名
5				姓·雅号
a				

同人・ 誌友 マルで囲んでください。

作 品 募集

愛 水 JII 課題吟 茴 初 香の花 步教室 染 煙 柳 (3句) 帖 抄 塔 「美しい」(3句) (8句) (8句

ti 1 (3句 3句 荷

桌 3

711 橘 児 叶 野 谷 1 五楽庵 煮 楓 公 和 大 歌了 楽 蛙 選 選 選

12 月号

振替○○九八○一五一三三六八番

社

」「責任」 音 漬ける

初歩教室 中

本社9月句会

席 会

費 題

投句料

500円

平川

の10時から16時までにお願い塔本社事務所へのご連絡は、

願いいたした

曜

ます。

柳塔

ます

(各題2句以内)

11

月号発表

9月15

締

切

定

価

六

百

円

料

76

裁 当日発表

意 艷 5

701 橘

内

薫 月 恭

天王寺区石ヶ辻町19-12 ·鉄谷町9丁目徒歩8分·近鉄上 電06.6772.1 H 葉 本町 冬 徒步 葉

地下

題

噂

F

き

月7

日

木

後

5

時

#

アウィー 9

怖 選 選 分

本社10月句会は9月24日の第6 回川柳まつり記念句会として開 催いたします。

室への投句は、

(3) 各欄

|| 各欄への投句数および投句締切期日|| とてください。 || してください。 || してください。ただし茴香の花欄は

ただし茴香の花欄は女性だけ 同人・誌友に限り、

(県・市名)

を明

の厳守をお願

11

川柳塔柳箋を使用組吟)および初歩料

用教

本誌最終ペー

(4)

夜市川柳募集

第4回「息子」 板尾岳人選 ハガキに3句 9月末締切 投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑方 堺川柳会

₹545

〇〇年(平成十二 年分 人阪市阿倍野区 印刷所 発行人 七千九百円 電話(三)公元一六九 美 JII 年 九 明町 柳 高 月

半年分 四 干 (送料共) ii Н

ウエムラ第2ビル202号室

の投句に つい

の投句用紙を使用してください。年分以上前納の定期購読者)に限り、1川柳塔欄へのお布に厚り JII 、は誌友

È

催

取県川柳作家協会・鳥取県文化団体連合会・鳥取県

0857-23-4672

連

先

欠席投句· 月

前夜祭· 20 柳

宿泊申込先)

相生町3

4

森田熊生方

希望者は

8

31日

までに申

滔 夜祭のみ

.

0

円円日

前夜祭締

9月10 0

0

円

食呈)

投

句費切

=680

第24回鳥取県

領川

大会実行委員会

会日 第 と選者 24 П 電話 085~ 東 10 元之 元 元 元 元 元 元 元 元 元 8日 席題なし) 午前9 132 莊 時30 0 分開場 111

第

7

鳥

取

(沢松崎駅下車すぐ)

中八松小恒森小橘 原木本澤弘中原高 諷千文誌衛惠爽薫津 美 人代子学山学介風 選選選選選選選

笛

PE

自費出版 川柳・俳句・エッセイ・小説



チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を. あなたの思いをかたちにします

〒530-0022 大阪市北区浪花町日番4号 TEL.FAX (06)6372-1178

8